

有馬富士公園線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

福島平唐山遺跡

福島古墳群

福島龍王谷遺跡

平成11年3月

兵庫県教育委員会

埋蔵文化財発掘調査報告書

ふくしまへいからやま いせき ふくしま こ ふんぐん ふくしまりゅうおうたに
福島平唐山遺跡・福島古墳群・福島龍王谷遺跡

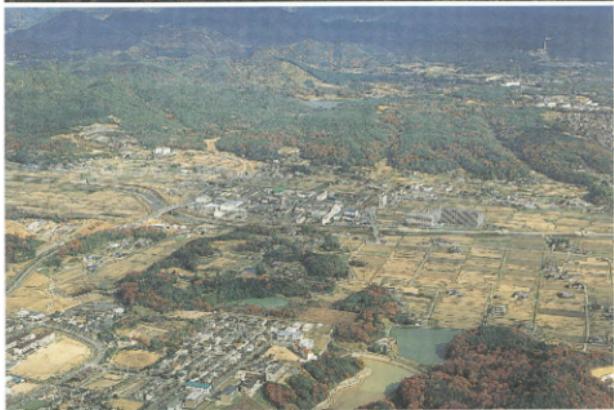


平成11年3月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景
(南から)



遺跡遠景
(西から)



福島平唐山遺跡
(西から)



福島古墳群遠景



福島古墳群
(東から)



福島1・2号墳
(西から)



福島 1・2号墳
出土土器



福島 1号墳
出土装飾壺



福島15号墳出土土器



福島23号墳出土土器



福島平唐山遺跡
出土須恵器

例　　言

1. 本書は兵庫県三田市福島字横原・平唐山・切池・鳥尾に所在する福島龍王谷遺跡、福島平唐山遺跡、福島1・2・15・22・23号墳の発掘調査報告である。
2. 調査は兵庫県による県道有馬富士公園線道路改良工事に伴って、兵庫県北摂整備局の依頼を受けて実施したものである。
3. 発掘調査は兵庫県教育委員会が平成3年度から平成5年度から実施し、整理調査は平成9・10年度吉識が中心となり実施した。鉄製品の保存処理は加古知恵子が中心となり実施した。
4. 遺跡の測量は国土座標第Ⅳ系を基準として設置された道路センター杭を利用して行ない、図版1・2の方位は座標北、それ以外は磁北である。
5. 本書に記した標高は東京湾平均海水準（T.P）を基準としている。
6. 本書の執筆分担は本文目次に記したとおりである。本書の編集は吉識が行なった。
7. 本書の遺物番号は各遺跡・各古墳ごとにつけ、本文・挿図・図版とも共通させている。ただし鉄製品は通し番号とした。
8. 本書にかかる記録類や遺物類は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が保管している。
9. 発掘調査の実施にあたっては、調査補助員中北敦子をはじめ、北摂整備局、高島千恵子、西本寿子、三田市教育委員会など、各氏・各関係機関の方々には多大な協力を頂いた。記して感謝の意を表します。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 地理的環境	1 (中村)
第2節 歴史的環境	1 (中村)
第3節 調査の経過	
1. 調査に至る経過	5 (吉讃)
2. 確認調査の経過	5 (吉讃)
3. 全面調査の経過	6 (吉讃)

第2章 福島平唐山遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と立地	7 (吉讃)
第2節 福島22号墳	8 (吉讃)
第3節 墳墓群の調査	9 (吉讃・中村)

第3章 福島古墳群の調査

第1節 福島古墳群の概要	17 (吉讃)
第2節 福島1・2号墳の調査	19 (中村)
第3節 福島15号墳の調査	27 (吉讃)
第4節 福島23号墳の調査	33 (吉讃)

第4章 福島・龍王谷遺跡の調査

37 (吉讃)

第5章 まとめ

第1節 出上土器について	41 (吉讃)
第2節 遺跡の変遷	43 (吉讃)

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	3
第2図	SX-04	11
第3図	包含層出土・表面採集遺物	16
第4図	第1主体部遺物出土状況	21
第5図	第1主体部棺外遺物出土状況	22
第6図	第2主体部遺物出土状況	23
第7図	2号墳遺物出土状況	25
第8図	SK-01	36

実測図版目次

図版1	調査区配置図		
図版2	福島古墳群分布図		
図版3	福島平唐山遺跡 全体図		
図版4	福島平唐山遺跡 福島22号墳と方形周溝墓配置図		
図版5	福島平唐山遺跡 福島22号墳全体図		
図版6	福島平唐山遺跡 福島22号墳		
	1. 墳丘西裾礫群	2. 墳丘西裾礫群	3. 主体部
図版7	福島平唐山遺跡 1. SX-01・02	2. SX-01主体部	
図版8	福島平唐山遺跡 1. SX-03	2. SX-03主体部	
図版9	福島平唐山遺跡 1. SX-05	2. SX-05上器群	
図版10	福島平唐山遺跡 1. SX-05主体部1	2. SX-05主体部2	
図版11	福島平唐山遺跡 1. SX-06	2. SX-06主体部	
図版12	福島平唐山遺跡 SX-07		
図版13	福島平唐山遺跡 SX-07主体部1		
図版14	福島平唐山遺跡 SX-07主体部2		
図版15	福島平唐山遺跡 1. SD-09	2. SD-10	
図版16	福島平唐山遺跡 南半の墳墓群		
図版17	福島平唐山遺跡 1. SK-01 2. SK-02 3. SK-03		
図版18	福島平唐山遺跡 1. SK-04		
図版19	福島平唐山遺跡 1. SK-04蓋石懸架状況		
図版20	福島平唐山遺跡 1. SK-04主体部		
図版21	福島平唐山遺跡 1. SK-05		
図版22	福島平唐山遺跡 出土遺物 1. 22号墳 SX-03 SX-05 SX-06 SX-08 SD-08 SD-09 SX-02・03間		
図版23	福島平唐山遺跡 出土遺物 2. SK-01下方土器群 SK-01		
図版24	福島平唐山遺跡 出土遺物 3. 尾根上表面採集土器		
図版25	福島1・2号墳 調査前の墳丘測量図		

- 図版26 福島1・2号墳 墳丘測量図
- 図版27 福島1号墳 墳丘断面
- 図版28 福島1号墳 第1主体部
- 図版29 福島1号墳 第2主体部
- 図版30 福島1号墳 墳丘外土壤
- 図版31 福島1号墳 墳丘出土遺物接合関係図
- 図版32 福島1号墳 出土遺物1 第1・第2主体部
- 図版33 福島1号墳 出土遺物2 墳丘上・塙丘裾(装飾壺)
- 図版34 福島1号墳 出土遺物3 墳丘上・塙丘裾(装飾壺)
- 図版35 福島1号墳 出土遺物4 墳丘上・塙丘裾
- 図版36 福島1号墳 出土遺物5 墳丘上・塙丘裾
- 図版37 福島2号墳 1. 塙丘断面 2. 塙丘測量図
- 図版38 福島2号墳 横穴式石室
- 図版39 福島2号墳 出土遺物
- 図版40 福島15号墳 調査前の塙丘測量図
- 図版41 福島15号墳 塙丘測量図
- 図版42 福島15号墳 塙丘断面
- 図版43 福島15号墳 上層の石室
- 図版44 福島15号墳 下層の石室
- 図版45 福島15号墳 出土遺物1
- 図版46 福島15号墳 出土遺物2
- 図版47 福島15号墳 出土遺物3
- 図版48 福島23号墳 塙丘測量図
- 図版49 福島23号墳 1. 横穴式石室 2. 石室内遺物出土状況
- 図版50 福島23号墳 出土遺物
- 図版51 福島龍王谷遺跡 調査区全体図
- 図版52 福島龍王谷遺跡 道路状遺構とSK-03
- 図版53 福島龍王谷遺跡 1. SK-01 2. SK-04・05
- 図版54 福島龍王谷遺跡 出土遺物

写真図版目次

- 写真図版1 福島平唐山遺跡 1. 遠景（南西から）
2. 遠景（南西から）
3. 全景（西から）
- 写真図版2 福島平唐山遺跡 1. 調査後近景（南西から）
2. 方形周溝墓群全景（南から）
3. 南半の墳墓群（北から）
- 写真図版3 福島平唐山遺跡 1. 福島22号墳 調査前の状況（南から）
2. 全景（南から）
3. 全景（南西から）
- 写真図版4 福島平唐山遺跡 1. 福島22号墳 主体部全景（東から）
2. 主体部東小口の礫群（北から）
3. 主体部土層断面（東から）
- 写真図版5 福島平唐山遺跡 1. 福島22号墳 墳丘裾部の状況（西から）
2. 墳丘西裾部の礫群（西から）
3. 墳丘西裾部の礫群（南から）
4. 墳丘南裾部の礫群（西から）
5. 墳丘東方の礫群（東から）
- 写真図版6 福島平唐山遺跡 1. 方形周溝墓群全景（南から）
2. 斜面上方側の方形周溝墓群（南東から）
3. SX-01 全景（南から）
- 写真図版7 福島平唐山遺跡 1. SX-01 全景（北から）
2. 主体部石棺検出状況（西から）
3. 主体部石棺（西から）
- 写真図版8 福島平唐山遺跡 1. SX-02 全景（北から）
2. SX-02・03 溝埋土断面（北から）
3. SX-02・03 溝内土器出土状況（北から）
- 写真図版9 福島平唐山遺跡 1. SX-03 全景（北から）
2. 主体部木棺（東から）
3. 主体部内上器出土状況（西から）
- 写真図版10 福島平唐山遺跡 1. SX-03 主体部木棺理土断面（西から）
2. 主体部西小口の礫群（東から）
3. 墓壙完掘状況（西から）
- 写真図版11 福島平唐山遺跡 1. SX-04 全景（西から）
2. 主体部木棺検出状況（西から）
3. 墓壙完掘状況（西から）
- 写真図版12 福島平唐山遺跡 1. SX-05 全景（西から）
2. 第1・2主体部木棺検出状況（西から）

3. 北東隅の土器群（西から）
写真図版13 福島平唐山遺跡 1. SX-06 全景（西から）
2. 主体部木棺検出状況（西から）
3. 主体部内土器出土状況（西から）
写真図版14 福島平唐山遺跡 1. SX-07 第1主体石棺（西から）
2. 第1主体石棺の床面細部（東から）
3. 第1主体石棺と墳丘の関係（北から）
写真図版15 福島平唐山遺跡 1. SX-07 第2主体木棺（西から）
2. 第2主体木棺完全掘出状況（西から）
3. 墳丘断面（西から）
写真図版16 福島平唐山遺跡 1. 南半の墳墓群全景（北から）
2. SK-01 木棺検出状況（北から）
3. SK-01 木棺内鉄器出土状況（東から）
写真図版17 福島平唐山遺跡 1. SK-02 木棺検出状況（北から）
2. SK-03 木棺検出状況（北から）
3. SK-04 石棺蓋石の状況（北から）
写真図版18 福島平唐山遺跡 1. SK-04 石棺検出状況（北から）
2. SK-04 石棺断面（東から）
3. SK-05 石棺蓋石の状況（北から）
写真図版19 福島平唐山遺跡 1. SK-05 石棺検出状況（北から）
2. SK-07 検出状況（南から）
写真図版20 福島平唐山遺跡 出土遺物（SX-03・SX-05・SX-06・SK-01）
写真図版21 福島平唐山遺跡 出土遺物（SK-01下方土器群）
写真図版22 福島平唐山遺跡 出土遺物（包含層出土・表面採集遺物）
写真図版23 福島1号墳 1. 調査前の状況（東から）
2. 墳丘（南から）
3. 墳丘（東から）
写真図版24 福島1号墳 1. 北側周溝断面（西から）
2. 南側周溝断面（西から）
3. 西側周溝断面（南から）
4. 東側周溝断面（南から）
写真図版25 福島1号墳 1. 全景（南から）
2. 全景（西から）
3. 墳丘上遺物出土状況（東から）
写真図版26 福島1号墳 1. 第1主体 全景（西から）
2. 全景（西から）
3. 全景（南から）
写真図版27 福島1号墳 1. 第1主体 上層土器群（西から）
2. 土器枕と上層土器群（西から）

- 写真図版28 福島1号墳 1. 第1主体 下層土器群（北から）
 2. 下層土器群（南から）
 3. 下層上器群（東から）
- 写真図版29 福島1号墳 1. 第1主体 土器枕（西から）
 2. 棺内鉄器出土状況（東から）
 3. 棺裏込め断面（西から）
- 写真図版30 福島1号墳 1. 第1主体 西小口裏込め断面（北から）
 2. 墓塚完掘状況（東から）
- 写真図版31 福島1号墳 1. 第2主体 全景（東から）
 2. 全景（東から）
- 写真図版32 福島1号墳 1. 第2主体 土器枕（東から）
 2. 墓塚完掘状況（東から）
- 写真図版33 福島1号墳 1. 墳丘断面（南から）
 2. 墳丘断面（西から）
 3. 墳丘断面細部（南から）
- 写真図版34 福島1号墳 1. 2号墳との位置関係（東から）
 2. 墳丘外土壤（東から）
- 写真図版35 福島1号墳 出土遺物1 装飾壺
- 写真図版36 福島1号墳 出土遺物2 装飾壺 楯形細部
- 写真図版37 福島1号墳 出土遺物3 装飾壺 楯形細部
- 写真図版38 福島1号墳 出土遺物4 装飾壺 楯形細部
- 写真図版39 福島1号墳 出土遺物5 土器
- 写真図版40 福島1号墳 出土遺物6 土器
- 写真図版41 福島1号墳 出土遺物7 鉄器
- 写真図版42 福島1号墳 出土遺物8 土器細部
- 写真図版43 福島2号墳 1. 調査前の状況（東から）
 2. 全景（南東から）
 3. 石室内遺物出土状況（南から）
- 写真図版44 福島2号墳 1. 石室全景（南から）
 2. 石室東壁の状況（西から）
 3. 石室西壁の状況（東から）
- 写真図版45 福島2号墳 1. 墳丘全景（東から）
 2. 墳丘全景（南東から）
 3. 墳丘断面（東から）
- 写真図版46 福島2号墳 出土遺物
 1. 遠景（西から）
 2. 遠景（北東から）
 3. 全景（東から）
- 写真図版47 福島15号墳 1. 調査前の状況（北から）

2. 調査前の状況（南東から）
3. 調査前の状況（南東上から）
- 写真図版49 福島15号墳
1. 墳丘全景（南東から）
2. 墳丘全景（南東から）
3. 上層石室検出状況（南東から）
- 写真図版50 福島15号墳
1. 上層石室全景（南東から）
2. 上層石室全景（南東から）
- 写真図版51 福島15号墳
1. 上層石室 蓋石の状況（北から）
2. 上層石室 入口石組（南東から）
3. 上層石室 蓋石撤去後の状況（南東から）
4. 上層石室 中央石組撤去後の状況（南東から）
- 写真図版52 福島15号墳
1. 上層石室 中央石組（南東から）
2. 上層石室 中央石組西側面（南から）
3. 上層石室 中央石組東側面（南から）
4. 上層石室 中央石組撤去後の石室床面（南東から）
- 写真図版53 福島15号墳
1. 上層石室 東側壁構築状況（西から）
2. 上層石室 西側壁構築状況（東から）
3. 上層石室 奥壁構築状況（南東から）
- 写真図版54 福島15号墳
1. 上層石室 煙出し蓋石状況（西から）
2. 上層石室 蓋石撤去後の煙出し（西から）
3. 上層石室 煙出しと石室（東から）
4. 上層石室 煙出し全景（東から）
5. 上層石室 煙出し南壁構築状況（北東から）
6. 上層石室 煙出し北壁構築状況（南東から）
7. 上層石室 奥壁と下層石室床面（南東から）
8. 上層石室 東側壁と下層石室床面（南から）
- 写真図版55 福島15号墳
1. 下層石室 全景（南東から）
2. 下層石室 全景（南東から）
- 写真図版56 福島15号墳
1. 下層石室 奥壁構築状況（南東から）
2. 下層石室 西側壁構築状況（東から）
3. 下層石室 床面の礫群（東から）
- 写真図版57 福島15号墳
1. 下層石室 墓道の状況（南東から）
2. 下層石室 墓道断面（南東から）
3. 下層石室 墓道遺物出土状況（南東から）
- 写真図版58 福島15号墳
1. 下層石室 墓壙と石室（南東から）
2. 下層石室 墓壙と石室基底部（南東から）
3. 下層石室 墓壙完掘状況（南東から）
- 写真図版59 福島15号墳
1. 墳丘断面（南東から）
2. 墳丘断面（北西から）

3. 塙丘撤去後の状況（南東から）
写真図版60 福島15号墳 出土遺物1
写真図版61 福島15号墳 出土遺物2
写真図版62 福島15号墳 出土遺物3
写真図版63 福島15号墳 出土遺物4
写真図版64 福島23号墳 1. 22号墳との位置関係（南から）
2. 調査前の状況（南から）
3. 全景（南から）
写真図版65 福島23号墳 1. 石室全景（南から）
2. 石室床面の状況（南から）
3. 石室床面遺物出土状況（南から）
写真図版66 福島23号墳 1. 奥壁壁構築状況（南東から）
2. 西側壁構築状況（東から）
3. 東側壁構築状況（西から）
写真図版67 福島23号墳 1. 敷石撤去後の石室床面（南西から）
2. 墓壠完掘状況（東から）
3. 周溝断面（南から）
写真図版68 福島23号墳 1. SK-01検出状況（南西から）
2. SK-01検出状況（北西から）
3. SK-01完掘状況（北西から）
写真図版69 福島23号墳 出土遺物1
写真図版70 福島23号墳 出土遺物2 土器細部と鉄器
2. SK-01検出状況（北西から）
3. SK-01完掘状況（北西から）
写真図版71 福島龍王谷遺跡 1. 遺跡遠景（南から）
2. 遺跡全景（北から）
3. 調査区北半の遺構群（南東から）
写真図版72 福島龍王谷遺跡 1. 調査区西壁の土層堆積状況（南東から）
2. 柱穴群（南東から）
3. SK-01検出状況（南東から）
写真図版73 福島龍王谷遺跡 1. 道路状遺構とSK-03（北西から）
2. SK-03検出状況（北西から）
3. SK-03西壁石組状況（北東から）
写真図版74 福島龍王谷遺跡 1. 道路状遺構の礫群（南東から）
2. SK-04・05検出状況（西から）
3. SK-04埋土断面（西から）
写真図版75 福島龍王谷遺跡 出土遺物1
写真図版76 福島龍王谷遺跡 出土遺物2 土器細部と鉄器

第1章 はじめに

第1節 地理的環境

遺跡が位置する三田市は、摂津地方の北西部に位置し、東は川辺郡猪名川町・宝塚市、南は神戸市北区、西は美嚢郡吉川町・加東市東条町・同郡社町・多紀郡今田町、北は同郡丹南町・同郡篠山町に接する。市域北部から東部にかけて標高500~600m級の奥山・千丈寺山・大船山がある。西部には武庫川が南流し、青野川・黒川・相野川などの支流が集まる中流域の三田盆地を中心に耕地が開けている。

この三田盆地は東西20km、南北15kmで、西は標高250m前後の東播丘陵に、東は北摂丘陵に、南は六甲山によって囲まれている。地質は主に流紋岩と神戸層群の礫岩・砂岩などからなる。盆地内には河岸段丘が発達している。

三田盆地の中央部を南流する武庫川は流長65.436kmを測り、多紀郡丹南町に発し、三田市、宝塚市、西宮市を経て大阪湾に注いでいる。中流の三田~宝塚間では250mの深さの渓谷をなして流下し、先行性河川と考えられる。

今回報告する遺跡は、この武庫川が三田盆地を流れるところで、武庫川の東岸の丘陵から平地にかけて立地している。特に平唐山遺跡から武庫川の眺望は良好である。

第2節 歴史的環境

三田盆地の歴史は末地区的溝向遺跡で後期のナイフ形石器2点が確認されており、旧石器時代にまでさかのばる。しかし、総数は少ない。

縄文時代になると、平方遺跡から草創期の石器が出土しているのを始め、加茂・六地蔵遺跡で土坑内から後期の土器片が出土している。また、対中遺跡からは晩期の長原式土器が出土している。しかし、遺跡の全体を把握するまでには到っていない。

ところが、弥生時代になると、遺跡の数、範囲ともに激増する。まず前期にはいずれも新段階ではあるが、出土例がいくつか確認されるようになり、特に対中遺跡では縄文集落との関係が注目される。

中期前半には、塙出遺跡で石包丁の製品・未製品が50点以上出土しており、供給地として注目されているが、弥生時代の中でも特に遺跡数の増大が顕著なのは中期後半になってからである。当遺跡周辺の福島・長町遺跡(21)からは方形竪穴住居1棟や溝が、三輪・餅田遺跡(43)、三輪・宮ノ越遺跡(42)からも遺物の出土と土坑などの遺構が検出されている。特に、遺跡と武庫川を挟んで反対側に位置する遺跡は、北摂ニュータウンの開発にともなって多くの調査が行われており、次第にその様相が明らかになりつつある。平成7年度に調査が行われた有鼻遺跡では竪穴住居65棟、掘立柱建物5棟、段状遺構70箇所以上などが検出されており、この時期に武庫川を望む丘陵地に集落が展開していたことを示している。また、同様の立地を示す遺跡として平方遺跡、中西山遺跡、西山遺跡(48)、奈カリ寺遺跡がある。平方遺跡では竪穴住居7棟、掘立柱建物1棟、段状遺構1基などが検出され、小銅鐸の鋳型も出土している。中西山遺跡では竪穴住居1棟が検出され、平方遺跡がさらに広がることを示している。奈カリ寺遺跡は竪穴住居30棟、溝、段状遺構、土器棺などが検出された。西山遺跡(48)では方形周溝墓が検出された。

一方、下深田遺跡（60）、下深田大山遺跡（61）、貴志・播戸遺跡（55）は低地の扇状地に立地する遺跡で、いずれも住居址が検出されている。

弥生時代後期になると、扇状地などに分布する遺跡が増え、丘陵地の遺跡が終息を迎える。当遺跡周辺の加茂・六地蔵遺跡でも住居址が検出されている。貴志・播戸遺跡（55）では住居跡のほか方形周溝墓も検出された。川除・蘿ノ木遺跡（46）では集落、墳墓が検出され、古墳時代へと継続している。また、注目するものとして中西山遺跡では木棺墓が検出され、板状鉄斧が出土している。

古墳時代では、墳墓としては円墳と方形台状墓の奈良山1・2号墳（49）がある。集落跡は弥生時代から継続する川除・蘿ノ木遺跡（46）がある。後期後半では芳ノ塚1号墳があり、埴輪が出土している。

古墳時代も後期後半になると、爆発的に一大高潮を迎え、遺跡数が増大する。武庫川を望む東西の丘陵上には古墳群が築造される。主体部には横穴式石室を採用するものと木棺直葬を採用するものがあるが、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が集中する傾向があるのに対して、木棺直葬を埋葬施設とする古墳は全体に散在する傾向にある。当遺跡周辺でも、今回報告する福島古墳群（23）を始めとして、加茂古墳群（11）、城ヶ岡古墳群（18）、萬代古墳群（19）、青龍寺裏山古墳群（20）、上龍王谷古墳群（25）、大原古墳群（29）、千ヶ坂古墳群（33）などがあり、密に分布している。調査、報告された古墳としては中西山3・4号墳、平方古墳群などがあるが、平方古墳群は横穴式木室という特殊な埋葬施設を採用している。集落遺跡としては、川除・蘿ノ木遺跡（46）があり、他に平方遺跡、平方西遺跡などの丘陵上の遺跡もある。また、生産遺跡として末窯跡群の郡塚窯（2）、平方窯跡群などがある。古墳時代終末期には青龍寺裏山1・2号墳（20）が当遺跡周辺に築造されている。

古代では当遺跡は浜津国有馬郡大沖郷に属した。三輪、貴志などの地名にも窺えるように、当地は古代の氏族と関係していた。金心寺は白鳳年間に建立されたと考えられており、本尊の弥勒菩薩座像の胎内からは「白雉元年」の墨書き銘が見られる。

遺跡からは、奈良山遺跡・西山遺跡（48）・樅下ヶ谷遺跡において製鉄関係の遺構が確認され、特に奈良山遺跡では7世紀前半から8世紀の鍛冶工房跡が検出された。

中世では有鼻遺跡から150基の中世墓が検出された。また、三田盆地には中世から戦国時代に小規模な山城が多数築城されており、中西山城、平方城、釜屋城などが挙げられる。

天正2年（1574）から同6年までは荒木平太夫重堅によって三田城の城下町（65）が整備された。遺跡からは奈良山遺跡において近世墓が検出されている。

<参考文献>

- 兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』1993 兵庫県文化財調査報告第125号
三田市教育委員会『三田市遺跡分布図』1989 兵庫県三田市文化財調査報告第6号
兵庫県教育委員会『川除・蘿ノ木遺跡』1992 兵庫県文化財調査報告第104号
『角川日本地名人辞典』28 兵庫県 1988年



表1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	末野古墳群	古墳時代	39	三輪古墳群	古墳時代
2	群塚窓跡群	古墳時代～古代	40	二輪明神窓跡	近世
3	貝谷窓跡	古代	41	土ノ谷古墳	古墳時代
4	落合窓跡群	古代	42	二輪・宮ノ越遺跡	弥生時代～中世
5	落合古墳	古墳時代	43	三輪・崩出遺跡	弥生時代～中世
6	川瀬窓跡	古代	44	池ノ谷古墳	古墳時代
7	溝ノ上古墳群	古墳時代	45	高次・北垣内遺跡	弥生時代～中世
8	加茂・池ノ谷遺跡	古代	46	川除蘿木遺跡	弥生時代～中世
9	加茂・小山城跡	中世	47	西山西遺跡	弥生時代～古代
10	加茂・大谷遺跡	弥生時代	48	西山遺跡	弥生時代～古代
11	加茂古墳群	古墳時代	49	奈良山古墳群	古墳時代
12	加茂・吉田遺跡	弥生時代～中世	50	貴志居館跡	中世
13	金毘羅山山頂遺跡	散布地	51	貴志古墳群	古墳時代
14	加茂・野山遺跡	散布地	52	下所遺跡	弥生時代～中世
15	東野上・中尾遺跡	散布地	53	五良谷古墳群	古墳時代
16	東野上・長尾遺跡	散布地	54	與元古墳群	古墳時代
17	東野上城跡	中世	55	貴志・樅戸遺跡	弥生時代～中世
18	城ヶ岡古墳群	古墳時代	56	矢ノ原古墳群	古墳時代
19	萬代古墳群	古墳時代	57	貴志遺跡	弥生時代～中世
20	青龍寺裏山古墳群	古墳時代	58	下深田・城戸遺跡	中世
21	福島・長町遺跡	弥生時代～中世	59	稻田居館跡	中世
22	福島・平肩山遺跡	弥生時代～古墳時代	60	下深田遺跡	弥生時代～中世
23	福島古墳群	古墳時代	61	下深田・大山遺跡	弥生時代
24	福島・切泡遺跡	散布地	62	下深田・坂ノ下遺跡	中世
25	上籠王谷古墳群	古墳時代	63	三田谷古墳	古墳時代
26	福島・龍王谷遺跡	中世	64	天神遺跡	弥生時代～中世
27	善門寺址	中世	65	三田城（障屋）跡	中世～近世
28	大原・姫ヶ谷遺跡	散布地	66	古城遺跡	弥生時代～中世
29	大原古墳群	古墳時代	67	下角古墳	古墳時代
30	大原古墳群	古墳時代	68	辻之浦古墳群	古墳時代
31	大原・蘿南遺跡	散布地	69	西ノ曾古墳群	古墳時代
32	大原城跡	中世	70	富士山古墳群	古墳時代
33	千ヶ坂古墳群	古墳時代	71	川之上古墳群	古墳時代
34	川除古墳群	古墳時代	72	志手原窓跡群	近世
35	大原・本谷散布地	古墳時代	73	志手原新窓跡	近代
36	茶臼山城跡	中世	74	虫尾新田窓跡	近世～近代
37	三輪上野窓跡	近世	75	梅ノ木古墳群	古墳時代
38	犬狗鼻窓跡	近世			

第3節 調査の経過

1. 調査に至る経過

兵庫県北摂整備局（以下整備局）の県道有馬富士公園線道路改良工事計画は、同局の「県立有馬富士公園」計画の一貫として実施されるもので、国道176号から公園への進入路に充てられる計画である。

この道路計画予定地は、三田市街の北方郊外、開発の進む北摂ニュータウンの玄関口として設計されたJ R福知山線の新三田駅の東側に位置し、予定地内の地形は武庫川の形成した平野部とその東方の丘陵地帯で構成されている。平野部には福島龍王谷遺跡・福島長町遺跡が、丘陵部には福島古墳群・福島切池遺跡がすでに周知されており、予定地内に埋蔵文化財が存在するのは確実とみられた。

そこで、周知の埋蔵文化財の位置確認などのため、平成2年5月に分布調査を実施した。その結果、福島龍王谷遺跡・丘陵上に福島切池遺跡、福島1・2・15・22号墳、福島平唐山1号墳などのすでに周知されている遺跡のほか、平野部を望む山裾や丘陵上で、遺物散布地が所在していることが判明した。

分布調査の結果を受け、平成4年2月に福島龍王谷遺跡・福島長町遺跡・福島切池遺跡などの散布地について確認調査を実施した（第1次確認調査）。次いで、平成4年10月に古墳5基および新たに見つかった古墳状隆起2基について、確認調査を実施した（第2次確認調査）。この2回の確認調査の結果、予定地には福島龍王谷遺跡の一部と福島1・2・15・22・23号墳が所在することが明白になった。

そこで、平成4年10月から平成5年3月に福島龍王谷遺跡・福島15・22・23号墳を対象に、全面調査を実施した（第1次全面調査）。この内の福島22号墳の調査で、その周囲から方形周溝墓群が検出され、その広がりが問題になった。また整備局による伐木事業の際、22号墳南方の尾根斜面から須恵器などの出土があった。そこで整備局と協議し、再度確認調査を実施することになった。

この確認調査は平成5年5月に実施した（第3次確認調査）。その結果、22号墳の南から西側の斜面に方形周溝墓群が、22号墳南方の尾根斜面でも遺物の出土があり、福島平唐山遺跡と名付けた。

ところがこの福島平唐山遺跡付近はすでに整備局による工事が発注されており、そのため急遽、福島平唐山遺跡の全面調査を実施することになり、平成5年7月から実施した（第2次全面調査）。これに引き続き平成5年11月から残っていた1・2号墳の全面調査を実施した（第3次全面調査）。

2. 確認調査の経過

確認調査は別表の通り、都合3回実施した。第1次確認調査は福島龍王谷遺跡・福島長町遺跡・福島切池遺跡を対象に実施した調査である。調査では、図版1のよう福島龍王谷遺跡・福島長町遺跡の所在する平野部から山裾に18本、福島切池遺跡が所在する丘陵上に5木のトレーンチを設定した。その結果、平野部側の福島龍王谷遺跡の範囲内のトレーンチ12において鎌倉時代の柱穴・溝・土壙が検出された。

第2次確認調査は福島1・2・15・22号墳と福島平唐山1号墳、および第1次確認調査の際に新たに発見された2基の古墳状隆起の計7ヶ所を対象とした確認調査である。調査においては、現状観察で明確に古墳と判断されるものについては、今後の全面調査に支障をきたす恐れがあるとから掘削を伴う調査は行わないこととし、不確実なものについてトレーンチ調査を実施することとして調査にあたった。

この結果、福島1・2・15・22号墳と1基の古墳状隆起の5基が古墳であることが判明し、周知の古墳とされていた福島平唐山1号墳は古墳ではないことが判明した。古墳と確認された古墳状隆起につい

第3節 洞査の経過

ては福島古墳群の最後の番号を採って福島23号墳と名付けた。

第3次確認調査は第1次全面調査の際に、福島22号墳の南側の尾根上や西側の斜面で検出された方形周溝墓群の範囲確認と、周辺の斜面で採集された遺物の性格確認のため実施した調査である。

調査の結果、22号墳の周溝墓群は調査区中央に南側から入り込む谷の西側に、標高約180m付近まで広がっていること、福島平唐山1号墳とされた尾根上から斜面にかけても地山整形痕が確認され、古墳時代後期の墳墓が存在する可能性が高いことが明らかになった。

3. 全面調査の経過

第1次全面調査は平成3・4年度の第1・2次確認調査の結果を受けて実施した全面調査で、対象となったのは武庫川沿いの平野部とそれに面した丘陵上の福島龍王谷遺跡、福島22・23号墳と、そこから直線距離で800m離れた丘陵を奥に入った福島15号墳の4遺跡である。

調査は平野部側から福島龍王谷遺跡、23号墳、22号墳、15号墳の順に進めることにし、平成4年11月11日、福島龍王谷遺跡の調査から開始した。この遺跡は平野部に位置し、機械の搬入が可能であることから、まず表土を機械力で除去する作業から始めた。そして人力による包含層掘削、遺構掘削と作業を進め、調査が終了したのは1月20日であった。

この福島龍王谷遺跡の調査に引き続き、22・23号墳の調査に移り、3月9日に22・23号墳の航空写真撮影を行なった。その後、23号墳については石室墓壠までの調査を行ない、22号墳および周囲の方形周溝墓については今後の調査が予想されることから、主体部までの調査に止めた。

この22・23号墳と並行して15号墳の調査も開始し、3月3日に墳丘の航空写真撮影を行なった。そして3月9日には上層石室の航空写真撮影を実施し、上層石室の調査終了後、古墳に伴う本来の石室である下層石室の調査に移り、3月20日に15号墳の調査は終了した。

第2次全面調査は、第3次確認調査で明らかになった福島平唐山遺跡を対象に実施したもので、調査開始から2ヶ月を経た9月28日に航空写真撮影を実施した。その後、22号墳の墳丘除去や各主体部の断ち割り調査を行なった。

第3次全面調査は、隣接する1・2号墳についての調査で、調査開始から1ヶ月が経った12月7日に航空写真撮影を行ない、その後1月10日までの間に、各主体部の断ち割り、墳丘除去作業を行なった。

表2 各調査の概要

調査名	担当者	調査期間	調査対象遺跡	調査面積	調査結果
第1次確認調査	種定淳介 西口圭介	平成4年2月17日 同年3月19日	福島龍王谷遺跡 福島長町遺跡 福島切池遺跡	308m ²	福島龍王谷遺跡で 柱穴等を確認
第2次確認調査	種定淳介 西口圭介	平成4年10月5日 同年10月7日	福島1・2・15 号22号墳 福島 平唐山1号墳 古墳状態記2基	32m ²	福島1・2・15・22 号墳、古墳状態記 1基が古墳である ことを確認(23号)
第3次確認調査	吉嶋雅仁 井本有二	平成5年5月10日 同年5月19日	福島平唐山遺跡	360m ²	方形周溝墓群の範 囲確認、地山整形 削除
第1次全面調査	輔老拓治 吉嶋雅仁	平成4年11月11日 平成5年3月24日	福島龍王谷遺跡 福島15・22・23 号墳	1,458m ²	笠形周溝から方形 周溝へ変化。15号墳 で再構築された石室
第2次全面調査	吉嶋雅仁 中村弘	平成5年7月27日 同年11月18日	福島平唐山遺跡	2,107m ²	方形周溝墓群、古 墳時代後期の右槽 ・木棺並出し
第3次全面調査	吉嶋雅仁 中村弘	平成5年11月10日 平成6年1月10日	福島1・2号墳	753m ²	1号墳で鏡陶器 2号墳で終末期の 小石室を検出

第2章 福島平唐山遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と概要

1. 位置 (図版1 写真図版1)

遺跡は武庫川東岸の平野部に沿うように、北に伸びる支尾根上に位置する。この尾根は三田市街の東方に広がる高原状の低平な丘陵地帯の北限、ほぼ東西に走行の主尾根から分岐して北西に派生する尾根であり、尾根の両側は急な傾斜で平野部や谷底に向かって落ち込む。尾根上には2段の平坦な面が形成されている。上段は主尾根から急傾斜で分岐した後の平坦面であり、尾根幅が広く、この先端がかつて福島平唐山1号墳とされた地点である。この先端から尾根は急傾斜で落ち込み、東西から谷部が入り込んで小さな鞍部が形成された後、下段の平坦面が北西に伸びる。上段と下段の比高差は約10mを測る。この下段平坦面は幅はそれほど広くないが、尾根断面は蒲鉾状となり、特に平野部に面した西斜面の尾根近辺は傾斜も緩やかである。

調査区は尾根の上段平坦部の先端から下段の尾根上平坦部および西斜面にかけて位置し、調査区中央は両側から入り込んだ谷とそれによって形成された尾根鞍部となる。調査区南半は上段平坦面の先端とそこから落ちる斜面であり、斜面の傾斜はきつい。調査区北半は尾根の下段平坦部と西斜面にあたり、斜面の傾斜は小枝尾根状の緩やかである。上段・下段とも尾根の向斜面は開墾されて山裾から平坦な段が階段状に連続し、調査区中央の鞍部では北側から尾根上にまで及んでいた。

弥生時代後期後半の埴丘墓である22号墳と弥生時代後期末～古墳時代前期の埴墓群7基が調査区中央から北半にかけて検出され、調査区南半では古墳時代後期の木棺墓1基や時期のはっきりしない木棺墓2基・箱式石棺2基・土塼1基・溝3条が検出された。これらの遺構の分布を見ると、調査区中央の尾根鞍部から南側には、全く埋葬施設の認められない空白域が存在し、北半の22号墳・埴墓群と南半の木棺墓・石棺墓とを隔てている。

調査区北半の22号墳と埴墓群は鞍部から伸びる下段の尾根上や西側から入り込んだ谷に面した斜面に、22号墳を中心に墓域を溝によって区画した周溝墓群が築かれている。22号墳は円形の裾部に溝や平坦面を巡らし埴丘を伴う。SX-01～05・07は斜面上方側を「コ」の字状に溝によって区画し、溝を共有あるいは連結させて築かれている。SX-06はSX-05からやや離れた斜面下方に築かれていた。

調査区南半の埴墓群は木棺墓3基・石棺墓2基からなり、尾根が鞍部に向かって落ちる急斜面に、斜面と平行して築かれていた。これらの分布は散在的で、SK-01が離れた西斜面に築かれ、SK-02～05の4基は北斜面に間隔を空けて築かれている。最も斜面下方のSK-04で埴丘と区画溝が認められたが、その他は埋葬施設だけの検出であった。

第2節 福島22号墳

墳丘（図版5 写真図版3・5）

調査区北端、調査区南半より一段低くなった尾根上に位置し、古墳からさらに北には平坦な尾根が連続する。墳丘は尾根上の小さな頂部を利用して築かれ、北側約1/3は調査区外となって調査を実施し得なかったが、現地形観察では裾部と思われる傾斜の変換点が観察される。墳丘東側は現代の道によって削平されて墳丘裾部は消失しており検出されなかった。墳丘南側から西側の裾部には溝や平坦面が削出されて裾部は明確となっており、これらから墳丘を測定すれば、規模は南北約13m・東西約11mとなり、墳形は尾根と平行する方向にやや長くなった円墳と判断された。墳丘の高さは約1.2mを測るが、大部分は地山を削り出して築造されている。墳丘の西側から南側にかけて盛土が認められ、東側では確認できなかった。盛土は黄褐色シルトと赤褐色シルトの混じった土層で、厚さは最高約40cmであった。

墳丘の南裾部には尾根を切って弧状の溝が設けられ、この溝が深さを減じながら西裾に連続し、墳丘西裾では平坦面を形成する。溝内部には暗灰褐色シルトが堆積し、西側平坦部では暗褐色シルト質の極細砂中に墳丘の流土と思われる黄褐色シルトが認められた。また墳丘南側の溝内や墳丘西裾の平坦面では河原石からなる礫群が検出され、その他にも溝内には多くの礫が認められ、さらに墳丘から北に離れた斜面でも表土内から礫群が検出された。これらの礫群は墳丘から落下したり、移動したものと思われるが、墳丘には全く遺存せず、利用方法は不明である。ただ川除遺跡のSX-05では河原石が墳丘に貼られており、これらの礫群もそうした可能性が考えられる。

主体部（図版6 写真図版4）

墓壇は墳丘中央で西端が調査区外となって検出されたが、墓壇が浅いことや遺存状況が悪いことから、墓壇内から明瞭な形で棺の痕跡を検出することはできなかった。ただ断面観察では東小口付近の墓壇底で検出された礫群の内側と西端の調査区壁際で土層の立ち上がりが確認され、木棺が存在したと思われる。また墓壇底は溝状の痕跡や北辺際が低くなる現象が見られ、その付近に棺の側板が想定される。これらの点から棺の規模を推測すれば、棺は長さ約2.3m・幅約0.8mとなる。また、墓壇下段の東小口付近から、中央の約40cm方形が内側に突出して「凸」字状の平面形を呈する礫群が南北80cm・東西65cmの範囲で検出された。礫群には河原石が使用され、墓壇底の1層上から灰褐色シルトとともに、棺に向かって傾斜をもって検出されている。棺小口の構造に関係するものと思われ、礫群の形状から、棺は小口が側板より中に入った「H」形を呈する組み合わせ式の木棺であった推察される。

墓壇は2段に掘られ、平面形は隅丸方形を呈する。墓壇の上段での規模は長さ約4.3m以上・幅2m・深さ0.35mを測り、深さ約10cmのところで、長さ約2.2m・幅約1.6m・深さ0.25mに下段が掘り下げている。内部は灰褐色・黄褐色を呈するシルトや粗砂の互層となっていた。

遺物出土状況

土器の小片が墓壇中央やや南寄りから土器の小片（1・2）が出土したが、いずれも上部から落ち込んだものである。

遺物（図版22）

弌生土器の小片2点で、1は横方向に開く壺の口縁部片、外面は指オサエの後ヨコナデ、内面はヨコナデである。口縁端部は欠く。2の底部は外面に叩き目が残り、内面は刷毛調整。壺の底部か。

第3節 墳墓群の調査

1. 弥生時代後期末から古墳時代前期の墳墓群

SX-01 (図版7 写真図版6・7)

22号墳の尾根上から斜面にかけて、斜面に平行して塗かれたもので、北辺を除く3辺は細い溝で区画される。尾根頂部側にあたる北辺を区画する溝は検出されなかったが、陸橋部として本来設けられていなかったのか、後後に削平され消失したかについては判断されなかった。西溝は幅約45cm・深さ15cmで、内部の埋土は暗褐色シルト層であった。北端で22号墳裾の溝に連続され、南端は南溝に連続する。南溝は幅約70cm・深さ15cmで、内部の埋土は暗褐色シルト層であった。台状部の南西隅付近にあたる溝内部には台状部裾に沿うように礫が認められた。この南溝はSX-03の北辺を区画する溝と共有する形となっているが、南西隅や南東隅は台状部の肩がカーブを描いており、斜面下方側にあたる南溝もこの墳墓用に掘削されたものと判断される。東辺を区画する溝はSX-02の西辺を区画する溝とその延長上にある。この東辺の溝は他の2辺を区画する溝より深くなっている。南溝はこの溝に連続する形をとっていた。

台状部は隅丸の五角形状を呈し、東西約4.8m、南北4.5m以上の小規模なものである。盛土は確認されなかったが、棺蓋石の消失から埴丘は検出面より高かったことが推測され、棺内の埋土から少なくとも棺を覆う程度の盛土が施されていたものと思われる。

主体部は台状部の中心からやや斜面上方によった位置で検出された、内法長60cm・幅20cm・深さ20cmの小型の石棺1基である。石棺の蓋はすでに消失し、内部には地土山に類似した灰褐色のシルトが充満していた。

石棺の檻は東小口部のレベルが高くなるよう構築され、南北の側壁も東小口部にかけて高くなるよう構築されていた。壁の構築は河原石を小口積みにして行ない、東小口から両側壁の東半にかけては2段の石積みであった。西小口から両側壁の西半にかけては1石のみで構築されていた。両小口はかなり棺内側に傾きを持たせており、特に東小口は傾きが大きく、上段の石は内側にかなり出っ張っており、蓋石とも考えられる。壁の構築順序は両側壁から始めて東小口を築き、最後に西小口石を据えている。

石棺を埋納した墓壙は長さ約1.2m・幅0.72m・深さ0.2mであり、墓壙いっぱいに石棺が埋納されている。墓壙の平面形は東辺が直線的で、西辺は「U」字状を呈す。断面は中央が深く、皿状となる。

棺内に副葬品は認められなかった。棺北側の埴丘上から弥生土器が小片になって出土している。

石棺の規模から見て被葬者は乳幼児で、側壁の状況から頭部を東に置いていたものと判断される。

SX-02 (図版7・22 写真図版8)

SX-01の東側の尾根上に、尾根と直交して塗かれたもので、SX-01・03とは溝を共有し、区画溝の南隅はSX-07の区画溝に切られる。墓域の東半は後世の擾乱を受け消失し、幸うじて台状部南縁から東隅が検出されたが、その部分でも台状部の裾が検出されたにすぎない。

墓域を区画する溝の内、北辺の溝は幅約2.2m・深さ10cmで、幅が広く浅いものになっている。西辺を区画する溝は北辺の溝より深く、SX-01の東溝から連続するもので、幅・深さを増しながら南隅に至り、南辺を区画する溝に連続する。南隅部の外肩はSX-07の区画溝に切られているが、切られる手前がコーナー状に東にカーブしており、SX-01・02・03間の溝は本来SX-02用に掘削されたものと考えられる。

南辺の溝は尾根に直行して設けられ、平均的な幅は約200m、深さは25cmで、内部に礫・砂層の堆積が認められた。内側肩の東端が北に折れることができ確認され、その部分が台状部東隅の裾になると判断した。

台状部の規模は東西約6.6m・南北5.9mで、盛土は認められなかった。主体部は検出されなかつたが、擾乱部において検出された礫群が主体部を構成していた一部とも考えられる。

西溝内から13・14の弥生土器の壺や底部が出土しているが、溝の性格上、この墳墓に伴うものとは断定できない。

13は壺の頸部片で口縁部は欠いている。体部外面は箠磨きである。14は壺か鉢の底部であろう。

SX-03 (図版8・22 写真図版9・10・20)

SX-01の斜面下方側に、斜面と平行して築かれたもので、斜面上方側は溝により区画されていたが、斜面下方側を区画する施設は認められなかった。区画溝の内、東辺の溝はSX-02の西辺の溝をそのまま利用し、斜面上方の北辺の溝はSX-01の斜面下方側の南溝を西に延長し、緩くカーブを描きながら西溝に連続する。西溝は幅約47cm・深さ15cmで、埋土は暗褐色シルト一層であった。この西溝からSX-05の北東隅に向けて幅80cm・深さ13cmの溝が分岐していた。

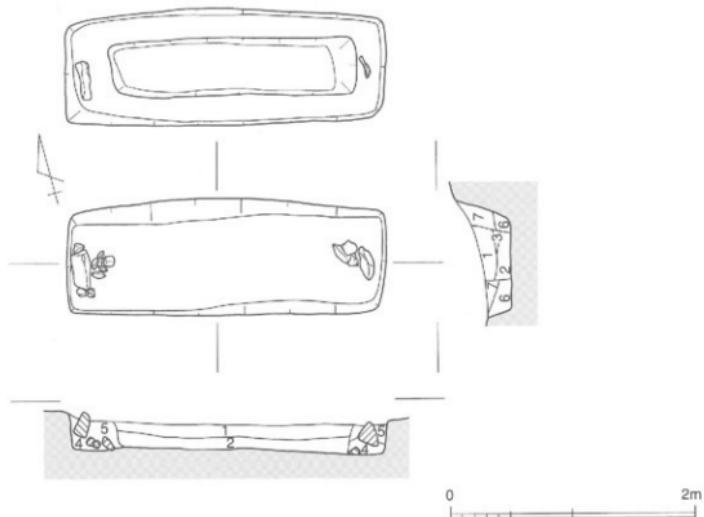
溝によって区画された台状部には埋葬施設から斜面下方側にかけて盛土が認められた。盛土は2層に分けられ、下層が灰褐色細砂、上層は明黄褐色極細砂であった。この盛土の裾を台状部の裾として台状部の規模を計測すると、東西9.2m・南北7.2mとなり、溝による区画を伴う墳墓の中では最も大規模なものである。台状部の上面は斜面にあわせるように傾斜し、斜面上方側と下方側では60cmの比高差がある。

主体部は台状部の中央から北によった位置に、斜面と平行して設けられた木棺1基である。木棺は長さ約2.60m・幅約0.70m・深さ0.63mの箱形である。棺内の埋土は黄色シルト質極細砂一層で、側板の背後は白色ブロックを含む黄色シルト質極細砂で埋められていた。

墓壇は長さ約3.31m・幅1.06m・深さ0.63mの長方形である。墓壇の小口部中央には小L1板と墓壇の間に、墓壇側面と平行する石積みが認められた。石積みは東小口部では幅約12cm、西小口部では幅約15cmであり、ともに内側から外側に向けて積まれていた。

棺内中央の埋土から、3の壺が落ち込んだ状態で出土した。ほぼ全容が分かる形に復原できており、棺上か棺埋め戻し後の墳丘上に置かれていたものであろう。

3の壺は頸部が太く、口縁部は頸部から横方向に大きく開く。口縁端部は僅かに上下に拡張される。体部は中位が大きく張って偏球形であり、底部は突出した平底である。体部中位から口縁部までの外面は刷毛後箠磨きされ、体部下半の外面は叩き後にナデているが、叩き目を残し、分割成形の痕跡が明瞭に見られる。体部内面は方向は異なるが刷毛調整で、口頸部の内面は刷毛後にナデしている。底部外面には木の葉状の圧痕が残る。



1. 淡黄褐色粗砂混練細砂～シルト質細砂（白色粉・粘性多い）
2. 赤褐色粗砂混練細砂～シルト質細砂（白色粉・粘性少ない・シマリ強い）
3. 茶褐色粗砂混練細砂～シルト質細砂（白色粉・粘性多い）
4. 明赤褐色細砂質シルト（白色粉少ない）
5. 赤褐色細砂質シルト（白色粉少ない）
6. 明赤褐色細砂質シルト（白色粉多い）
7. 黄褐色細砂質シルト（白色粉少ない）

第2図 SX-04

SX-04（第2図 写真図版11）

22号墳の西面平坦面の下方から主体部のみが検出されたもので、明確に区画施設は検出できなかった。しかし、主体部東側に向かって22号墳壇の溝から分岐する短い溝が検出されたことや、SX-03の北溝とSX-05の南溝を繋ぐ弧状の溝の存在から、この主体部も本来溝による墓域の区画が存在したものと判断した。主体部は22号墳の平坦面の直下で、斜面と平行して設けられた木棺1基である。木棺は長さ約2.20m・幅約0.48m・深さ0.60mの箱形である。棺内の埋土は淡黄褐色・赤褐色の極細砂からシルト質の極細砂の3層であり、側板の背後は明赤褐色・赤褐色砂質シルトの2層で埋められていた。

墓壇は長さ約3.31m・幅1.06m・深さ0.63mの長方形である。墓壇の小口部中央には小口板と墓壇の間に、墓壇側面と平行する石積みが認められた。石積みは東小口部では幅約12cm、西小口部では幅約25cmに小さな礫を置き、この礫群と墓壇壁の間には長さ30cmの大石を立て、石の両側には小さな礫を1~2石置いている。東小口部の石積みは西小口ほど明瞭ではないが、やはり小口板に近い側に小さな礫を置き、墓壇壁に近い側に大きい石を据えている。両小口の礫群とも小口板に近い礫は墓壇底に接し、墓壇壁に近い大きい石は墓壇底から浮いた状態であった。

出土した遺物はない。

SX-05 (図版9・10・22 写真図版12・20)

SX-02の下方で、南向きの斜面に立地しており、山側（北側）と、東西両側には墳丘を区画する溝が検出された。溝の幅は1.30m、深さ0.20mで、埋土は灰褐色小礫混じりシルト質極細砂の1層である。溝により区画された範囲は、東西方向に6.00m、南北方向に3.50mを測り、谷側（南側）に向かって若干開いている。

主体部は2基の木棺である。主体部1は、等高線に直交する方向に主軸を向け、木棺の長さ1.67m、幅0.44m、深さ0.15mを測る。棺内の埋土は茶褐色細砂混じり極細砂質シルトの1層である。墓壇の底には黄灰色シルトを置いて木棺を安定させており、側板の背後は赤褐色極細砂の1層で埋められていた。

墓壇は長さ2.10m、幅0.72m、深さ0.18mの長方形である。

棺内から出土した遺物はない。

主体部2は、等高線に直交する方向に主軸を向けており、主体部1と平行する。木棺の長さ1.72m、幅0.38m、深さ0.08mを測る。棺内の埋土は茶褐色極細砂質シルトの1層である。墓壇の底には灰褐色極細砂質シルトを置いて木棺を安定させており、側板の背後は赤褐色極細砂質シルトの1層で埋められていた。

墓壇は長さ2.40m、幅0.70m、深さ0.15mの長方形である。

棺内からは土器が出土している。木棺内から出土しているが、木棺の床面からは浮いており、本来は木棺上に置かれていたものが、木棺の崩壊に伴い落ち込んだものと考えられる。

また、主体部1と溝との間から掘方をもつ上器群が検出された。掘方の平面形は円形で、直径52cm、深さ10cmを測る。少なくとも3個体の土器がまとまっているが、破片の数は非常に少ない。器種は壺のみが確認できる。底部片より下からも体部片が出土しており、正位置で据え置かれた状況は看守できない。また、上方が削平されたため、いずれの個体も完形に復元できたものはない。

SX-06 (図版11・22 写真図版13・20)

SX-05の下方に位置し、南向きの斜面で検出された。他の墳墓群とはやや離れたところにあり、今回調査された墳墓の中で最も低いところに位置する。山側（北側）と、東西両側には墳丘を区画する溝が検出された。溝の幅は0.90m、深さ0.35mで、埋土は褐灰色シルト質極細砂である。溝により区画された範囲は、東西方向に6.30m、南北方向に2.40mを測り、溝は主体部を完全に囲っていない。

主体部は1基の木棺である。等高線に平行する方向に主軸を向け、木棺の長さ1.90m、幅0.62m、深さ0.13mを測る。棺内の埋土は黄褐色シルト質極細砂の1層である。側板の背後は灰褐色シルト質極細砂の1層で埋められていた。

墓壇は長さ2.71m、幅0.98m、深さ0.17mの長方形である。

棺内から土器が出土しているが、床面から浮いており、本来は木棺の上に置かれていたものが、木棺の崩壊に伴い落ち込んだ可能性が高い。

SX-07 (図版12~14・22 写真図版14・15・20)

SX-03の東側に位置し、南向きの斜面で検出された。山側（北東側）と、北西側を区画する溝が検出された。溝の幅は2.00m、深さ0.30mで、埋土は黄褐色小礫混じり細砂～極細砂である。南側の溝は搅乱のため明らかではない。溝により区画された範囲は、南北方向は6.60m以上、東西方向に8.50mを測る。

墳丘には最大10cmの厚さで盛土が認められた。明赤褐色シルト質極細砂の1層で、その下層には旧表土の灰色極細砂が認められた。

主体部は1基の石棺と1基の木棺の計2基である。主体部1は等高線に平行する方向に主軸を向けた箱式石棺で、規模は内法で長さ2.23m、幅0.35m、高さ0.23mを測る。石棺は身のみが検出された。蓋石は遺構面が浅いため搅乱された可能性もあるが、築造当初から蓋石は存在せず、蓋がなかったか、あるいは木材により蓋がされていた可能性もある。石棺を構成する石材は、東側壁に5石、西側壁に6石あり、その背後や隙間に小型の石材を置いている。北西隅、および東側壁の中央やや南寄りには2段に積まれた箇所がある。小口石は北側、南側とともに1枚の板石を立てており、南側では内側に倒れている。石棺内には小型の石材が隙間をもって敷かれている。

墓壙は長さ2.94m、幅0.97m、深さ0.15mの長方形で、北西隅が若干外側へ張り出している。

壺片が棺内中央から底部5が、東端から4が出土している。

主体部2は等高線に直交する方向に主軸を向けた木棺で、規模は長さ2.86m、幅0.55m、深さ0.24mを測る。棺内の埋土は黄褐色極細砂質シルトの1層からなる。木棺の断面形は半円形を呈しており、割竹形木棺であった可能性も考えられるが、木棺は北東側の半分でのみしか検出できており、遺存状態が悪いため明らかではない。木棺の背後にはしまりの強い黄褐色極細砂質シルトの1層で埋められていた。

墓壙は長さ3.70m、幅1.22m、深さ0.41mの長方形である。墓壙の両小口部には木棺の小口部を押さえるように「コ」字形に石材を置き、木棺を安定させている。北側の小口部に置かれた石材はいずれも木棺の裏込めの上に置かれていることがわかる。南側の小口部については裏込めとの関係は明らかではない。

棺内から出土した遺物はない。

2. 古墳時代後期の墳墓群

SK-01（図版17・23 写真図版16・20）

東側尾根の鞍部から約4m下った斜面で検出された木棺直葬墓で、平面形は主軸を等高線と平行に置いた長方形である。木棺の長さ2.50m、最大幅0.45m、深さ最大で0.10mを測る。棺内の埋土は上方に黄褐色の粗砂～極細砂が、下方にややしまりのよい赤褐色の細砂～極細砂が認められた。側板の背後は淡黄褐色極細砂～細砂の1層で埋められていた。

墓壙は長さ2.85m、最大幅1.15m、深さ0.61mの不正形の長方形である。幅が南方向に向かって広がっているのは遺存状況が比較的良好く、墓壙の上面近くで検出できたためである。

木棺内からは鉄鎌（T 1）、鎌（T 2）、刀子（T 3）の3点の鉄器が出土した。鉄鎌T 1は棺内の西側で先を南側に向けて棺の主軸に平行して置かれていた。鎌T 2と刀子T 3は棺のやや北側で、西側に偏ったところから破片が散在した状態で出土した。

T 1は尖根式の鉄鎌で、茎には木質が遺存する。現存長15.45cm、鎌身長11.4cm、茎長4.05cm。T 2は鎌で、先端の一部を欠損する。基部は刃部に直交する角度で折り返している。現存長13.50cm、幅2.00cm。T 3は刀子で、先端の一部を欠損する。木質は遺存していない。現存長10.80cm、刃部長7.0cm、厚さ0.45cm、柄部長3.8cm、厚さ0.40cm。

また、本木棺墓の下方の擾乱内から須恵器が出土しており、本木棺墓の供献土器である可能性が高いが、時期に幅があるため明らかではない。

SK-02 (図版17 写真図版17)

東側尾根の鞍部から北西へ約3m下った斜面で検出された木棺直葬墓で、SK-02・03・05の3基で、一群をなしている。平面形は主軸を等高線と平行に置いた長方形である。木棺の長さ2.46m、最大幅0.47m、深さ最大で0.15mを測る。棺内の埋土は粗砂混じり極細砂～シルト質極細砂の1層からなる。側板の背後は粗砂混じり細砂～極細砂の1層で埋められていた。さらにその上には、棺と裏込めを覆う形でぶい黄褐色粗砂混じり細砂が認められた。

墓壇は長さ2.96m、最大幅1.00m、深さ0.12mのやや不正形の長方形である。

出土した遺物はない。

SK-03 (図版17 写真図版17)

東側尾根の鞍部から北西へ約7m下った斜面で検出された木棺直葬墓で、SK-02・03・05の3基で、一群をなしている。平面形は主軸を等高線と平行に置いた長方形である。木棺の長さ1.75m、最大幅0.45m、深さ最大で0.10mを測る。棺内の埋土は黄褐色極細砂混じり細砂～シルト質極細砂の1層からなる。側板の背後は暗灰色粗砂混じり極細砂の1層で埋められていた。さらにその上には、棺と裏込めを覆う形で暗灰褐色小礫混じり細砂～シルト質細砂が認められた。

墓壇は長さ2.24m、最大幅0.66m、深さ0.41mのやや不正形の長方形である。

出土した遺物はない。

SK-04 (図版18～20 写真図版17・18)

東側尾根の鞍部から北西へ約7m下った斜面で検出された。山側（南側）と西側を溝により区画している。溝の幅は0.50m、深さ0.10mで、溝の埋土は黄褐色細砂～極細砂である。溝により区画された範囲は東西方向に2.60m、南北方向に2.70mを測り、北側（谷側）に向かって若干広がっている。主体部の谷側（北側）と東側では溝は検出されなかったが、若干の地形の改変が認められるため、本来は存在していた可能性も考えられる。

周溝内側には盛土による埴丘が認められた。盛土は黄灰色小礫混じり細砂～極細砂の1層のみからなる。厚さ約0.4mのみ残存していた。

主体部は小規模な箱式石棺で、北東側が若干攢乱されているものの、ほぼ本来の形状を留めている。規模は内法で、長さ0.65m、北側幅0.28m、南側幅0.15m、高さ最大で0.22mを測る。各側板はいずれも1枚の石材で構成されており、上端の高さを小口板を地山へ掘り込むことによって調節している。南西側の小口板の外側にはさらに数個の石材を置き、掘方との間を埋めている。蓋は、基本的には比較的大型の石材を北東側に置き、南西側の隙間に細長い石材を横方向に置くことによってなされている。その上から、さらに石材同士の隙間を埋めるように大小様々な石材を乗せており、全体に丁寧に構築されている。

棺内の埋土は側壁のほぼ中央の高さに厚さ20cmの灰褐色の粘土があり、床面と考えられる。さらにその下層には明赤褐色シルト質極細砂が認められるが、この層は石棺の裏込めと共に、石棺を内外から据えるために置かれた層であると考えられる。また、棺外の東側では棺内と同じ粘土層が置かれていた。

墓壇は長さ1.46m、最大幅0.88m、深さ0.32mのやや不正形の長方形である。

出土した遺物はない。

SK-05 (図版21 写真図版18・19)

東側尾根の鞍部から北西へ約5m下った斜面で検出された箱式石棺墓で、SK-02・03・05の3基で一

群をなしている。北東側が地滑りのため攪乱されている。平面形は主軸を等高線と平行に置いた長方形である。石棺の内法は長さ1.45m、最大幅0.30m、高さ最大で0.25mを測る。棺内の埋土は上層に灰褐色細砂、下層に黄褐色極細砂の2層が認められる。

石棺は、長側壁として南側が3枚、北側が4枚が使用されている。小口は西側、東側とも石材は残っていないが、東側は石材を据えた痕跡が認められ、攪乱によって抜かれた可能性がある。一方西側は蓋石がのっており、攪乱された可能性がないため、当初から存在せず、地山の掘削面が西側小口板の役割をはたしていたものと考えられる。また、東西両小口板が木製であった可能性も考えられるが、明らかではない。石棺蓋は、石材を8石を横方向に置き、比較的西側にやや大型の石材を使用し、東側には小型の長細い石材を使用している。中央部では平らな石材を2石重ねており、その隙間を小型の石材で埋めている。蓋石および、身を構成する石材のいずれにおいても、決して丁寧に構築されているとはいえない。石材間に隙間が多い。

墓壙は現存長1.90m、最大幅0.98m、深さ0.48mの長方形である。

出土した遺物はない。

3. その他の出土遺物

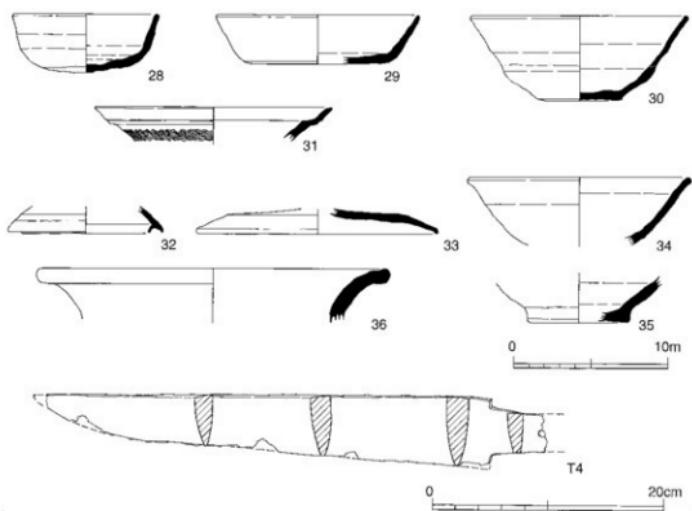
SK-01下方土器群（図版23 写真図版21）

須恵器有蓋高坏蓋3個体、同身3個体、壺2個体、提瓶1個体が出土している。有蓋高坏蓋3個体は、口径11.0～11.3cm、器高5.05cmで、口径の割に器高が高く、深いつくりである。18・19には口縁部と天井部の境には強い回転ナデによってやや鈍い稜が巡り、口縁部端部は若干外反し、内傾する段が認められる。天井部にはいずれも回転範削りを施し、頂部が確認できる18・20には中央がくぼんだつまみを貼りつけている。

有蓋高坏身3個体は、口径9.25～10.00cm、器高7.65～9.10cmで、口径の割に器高が高く、深いつくりである。いずれも底部には回転範削りが施されている。立ち上がりはゆるやかに外反するもの（21・23）とほぼ直線的に延びるもの（22）の2者がある。受部は外方へ大きく張り出し、平らな面を上に向いている。口縁部と体部の境の内面には折り込みによる沈線が認められるもの（21・22）と認められないものの（23）がある。脚部は方形透かしを3方に開けており、21が高さ7.8cm、22が高さ9.0cmで違いがあるものの、端部のつくり、調整は類似する。

壺は回転ナデによって成形・調整された24と主に叩きによって成形された26がある。前者は直口する口縁部に端部は内傾する段をもち、底部は不定方向の削りを施す。底部には3条の平行する沈線による範記号が認められる。26は振格子の叩きによって成形され、上半はカキメを巡らす。底部には8字形の沈線による範記号が認められる。

提瓶（25）は体部全体をカキメによって調整され、把手などは認められない。



第3図 包含層出土・表探遺物

包含層出土遺物（第3図 写真図版22）

表土下の流土などから若干の遺物が出土している。いずれも今回検出した埋葬施設との関連は不明である。

出土した遺物はすべて須恵器であり、器形には杯G・杯A・榢・罐・壺がある。28は杯Gで体部は中央が膨れて丸みを帯び、口縁部は外上方に伸びる。底部の外面は範切りである。口径9.2cm・高さ3.8cm。SK-04の下方からの出土である。29は杯Aで、底部は平で、口縁部は底部から屈曲して直線的に伸びる。底部は範切り後ナデている。口径13cm・高さ3.2cm。30は榢で、底部は回転糸切りである。口縁部は丸みを失い直線的になっている。口径13.7cm・高さ5.5cm。29・30とも調査区南端のSD-01・02下方の流土から出土している。31は榢の口縁部辺り、口縁上端には小さな面をもつ。口縁部と頸部を分ける稜は明瞭で、頸部には波状文が施されている。口径15.2cm。SX-03下方の流土からの出土である。壺（27）はほぼ完形で出土した。体部外面は平行叩きの後、上半に横方向のカキメを巡らす。内面は同心円のあて具痕が認められ、およそ外側のカキメ痕が認められる下端で、あて具の切り合が認められる。

表探遺物（第3図 図版24 写真図版22）

調査区外の谷部斜面や山裾から表探したもので、須恵器と鉄器がある。須恵器の器形には杯G蓋・杯B蓋・榢・壺がある。32は内面にカエリをもつ杯G蓋で、口径8.1cm。頂部を欠くが、遺存する部分には範削りが認められる。33は杯B蓋で、犬井部は偏平となり、口縁部は直線的に伸びる。口径15.4cm。ツマミを欠く。34は榢で、口縁部の下半は丸みを帯び、上半は外反する。口径14.0cm。35は榢の底部で、回転糸切り。36は壺の口縁部で、内外面とも回転ナデである。口径22.2cm。

T4は長さ21.7cmの短い鉄刀である。刀身部は長さ19.4cm、幅3.0cm、厚さ0.95cm、切先を欠く。茎は幅1.7cm、厚さ0.6cmで、2.3cmの長さまで遺存しており、目釘穴が観察される。

第3章 福島古墳群の調査

第1節 福島古墳群の概要

1. 位置

三田盆地の東辺は標高300mを越す山塊と、その間に広がる丘陵地帯から構成され、三田市街の東方に丘陵地帯が広範囲に広がっている。この丘陵地帯は大阪層群・神戸層群といった洪積層から構成される高原状の低平な地形で、武庫川の形成した平野部に直交する方向の開析谷が深く入り込み、幾筋もの尾根が形成されている。福島古墳群はこの丘陵地帯の北限に、東西に伸びる主尾根を中心て展開する古墳群である。

こうした高原状の広い洪積層の丘陵地帯は、古墳群北側の武庫川の平野部から福島大池を通り三田市志手原に至る谷筋で終焉する。谷の北側は有馬富士・城ヶ岡といった標高約350mを越える山塊が聳える山地帯となり、丘陵地形は山裾に狭小に取りつく形に変化する。山塊は宝塚市北部や丹波に広がる凝灰岩で構成され、岩が山頂や山肌の他、古墳群北側の谷底などに露頭している。

こうした地質・地形の変化に対応するかのように、古墳の内容も両者で異なっている。本古墳群から南の丘陵地帯に展開する三輪古墳群・川除古墳群・大原古墳群・千ヶ坂古墳群は、埋葬施設の明らかなものはすべて木棺直葬であり、古墳群を形成する他の古墳も埴丘から木棺直葬と見られるもの多い。

一方、本古墳群から北の山地に位置する加茂古墳群・城ヶ岡古墳群・萬代古墳群などは、横穴式石室を埋葬施設と古墳で形成された古墳群であり、三田盆地においては最も横穴式石室の古墳が密集した地域である。木棺直葬の古墳は萬代古墳群の西端、城ヶ岡の裾に伸びる丘陵地帯に位置する古墳の一部に見られる程度である。

このように本古墳群は地形・地質の変化帯に位置し、周辺の古墳の内容からは木棺直葬を埋葬施設とする古墳が広がる地域と横穴式石室を埋葬施設に採用した古墳が密集する地域の境に位置している。

2. 古墳群の概要（図版2）

福島古墳群は表4のように現在24基の古墳で構成される古墳群である。古墳群の位置する丘陵地帯北端の尾根はほぼ中央で2つに分岐し、尾根には支尾根や山裾も含めて36基の古墳が知られているが、尾根に挟まれた谷部の斜面に位置する福島龍王谷古墳群11基と、東端の前方後円形の墳丘を有し横穴式石室2基を埋葬施設とする上野ヶ原古墳の計12基は、福島古墳群中には含まれていない。

24基の福島古墳群に属する古墳の概要の大略は表3の通りであり、墳丘規模は一辺22mの方墳である20号墳が最大で、他はすべて径あるいは一辺が20m以下の小規模なものである。また墳形では方墳3基が含まれており、円墳と混在した状態になっている。

埋葬施設については調査が実施されたもの以外は明確ではないが、その12基では埋葬施設に横穴式石室を採用したものが2・13・15・17・23・24号墳の7基、木棺直葬を採用したものが1・3・5・10・21・22号墳の7基と、横穴式石室と木棺直葬が相半ばしている。残りの古墳については埋葬施設を特定

することはできないが、6・8号墳はまわりの状況や埴丘の状況から木棺を埋葬した古墳と見られる。また19・20号墳は幅広い尾根の平坦面に位置し、四周に周溝を巡らした方墳であることなどから、時期的な関係から横穴式石室以外の埋葬施設を有するものと考えられる。11・12号墳は分岐した尾根の先端に位置する2基で、埴丘規模からみてこれらも木棺を埋葬したものであろう。9号墳は木棺直葬を埋葬施設とする古墳群の中に存在する小規模な古墳であるが、石材の露頭がみられ、横穴式石室の可能性が高い。18号墳については埴丘規模は木棺を埋葬したものに近いが、隣接する17号墳が横穴式石室であることから、その可能性も捨てきれず、不明としておく。こうした推測が正しいとすれば、24基の内、18号墳の1基を除いて、木棺直葬を埋葬施設とするものが15基、横穴式石室を埋葬施設とするものが8基となる。

各古墳の築造時期は調査を実施されたもの以外は明確にはできないが、調査を実施したものでは22号墳が弥生時代後半から末、13号墳が古墳時代後期後半、1・14・15・24号墳が古墳時代後期末、23号墳が古墳時代終末、2号墳は疑問も残るが藤原期まで下がる築造時期である。調査が実施されていない古墳の時期を特定することは困難であるが、16号墳は尾根頂部に築かれた方墳であることから5世紀以前の可能性が高く、19・20号墳は周溝・埴丘からみて5世紀代の古墳である可能性が高い。

さてこうした24基の古墳の分布状況であるが、極めて散在的であり、8基で構成される3～10号墳のグループを最大に、それぞれ3基で構成される16～18号墳・19～21号墳の2グループ、2基で構成される1・2号墳、11・12号墳、13・14号墳の3グループ、15・22～24号墳の現状では単独で存在しているグループに分けられる。

第2節 福島1・2号墳の調査

1. 概要

武庫川の形成した平野部に面した丘陵の比較的の上方に位置する。東から西に延びる尾根の先端に立地し、標高は223m～227mで、丘陵の中にあるものの傾斜は比較的ゆるい。尾根はさらに西へ延び、細かく枝別れしていく。当地より東側は調査時ではグランドとして利用されており、広い範囲が平坦になっていた。福島古墳群の中でも比較的の上方に位置し、13・14・24号墳と同じ標高である。

調査前は雜木林の中にあり、1号墳が明確な埴丘をもっていたのにに対し、2号墳は若干の石材が散乱するのみであった。そのため確認調査を実施し、横穴式石室の残骸であることがわかった。

調査の結果、1号墳は平面形が円形で、盛土によって埴丘が構築され、主体部は木棺直葬が2基であることがわかった。出土遺物には鉄器、須恵器があり、埴丘上、墓壇内、棺内から出土した。また、埴丘外では小規模な土坑が検出された。2号墳は擾乱により本来の形状は明らかにできなかったが、埴形は円形で、埋葬施設は小規模な横穴式石室であることが確認でき、遺物も若干ではあるが出土した。

2. 1号墳の調査結果

(1) 墓丘（図版25～27 写真図版23～25・33）

埴丘 直径10.2mの円墳である。埴丘の高さは最も高低差のあるところで1.4mを測る。標高は高いところまで226.9m、低いところまで225.5mを測る。調査前は、直径約12m、高さ最大約1.5mであり、周囲には最大幅1.0m、深さ0.15mの周溝状の陥没が認められたが、調査の結果、明確な周溝は検出できず、埴丘の山側（北側）において若干の陥没が認められるのみであった。

埴丘は全体に遺存状況が良く、風雨による削平はあるものの人の為的な破壊は行われていなかった。しかし、主体部を検出するには困難を極め、表土の下には黄褐色シルト質極細砂（第2層）が認められるのみで、分層することは不可能であった。この層は厚さ30cmを測る。木棺はこの層の下で検出できた。この第2層から下では埴丘の盛土は大きく以下の5つの層からなっている。すなわち、やや粘性のある黄褐色粗砂混じり細砂～粗砂（第8層）、しまりの弱い灰褐色小礫混じり細砂～粗砂（第9層）、やや粘性のある赤褐色粗砂混じりシルト質極細砂（第10層）、赤褐色焼土混じり細砂（第11層）、粘性のある赤褐色粗砂混じりシルト質極細砂（第12層）の5つである。これらの層はおよそ幅80cm、厚さ15cmを単位として不規則に置かれており、特に規則性や作業段階による単位は見えない。これらの層の下には厚さ5cmの炭層が認められ、埴丘を構築するにあたって山を焼いていることがわかる。さらにその下には黄灰褐色小～中礫混じり細砂～粗砂があり、さらに下のいわゆる地山とともに、埴丘構築時の基盤の層となっている。

また、埴丘の東側には土坑が検出された。平面形は長軸0.95、短軸0.52mの楕円形で、断面形は幅広い台形を呈する。上坑内には石材が散在していた。中央に若干空間が認められ、箱式石棺である可能性も考えられるもの、遺存状況が悪いため明らかではない。

遺物出土状況 墓丘からは須恵器の装飾付台付壺1点、坪蓋1点、坪身2点、無蓋高壺1点、高壺脚部1点、短頸壺8点、甕1点、脚付甕1点、長頸甕1点など、比較的多種多様の遺物が出土した。ほとん

などが図版31のように墳丘上から裾にかけて破片の状態で散在して出土している。特に墳丘の下方である南から東側にかけてまとまって出土しており、遺物によっては墳丘の北側と接合関係にあるものもある。特に37・54は墳丘南東側を中心として広範囲に散在していた。墳丘の頂部付近から出土した遺物は37・39・40・54・56があり、これらの遺物は本来墳丘上に置かれていたと考えられる。これらの遺物の破片は墓壇上から出土しているものがあることから、埋葬が終了した後に墳丘上に置かれ、その後、墳丘の下方へ転落したと考えるのが妥当であろう。ところが、40の环身は第1主体部の棺内埋土から出土した破片と接合関係にあり、さらに、第2主体部の棺内埋土から出土した漆片77は墳丘出土遺物と接合関係にある。これらについては棺の崩壊に伴い落ち込んだ可能性もあるため、直ちに埋葬施設を掘削する前に遺物が置かれていたとすることはできない。

(2) 墓葬施設

第1主体部（第4・5図 図版28 写真図版26~30）

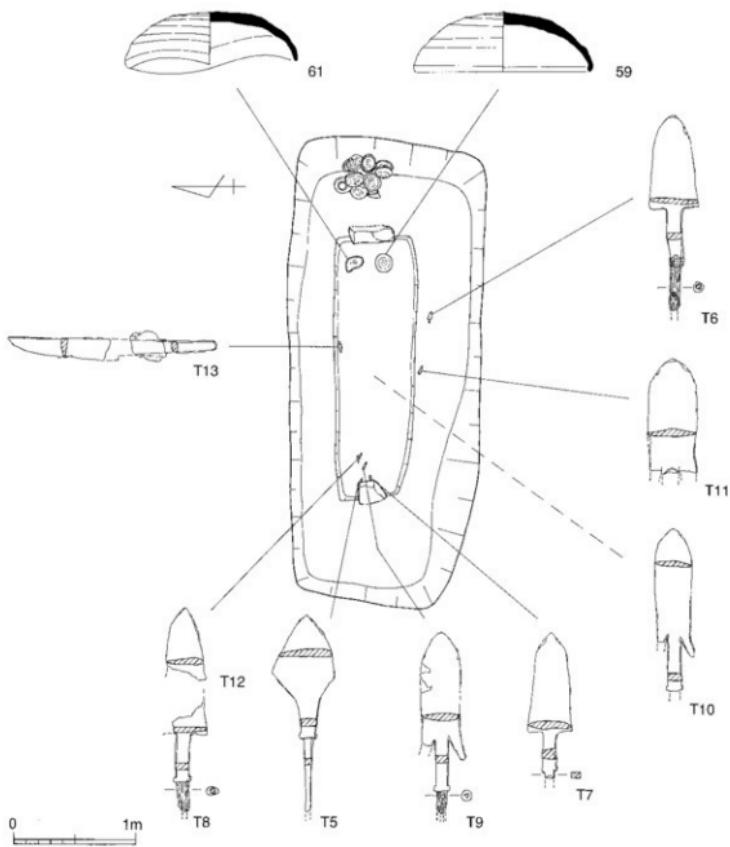
主体部 墳丘の頂部の若干南側で検出された。第2主体部を切っている。主軸をほぼ東西に向け、枕の位置から頭位が東側であったことがわかる。木棺の長さ2.25m、最大幅0.60m、深さ最大で0.50mを測る。棺内の埋土は黄褐色系細砂～シルト質極細砂の3層からなる。側板の背後は灰褐色から黄褐色の細砂～シルト質極細砂の4層で埋められていた。また、小口側には板状の石材が木棺の後ろに置かれており、その裏側に沿って灰白色の粘土が貼り付けられていた。

墓壇は長さ3.80m、最大幅1.50、深さ0.51mのやや不正形の長方形である。

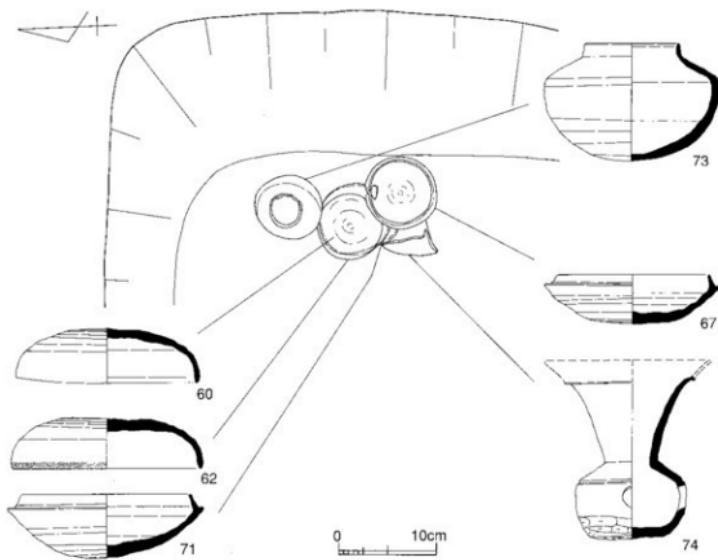
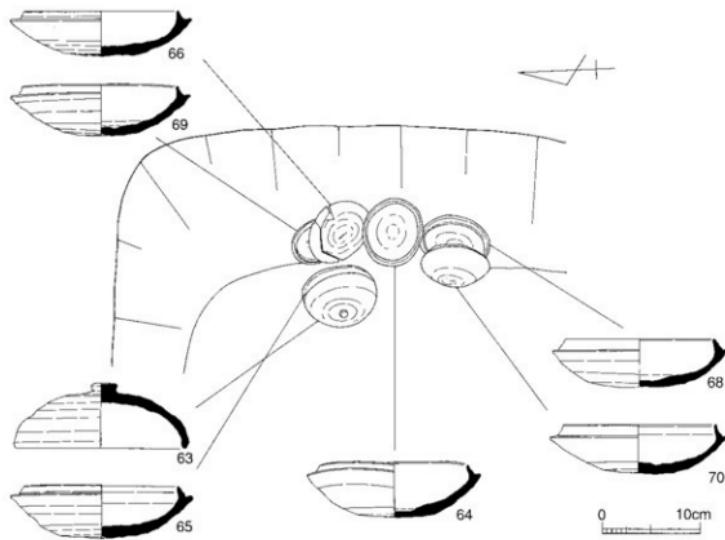
遺物出土状況 棺内から刀子（T13）、鉄鎌（T5・7～10・12）、須恵器坏蓋（59・61）が、墓壇内からは鐵鎌（T6・11）、須恵器坏蓋（60・62・63）、环身（64～71）、短頸壺（73）、罐（74）が出土した。棺内から出土した遺物のうち刀子は木棺の北側の中央部で、刃先を足元に向けて置かれていた。鉄鎌は木棺の西側小口付近の足元で、刃先を西側（足側）に向けて置かれていた。須恵器坏蓋は枕として転用されており、59は口縁部を下に、61は口縁部を下に向けて置かれていた。

墓壇内から出土した遺物は層位的に大きく上層と下層の2つの層に分かれて出土した。上層から出土した遺物は東側小口付近に置かれた遺物のうち、坏蓋63、环身64～66・68～70がある。これらは、木棺が置かれ、棺の裏側が埋められた後に置かれたものである。63と65は身と蓋のセットであるが、66と69、68と70は环身同上がそれぞれ身と蓋のように口縁部を合わせて置かれていた。

下層から出土した遺物は南側中央付近に置かれた鉄鎌（T6・11）と、東側小口付近に置かれた遺物のうち須恵器坏蓋60・62、环身67・71、短頸壺73、罐74がある。これらの遺物は木棺が置かれた後、小口側の板石とその裏側の粘土が置かれて、若干の埋め込みにより木棺が安定した直後に置かれたものである。鉄鎌は、木棺の南側中央部において、いずれも刃先を東側（頭側）に向けて置かれており、棺内から出土した鉄鎌とは方向を異にする。また、棺内と棺外で、それぞれ出土した場所による型式的なまとまりは窺えない。須恵器は前述の東側小口付近で上層に置かれた遺物の下に置かれていた。罐は口縁部が削れたままの状態で、横位で出土している。环身は2点とも正面に置かれ、そのうちの1点である71の上には2点の坏蓋が正位の状態で重ねて置かれていた。また、墳丘出土の环身40は棺内埋土から出土した环身片と接合関係にある。しかし、かなり上側から出土しているため、木棺の崩壊に伴って落ち込んだものか、木棺を埋め戻す際に混入したものかは明らかではない。



第4図 第1主体部遺物出土状況



第5図 第1主体部棺外遺物出土状況

第2主体部（第6図 図版29 写真図版

31・32）

主体部 墳丘の頂部のほぼ中央で検出された。第1主体部によって切られており、南側の約1/3が削平されている。主軸をほぼ東西に向け、枕の位置から頭位が西側であったことがわかる。木棺の長さ1.92m、最大幅0.50m、深さ最大で0.12mを測る。棺内の埋土は黄灰色小礫混じり粗砂～細砂の1層からなる。側板の背後は黄褐色小礫混じり細砂～極細砂の1層で埋められていた。

墓擴は長さ3.80m、最大幅1.30m、深さ0.28mの長方形である。

遺物出土状況 棺内から須恵器坏蓋(75)、

坏身(76)、棺内埋土から壺の破片(77)

が出土している。棺内から出土した75・

76は枕として転用されたもので、棺内西

側小口付近でいずれも口縁部を下に向けて置かれていた。棺内埋土から出土した壺77は肩部のみの破片で、墳丘出土の破片と接合関係にある。しかし、かなり上側から出土しているため、本棺の崩壊に伴って落ち込んだものか、木棺を埋め戻す際に混入したものかは明らかではない。

(3) 出土遺物

第1主体部出土遺物（図版32 写真図版40・41）

坏蓋5個体(59～63)、坏身9個体(64～72)、短頸壺1個体(73)、罐1個体(74)、鉄鎌8本(T5～12)、刀子1本(T13)が棺内、墓擴内から出土している。

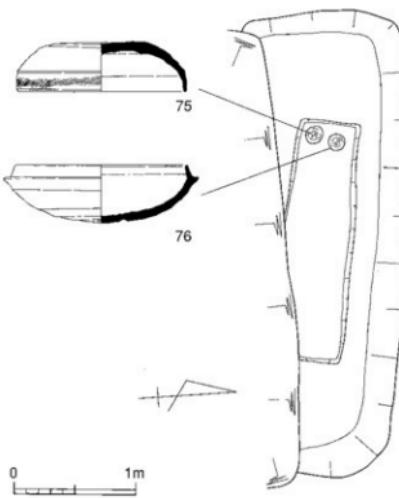
坏蓋は、天井部に範削りを施すもの(59・61・63)と補助削りを施すもの(60・62)に大別できる。いずれも体部と口縁部の境に稜は認められない。口径は13.6～15.3cm、器高は4.2～5.3cmである。61と62には梵記号が刻まれる。63には厚みのあるつまみが認められる。また、62の口縁端部外面には斜め方向のハケ状の痕跡が認められる。

坏身は、天井部に範削りを施すもの(64・66～71)と補助削りを施すもの(65)に大別できる。口径は12.0～13.7cm、器高は3.7～5.2cmである。64・70・71の底部外面には1条の沈線による梵記号が刻まれる。65・66・69には底部内面に同心円のスタンプが施され、65はその後3箇所に棒状の刺突痕が認められる。

短頸壺(73)は肩に幅広いナデによる窪みをもち、口縁部端部は内傾するにぶい段をもつ。

罐(74)は体部の肩に沈線を巡らす。底部は平らで、底外面は不定方向の削りが、底部の側面は横方向の断続的な削りが認められる。

鉄鎌は、いずれも平模式で、鎌身體部が圭頭形(T5)、長三角形で角尖(T6～8)、柳葉形で逆刺をもつもの(T9～11)がある。関は刺状のものがほとんどで、T6のみ突出した関は認められない。木質がT6・8・9に認められ、特にT6では樹皮が巻かれているのが確認できる。



第6図 第2主体遺物出土状況

刀子は葉部と茎部に分かれており、圓の部分は不明である。

第2主体部出土遺物（図版32 写真図版40）

环蓋 1個体 (75)、环身 1個体 (76)、壺 1個体 (77) が棺内、棺内埋土から出土している。

环蓋 (75) は天井部と口縁部の境に鈍い棱をもつ。天井部は回転範削りが施される。口縁部外面には斜め方向のハケ状の痕跡が認められる。部分的に回転ナデにより消されている。

环身 (76) は焼成が不良で、溝整が明らかでないが、底部外面には回転範削りの痕跡が窺える。内面には同心円のスタンプが施される。

壺 (77) は肩部のみ残存する。

墳丘出土遺物（図版33～36 写真図版35～39）

墳丘からは須恵器の装飾付台付壺 1個体 (37)、环蓋 1個体 (38)、环身 (39・40)、無蓋高壺 1個体 (41)、脚部 1個体 (42)、短頸壺 8個体 (43～50)、壺 1個体 (51)、把手 2点 (52・53)、脚付壺 1個体 (54)、長頸壺 1個体 (57)、土師器 1個体などが出土している。

装飾付台付壺37は、ラッパ状に大きく聞く口縁部をもつ壺の体部に、水平に貼り付けた鐸、縁部で大きく聞く脚を接合したものである。壺の頭部は2本一組の沈線3条により4段に分割され、2段目・3段目には波状文が巡らされる。また、最も上の沈線上には竹管文のある円形浮文が5箇所（現存は2箇所）に、その下の沈線上には竹管文のある勾玉形の装飾が4箇所（現存は3箇所）に貼り付けられている。最も下の沈線から体部との境まではカキメが施される。体部は外面を格子印き、内面は同心円のあて具により成形され、上半部はその後カキメが施される。脚部は2本一組の沈線6条により7段に分割され、最上段は無文、2段目は2条の波状文、3段目は1条の波状文、4段目・5段目は縱方向の範描き沈線、6段目は1条の波状文、7段目は無文となっている。また、2～5段目にはそれぞれ3方向の長方形の透かしが1列に並んで開けられ、6段目には場所をずらせて三角形の透かしを開けている。

さらに、鐸には小像が巡らされる。動物としては鹿？ (37-A)、犬 (37-B)、猪？ (37-D)、不明の頭部片 (37-C) があり、他に人物 (37-E)、と装飾部品 (37-F・G) がある。鹿 (37-A) は頭部に耳と角の接合痕が認められる。唯一鐸上の位置がわかるもので、それにより顔は外側を向いていることが窺える。犬 (37-B) は尾が丸くなり、口の中には舌の表現が認められる。顔は正面を向く。不明の頭部片 (37-C) は顔を横に向いている。馬 (37-D) はたてがみの表現が認められる。人物 (37-E) は正面を向き、足を大きく開いている。腕の接合痕が認められ、それによると組状の腕を背中側から巻き込んでおり、右手が上、左手が下を向いていることがわかる。装飾品の部品については何であるかは明らかではないが、37-Fには円盤状の装飾が貼り付けられており、馬具である可能性も考えられる。37-Gは、人物の表現から腕の破片であると考えられる。

环蓋 (38) は、やや丸みをもった天井部をもち、外面は回転範削りを施す。端部は内傾する段をもち、段には沈線が巡る。环身 (39・40) は、やや浅い体部をもち、立ち上がりはやや短く内傾する。底部は回転範削りを施す。高壺 (41) は体部と口縁部の境に2条の鈍い沈線を巡らせ、間に細かい波状文が巡らされる。脚部には3方向の長方形透かしが開けられる。脚部 (42) は3方向または4方向の長方形透かしが開けられ、端部付近で外側に屈曲している。短頸壺は、小型と大型の2者がある。小型は43～48・50があり、口径5.8cm～10.9cm、器高は7.2cmから7.5cm、脚部最大径は10.2cm～14.2cmを測る。確認できるものはいずれも回転範削りが施される。また、50は小型であるが若干調整が異なっており、脚部上半から口縁部にかけてカキメが施され、49を小型にしたような形状である。小型の短頸壺には口縁部が

直線的に短く上に延びるものと、外反するもの(46)、直線的に外傾するもの(47)がある。また44には範記号が施される。大型は49がある。口径10.0cm、器高17.5cm、胴部最大径17.5cmを測る。胴部上半にはカキメが、底部には回転範削りが施される。肩部には3条の範記号が施される。

甕(51)は直口する口縁部をもつ。52・53の把手と胎土、焼成、色調が類似しており、同一個体である可能性が高い。脚付甕(54)は球形の胴部に、外傾し、直線的に延びる口縁部をもつ。胴部は下半にカキメ、底部には回転範削りが施される。脚部は3方向の長方形透かしが開けられている。

55は小片のため全体の器形は不明であるが、特徴から提瓶の口縁部片と考えられる。外面には範状工具痕が認められる。56も破片であり、全体の器形は不明である。下半には回転範削りが施され、脚部の接合痕が認められる。長頸甕(57)は頸部片がなく、器高は復元による。体部は肩が丸く、2条1組の沈線が上下2段に巡らされる。底部は平らである。

土師器は58のみである。器形は不明であるが、段が確認できる。

3. 2号墳の調査結果

(1) 墳丘(図版37 写真団版43・45)

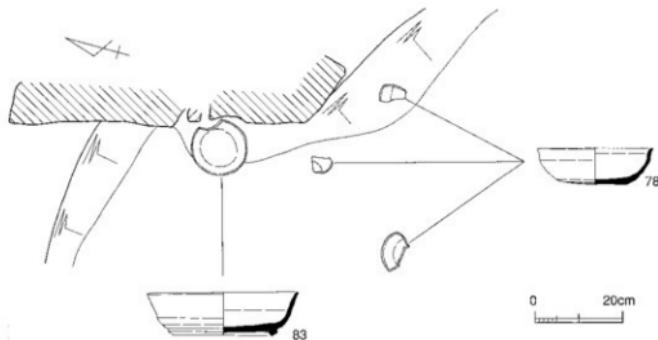
1号墳の南西側、約5mに位置し、南斜面に立地する。墳丘はかなり破壊されており、遺存状況は悪い。墳丘の山側に幅1.5m、深さ0.2mの周溝が巡らされており、それにより平面形は長軸が8.0m、短軸が6.8mのやや細長い円形であったことがわかる。現存する墳丘の高さは最も高低差のあるところで1.35mを測る。標高は高いところで224.6m、低いところで223.3mを測る。

墳丘の盛土は最下層に第11層が墳丘中心よりやや下方に置かれ、その後、石室の構築と併行しながら周囲に広げるようにして第6～10層が置かれている。

(2) 埋葬施設(図版39 写真団版44)

石室 横穴式石室が1基検出された。遺存状況が悪く、石材はほとんどが抜き去られており、詳細は不明である。石室全長は、確認できる最先端から、奥側の石材の抜き取りに伴う攪乱までを含めるとおよそ3.5mとなる。幅は左右両壁面が残る部分で0.7mを測る。

現状では左側壁が長さ1.80m、高さ0.36m、右側壁が長さ1.00m、高さ0.18mが残されるのみである。



第7図 2号墳遺物出土状況

基底石は石材を立てており、その上は石材を横口積みにしている。

遺物出土状況 第7図のように石室の入口側、斜面の下方の攪乱内から多くが出土している。その中で83のみが唯一原位置を留めていると考えられる。

(3) 出土遺物（図版39 写真図版46）

坏G 4個体（78～81）、坏B蓋1個体（82）、坏B 2個体（83・84）、長頸壺3点（85～87）、壺底部片2点（88・89）、鉄鎌（T14・15）が出土している。

坏Gは口径9.2～10.2cm、器高3.4～4.0cmで、いずれも笠切り未調整である。78・79は口縁部で若下外反しており、79は笠切り後丁寧にナデ調整を施している。坏B蓋（82）はカエリをもつもので、全体に偏平である。高さのあるつまみをもつ。天井部には回転範削りが施される。坏Bはいずれもゆるやかに彎曲する体部をもち、口径13.5～13.6cm、器高3.7～4.0cm、高台径9.5～9.9cm、高台高0.4～0.5cmを測る。底部にはいずれも回転範削りが施される。長頸壺の85は頸部に3条の沈線が造らされる。88は底部側面に回転範削り、底には横ナデの痕跡が認められる。89は円形の透かしが4方向に開けられた脚部である。

鉄器はいずれも尖根式の鉄鎌と考えられるが完存するものはない。T14は現状で長さ13.0cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmを測る。T15は現状で長さ10.1cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmを測り、茎が若干遺存する。

4. 小結

福島1号墳は遺存状況がよく、墳丘からも埋葬施設からも土器を中心として多くの遺物が出土した。特に墳丘から出土した装飾付台付蓋は特徴的な遺物である。須恵器は平方窯の1～3号窯と併行するものと考えられる特徴をもち、陶邑編年のTK-43～TK209型式に併行するものと考えられ、鉄鎌もその時期を否定するものではない。特に、焼成・形態などが平方窯出土遺物と類似するものが含まれており、直接平方窯から供給されたものもある可能性が高い。また、出土位置によって時期を蓋坏を中心に細かく見ると、第2主体部から出土した須恵器が蓋に稜線をもつことから型式学的にもっとも古く位置づけられ、次いで墳丘出土須恵器、最後に回転ヘラ削りが省略されている第1主体部出土須恵器の順となる。しかし、直接比較できる資料が蓋坏のみで、出土点数も限られていることから、あくまでも型式学的な序列にすぎない。

また、この時期には一般的に横穴式石室がかなり普及しているが、当墳ではそれが採用されず、旧米の木棺直葬を埋葬施設として選択している。近接する2号墳では横穴式石室が築造されており、石材の確保が不可能であったという理由だけでは、納得のいく解釈とはならない。

次に、福島2号墳であるが、遺存状況が悪く、不明な点が多いため、埋葬施設が横穴式石室であるとのみ確認できた。出土した遺物も原位置を留めるものは少なく、ほとんどが攪乱からの出土である。出土した須恵器は（福島Ⅳ、飛鳥Ⅳ期）に属する特徴をもつ。しかし、遺物の遺存状態が悪いため、この時期が古墳築造の時期を示しているとは限らない。

これら1号墳・2号墳の周囲には近接する古墳ではなく、2基で一つの単位を形成しているような立地を示している。しかし、今回出土した遺物のみから判断すると、2つの古墳には時期的に隔たりがあり、1号墳の築造後、継続して2号墳が築造されたとは考えがたい。

第3節 福島15号墳の調査

1. 概要

15号墳は、武庫川の形成した平野部から約700mほど丘陵地帯に入った支尾根の基部付近に立地する。福島古墳群の位置する主尾根は西向きに伸び、幾筋かの支尾根が北方向に分岐している。15号墳の位置する支尾根もその一つである。この支尾根は主尾根のほぼ中央付近から北に派生し、基部から中程までは緩らかに北に向かって下降するが、中程で崖状に急激に下がった後、再び平坦となって先端に至る。尾根先端は崖となって青蓮寺川の流下する谷に落ち込む。この支尾根上には15号墳以外の古墳は知られていない。

15号墳の立地する付近を詳細に見れば、主尾根から幅広く北西に分岐した支尾根が崖根が北東方向に向きを変え、幅を減しながら伸びていく。15号墳はこの支尾根が向きを変える標高約218m付近の尾根上の平坦面から東斜面への傾斜変換点にかけて占地している。

支尾根の東側には福島大池のある東西の谷から分岐した北向きの谷が入り込む。この谷は入口付近が渓谷状に狭く険しいものの、奥部では広く傾斜も緩やかになって東西の2つに分岐する。15号墳はその内の西に分岐した谷を逆上った尾根上に位置しており、この谷を利用すれば比較的容易に15号墳まで到達することができる。

調査前の墳丘概観では中央に墳丘を分断するような盗掘坑と思われる窪みや、南東側の墳丘裾には盗掘の際の廃土と思われる高まり、斜面側の墳丘に自然崩落と見られるずれが観察された。深い窪み内には天井石が路頭し、天井石から奥側は空洞になって、幅の狭い溝道部状の空間や、玄室状の空間が観察できた。しかし、この空間を覆う天井には天井石はこの1石のみしか見られず、その奥側は土で覆われていることが観察され、古墳に伴う横穴式石室ではない可能性が考えられた。

調査では15号墳は尾根上側に周溝を巡らした径15m程の円墳であることが判明し、墳丘中央の窪み内とその下層にそれぞれ石室が検出された。窪み内の石室を上層石室、この石室の下層から検出された石室を下層石室として記述する。

下層の石室は傾斜に平行した南東方向に開口した古墳に伴う横穴式石室で、石室内外からの出土遺物からみて、福島3-1期新段階に築造され、3-2期に追葬が行なわれた後、古墳としての利用は終わっている。しかし平安時代前半には開口されて再利用され、その後中世初頭にも再度利用されている。

上層の石室は下層石室の床面を埋めて構築されたもので、下層石室に落ち込んだ天井石を奥壁とし、下層石室の西壁を改修して利用、東壁は下層石室の石材を利用して構築されたものである。その使用目的は不明である。

2. 15号墳の調査結果

(1) 墳丘（図版40~42 写真図版47~49・59）

南北に伸びる尾根の平坦面から東斜面への傾斜変換点に築造されており、墳丘中央は上層石室構築の際に壊され、斜面側の墳丘にも若干のずれが認められた。

尾根上にあたる墳丘西半には幅広い皿状の周溝が設けられており、その部分での墳丘裾部は明確にな

っていた。墳丘東裾は斜面に盛土されたのみで、裾部を保護するような外部施設もなく不明瞭であるが、尾根斜面と墳丘部では傾斜に異なりが見られた。これらを手掛かりに墳丘規模を計測すれば、墳丘は石室と平行する南東一北西方向が約15m、それと直交する方向が約13mとなり、墳形は石室方向に長い楕円形である。高さについては墳丘中央部が上層石室構築の際に埋されていることがあって築造時の状態は判明しないが、現存する状況では尾根上側で最高約1.3m、斜面下方側からの見掛け状の高さは約2.5mを測る。

墳丘の断面観察では、墳丘盛土は石室床面から約70~80cmまではほぼ水平に、その後は石室から墳丘裾に向かって傾斜を持たせて行なわれている。盛土上には一部に炭化物を含む層も確認されたが、旧表土状の堆積土は認められず、墳丘は旧地表を平垣に削平した後に盛土を行なって構築されている。

墳丘の盛土には基本的には地山の削平土である赤褐色・黄褐色シルトおよびその混合土が使用され、一部に旧表土下の堆積土と見られる暗黄褐色シルトも使用されている。

尾根上側の周溝は墳丘西半を半円形に巡り、幅約2.5m~4.4m、深さ約16cm程度で、断面は浅い皿状である。

(2) 石室（図版43・44 写真図版49~58）

上層石室 墳丘上から掘り込まれた掘り方を持ち南東方向に開口した石室で、全長約5.0m・幅約1.2m・高さ約0.8mを測る。石室中央には長さ約1.5m・幅約0.7m・高さ約0.7mの長方形の石積みが石室と平行して設けられていた。石積みと東壁の間は、床面に敷石が見られるが、天井石は無く、奥壁側や西壁側とは異なって石と暗黄褐色土で埋められたような状態であった。

石積みと西壁・奥壁の間には未分解の腐食物を多量に含む灰褐色・黄褐色シルトが約50cmの厚さで流入し、上面には腐食土層が堆積していた。この腐食土層の上は天井石の有無に関わらず約20~30cmの空洞となっていた。天井石は石積みから奥壁・西壁に渡してそれぞれ1石が架けられているだけで、石積みと奥壁・東西両壁によって創出された空間の天井を全てを覆っていない。それにも関わらず流入土の上が空洞になっていたことから、この2石の天井石を支えに木ないしは土などを利用して天井が貼られていたものと判断している。

石室の奥壁は一石で構築されていたが、下層石室内に落ち込んだ天井石を利用したようである。西壁は下層石室の西壁を修復して利用し、東壁は下層石室の東壁を約80cm内側に寄せ、下層石室を埋め込んだ床面上に構築している。おそらく下層石室の東壁を破壊し、その石材を利用したものであろう。

これらの天井や壁によって、石室構築時には奥壁と石積みの間に長さ約1.3m・幅約1.8m・高さ約0.7mの空間が、石積みと西壁の間には幅0.4m・長さ1.5mの幅の狭い通路状の空間が造り出されていたようである。

奥壁側の空間の東壁には墳丘外に向かって空気抜きないしは煙出し用の溝状の石組が設けられていた。この施設は奥壁から50cm、床面から30cm上の東壁基底石上に幅15cm・高さ約30cmの窓を空け、そこから墳丘外に向かって約1.4m伸び終焉している。石組は幅15cm・高さは約30cmで、石で蓋がされ、底は墳丘外ほど高くなっていた。

石室の床面は下層石室の床面を厚さ約20cmに黄褐色土で埋め込んで構築し、中央石積みの両側から奥壁間に繩敷がされ、入口中央にも集石が認められた。この集石と石室中央の石組みの間は東西壁に囲まれた空間になっており、何らかの作業場の可能性が高い。

出土遺物は無く、壁や床面に火を受けた痕跡も見られない。

下層石室 15号墳の造営の際に、その埋葬施設として構築された横穴式石室である。上層石室の構築時に大きく破壊されており、形式については不明な点が多いが、遺存していた東壁・西壁に連続して検出された石の抜取り跡や据え付け穴から石室は全長約7.1mで、東西壁とも奥壁から約3.4m付近で内側に突き出していることから、両袖式であった可能性が高い。

玄室は長さ約3.4m・最大幅1.9mで、平面形は両側壁の中央がやや脹らんだ長方形を呈する。奥壁は約0.8mまで遺存し、墓塚の底面を掘り込んで2枚の偏平な石材を立て、その隙間を小口積みするように埋め構築している。西壁は基底に4石を据え、その上に小形の石材を使用した1段の石積みが、奥壁際で最高約1.2mまで遺存していた。ただし、奥壁際の石は大きく、削られた痕跡も認められ、上層石室構築の際に乗せられた可能性もある。東側壁は奥壁側の基底が2石遺存していたが、抜取りあとから西壁同様に基底は4石であったようである。

玄室の床面は羨道部の床面より約10cm高くなっている。玄室中央の床面上や玄門付近の床面上には焼土と礫群が、玄室奥の両側壁際には小礫からなる礫群が認められた。これら礫群の小礫が玄室の敷石であった可能性は高いが、玄室中央や玄門付近の焼土と礫群は平安時代末から鎌倉時代初頭の再利用時のものであり、小礫がこの時期に持ち込まれた可能性も残ることから断定はできない。

羨道部は玄室とは平行ではなく約15°斜面下方側に掘れて玄室に取り付いている。羨道の規模については石材がほとんど遺存していないため不明だが、幅は約1.1m程度と見られる。長さについては前庭部の問題もあり判断できないが、石材の抜取り跡は玄門部より長さ約3.7mにわたって連続している。床面は玄門部から2石目付近まではほぼ水平であり、そこから墳丘外に底幅約40cmの溝状の掘り込みが長さ約5mにわたって検出された。底面は斜面下方側に向かって傾斜しており、東方の谷部から石室内に至る羨道と判断される。

墓塚は上端幅約4.2m、下端幅約3.3m、北西コーナーの最深部で約0.9m、長さは約8mを測るコの字形状に、床面がほぼ水平になるよう掘られ、開口部はそのまま羨道に連続している。

遺物出土状況 石室床面と石室前面の羨道内および石室前面の斜面下方側に積まれた堆土中などから、須恵器・土師器・瓦器の土器類と鉄製品が出土した。

石室床面からは土器類と鉄製品が出土し、土器類には須恵器杯口蓋（90）・杯G（109）・盤（113）・高杯脚部（114）・短頸壺（117・118）・小形短頸壺（121）・杯A（133）・杯B（137）・椀（138・142～144）の他、瓦器椀（149）がある。鉄製品はT16の鉄鎌1点のみである。これらの遺物も追葬時や再利用時に移動されたようで、原位置を保っているものは極めて少なかった。ただ床面上に見られた2カ所の焼土や礫群の上面や下面からは中世初頭から前半の須恵器機が出土している。

石室前面の羨道内からは須恵器・土師器が出土し、須恵器には杯口蓋（90～92）・杯H（93）・杯G蓋（99・100）・杯G（101～103・106・108・110・111）・高杯脚部（114）・短頸壺（118）・小形短頸壺（121・122・123）・長頸壺（127）・杯B（137）・椀（139・140・143～145）が出土し、明らかに古墳築造時や追葬時のもの他、平安時代前期の再利用時のものまでが含まれている。

上記の土器番号でも分かるように、石室内出土の土器が羨道内出土の土器と接合されたり、墳丘西側の周溝から出土した土器と接合されるものもあり、明らかに石室内には攪乱が認められる。また、こうした接合関係は羨道の遺物が中世以降に石室内から搔き出されたことを物語っている。このような出土状態であることから、古墳築造時や追葬時および再利用時の遺物に間わらず、今回の出土遺物はその遺物の原位置からは遊離したものと言える。

(3) 遺物 (図版45~47 写真図版60~63)

出土した遺物には土器類60点と鉄製品2点があり、土器類の内訳は須恵器59点、土師器1点となっている。これらの遺物には15号墳築造時・追葬時に作るものとともに、再利用時のものが含まれている。なお、掲載した以外に土師器甕の破片があるが、図化が不可能であったため掲載していない。

築造・追葬時の土器 須恵器には杯H蓋・杯H・杯G蓋・杯G・杯I・碗・盤・高杯・短頸壺・長頸壺蓋・長頸壺・罐・平瓶・提瓶・横瓶・甕があり、土師器は1点のみである。

杯Hは90~95の蓋3点・身3点がある。蓋はいずれも矮小となり、天井部と口縁部の境を僅かに屈曲させるもの(90)と天井部からそのまま口縁部に移行するもの(91・92)がある。3点とも天井部に範削りは見られず、範切り後にナデ調整される。法量は揃っており、口径12.6~13.7cm・器高3.9~4.1cm。

身3点はいずれも破片である。93・94はともに口縁の立ち上がりが低く、偏半な器形で、受部が巻き込むようになる。93は底部を欠くが、94の底部は範切り後ナデである。口径は93が12.7cm、94が11.7cm。95も底部を欠いており全体の器形は不明だが、93・94より深い器形で、受部から口縁部は肉厚である。口縁の立ち上がりは低く、口縁部の断面は三角形を呈す。受部は斜め上方に短く伸びる。口径12.9cm。

杯Gは蓋5点(96~100)と身10点(101~110)がある。杯G蓋は5点ともカエリが付くもので、96・97は杯H身を逆転させたものにツマミを貼り付けたような形状を呈する。内部のカエリでは口縁部より下方に出るもの(96~97)と口縁部とほぼ同じ位置にあるもの(98・99)、口縁部の内側でおさまるもの(100)の3種がある。天井部のツマミは乳頭状のもの(96~98)とくずれた宝珠形のもの(99)がある。100はツマミを欠くが宝珠形のツマミが付くものと思われる。このツマミの形状によって口径に差が認められ、前者は口径8.0~9.3cm、後者は6.9~7.5cmとなっている。5点とも天井部は範削りである。

杯G身は口縁部と底部の形状によって法量が差異が認められる。底部が丸みをもつ101・102・106は口縁部の形状に関わらず口径9.3~9.6cm・器高3.7~4.0cmとほぼ揃っている。底部が平なのものは口縁部の形状に法量が異なり、口縁部が外反する103~105は口径8.4~8.7cm・器高3.3~3.4cm、口縁部が直立する110は口径9.4cm・器高4.1cmである。110の法量は底部に丸みをもつ群の法量に類似する。106・110は底部を範削りしており、102~105は範切り後にナデを施す。

杯Iは107~109の3点があり、133もこの類に入るものかもしれないが、133については口径が大きく、杯Hの蓋になる可能性もある。107~109は口縁部が内済しながら外方に伸びる107~109は口径10.4~10・8cm・器高3.3~3.6cm、133は口径12.3cm・器高3.4cm。底部は範切り後ナデ(109)か範切り未調整(107・133)である。

碗は111・112の2点があり、口径に対し器高の高い深い器形である。口縁部下半から底部にかけては半球形状となり、その部分を範削りする。111は口径9.1cm・器高4.3cm以上、112は口径8.9cm・器高5.7cm。112は器壁の厚い器形である。

113は盤としたが、杯Aとも皿ともとれる器形である。口径17.3cm・器高3.7cm。底部から口縁部下半の外面を範削りする。

高杯114は脚部の破片であり、脚柱部から裾部が大きく横方向に外反する。

罐115は底部外縁を不定方向に範削りしたもので、体部は肩部が屈曲気味となって偏平となり、頸部は基部が細く、口縁部は大きく外反する。頸部と口縁部の境は不明瞭で、内面にシボリ目を残す。孔の上部に1条、頸部中央に2条の凹線が施されている。

短頸壺116~124には最大径が10cm以上の116~119と10cm以下の121~124があり、後者を小形壺に含め



1. 墓丘断面（南から）



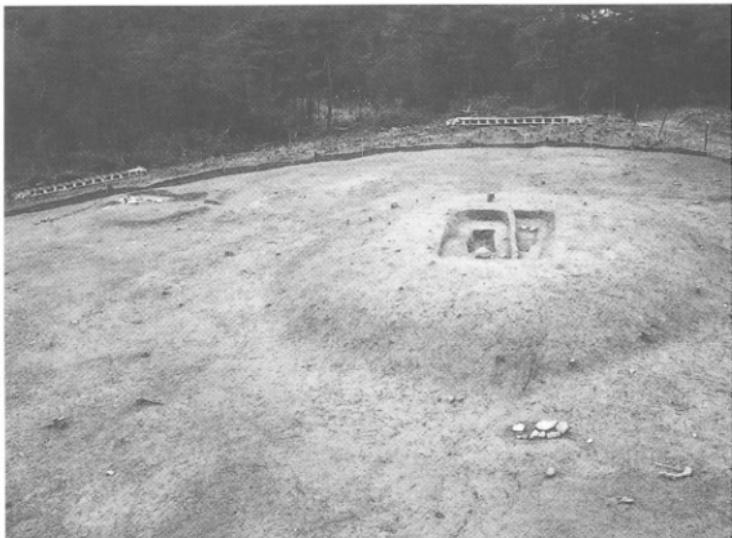
2. 墓丘断面（西から）



3. 墓丘断面細部（南から）

福島 1号墳

1・2号墳



1、2号墳との位置関係（東から）

1号墳



2. 墓丘外土壤（東から）



37



出土遺物（1）



装飾壺

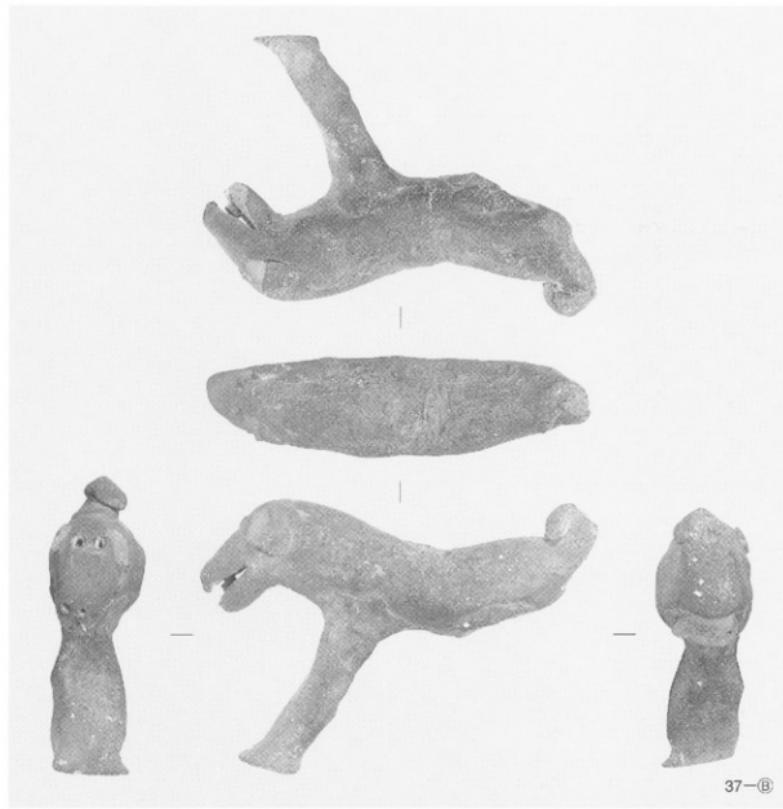
福島 1号墳



出土遺物 (2)

37-Ⓐ

装飾壺 獣形細部



37-⑧



37-⑨

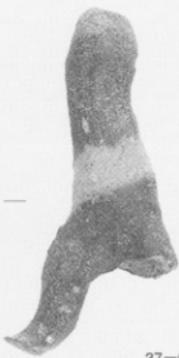
出土遺物 (3)

装飾壺 獣形細部

福島 1号墳



37-④



37-⑤



37-⑥

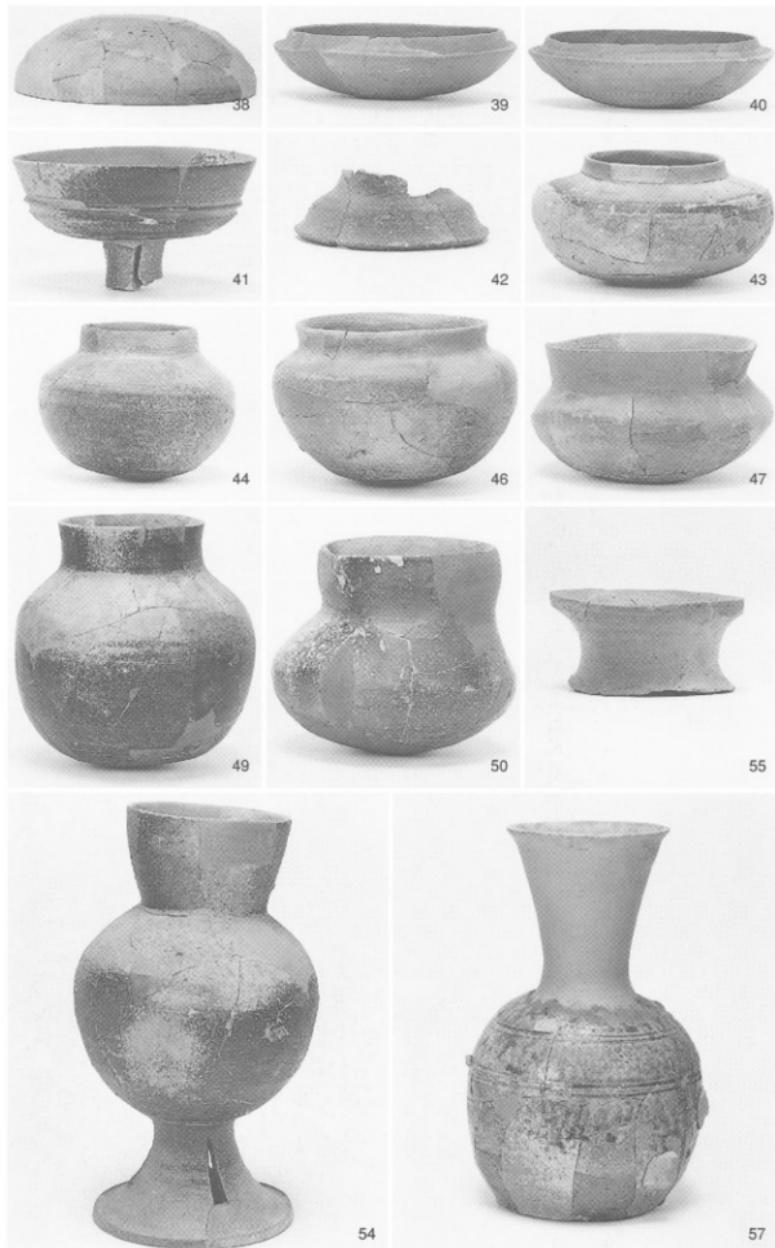


37-⑦

出土遺物（4）

写真図版 39

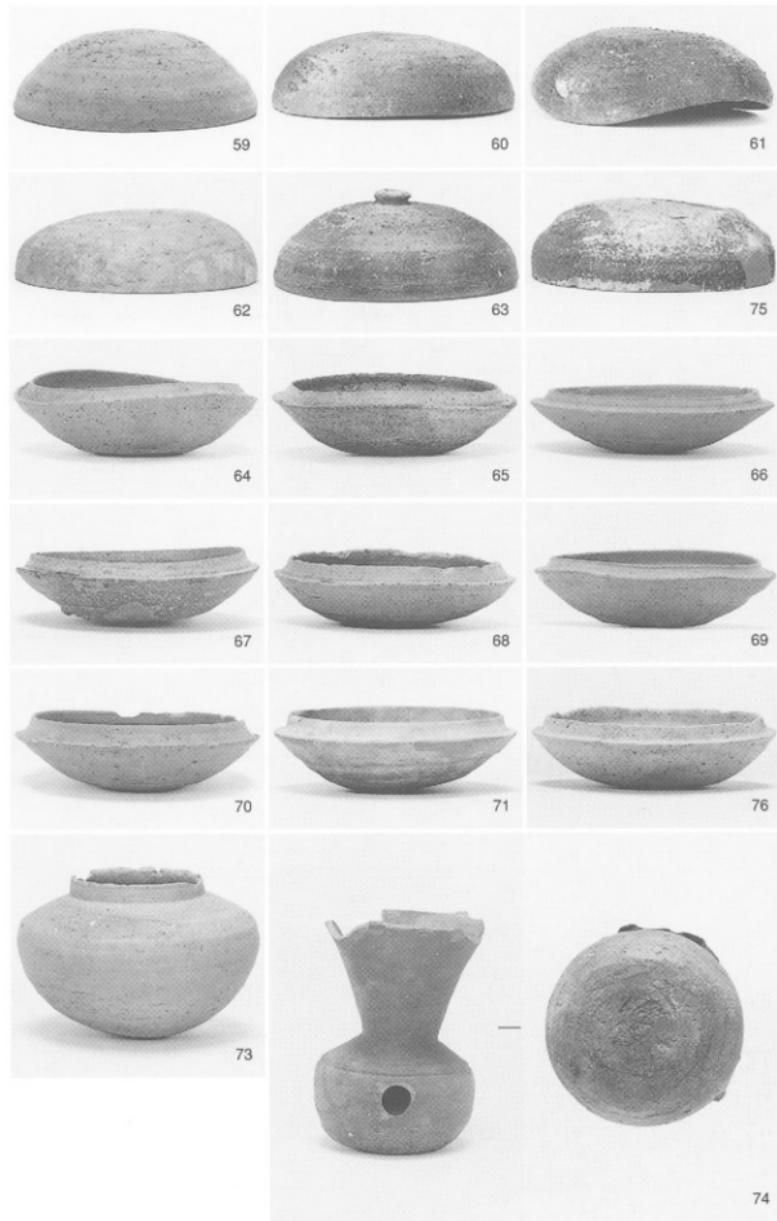
福島 1号墳



出土遺物（5）

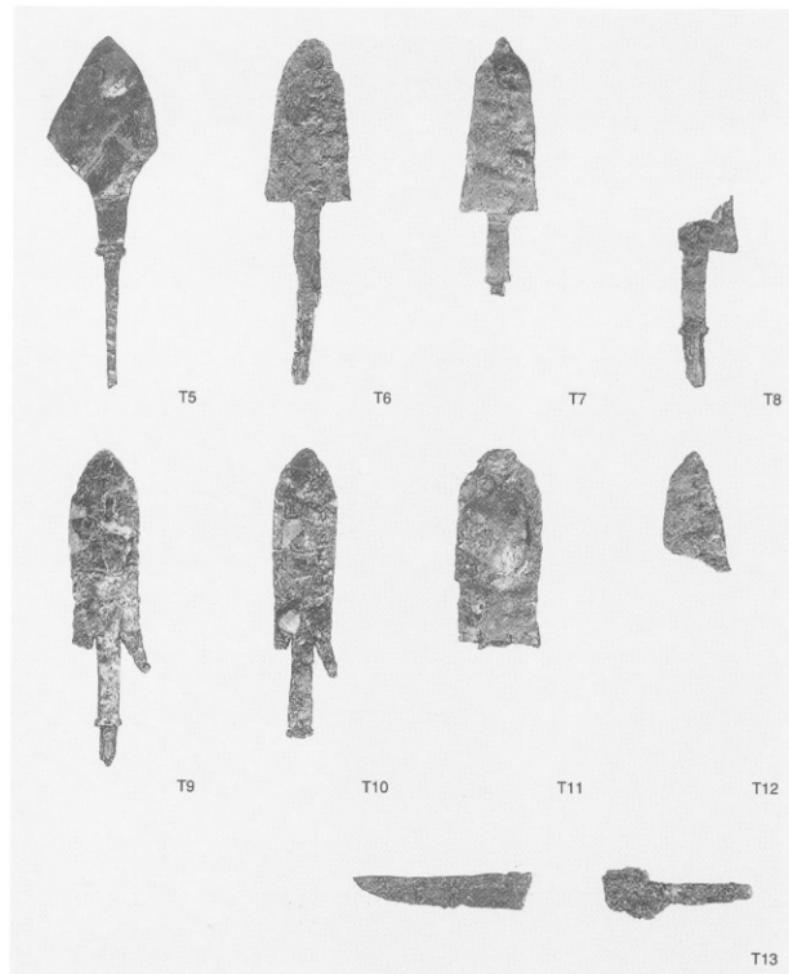
土器

福島 1号墳



出土遺物（6）

土器



出土遺物（7）

鉄器

て前者とは区別した。116～119には、口頭部が外に開く116・117、直立する118、内傾する119があり、116～118の口頭部は僅かに内湾する。また116～118は肩部が張って体部は偏平となり、116・118の肩部が屈曲して稜をもつ。116は屈曲部に1条の凹線が巡り、118は屈曲部の上位を笠削りしている。116・117は底部外面を不定方向の笠削り、118・119は体部下半から底部外面を回転笠削りする。体部径は116が11.3cm、117が12.9cm、118が13.8cm、119が13.7cm。

小形壺120～124は体部径が10cm以下のものであり、120は口縁部が外反する壺形土器で、底部外面は不定方向の笠削りである。体部径は6.9cm。

121～124は小形の短頭壺である。121・122は肩部が強くはり、121は肩部に凹線が施される。123・124は肩部が屈曲して稜を持ち、稜の上位に凹線が施される。121・123の底部は回転笠削り。体部径は121が8.1cm、122が7.4cm、123が9.7cm、124が8.4cm。

125は平瓶である。口頭部と底部を欠き、体部の1/5が遺存しているだけで断定はできないが、肩部と頭部から復原すれば平瓶になる。体部は偏平で、体部下半は不定方向の笠削りである。体部径9.1cm。

長頭壺127は頭部を欠損しているが脚付長頭壺で、126はその蓋である。127の体部は肩部で屈曲して稜をもち、その上位に凹線が施される。脚部の上端に方形透かしの端が見られる。体部外面は笠削り。頭部内面には体部に口頭部を接合した際の段が残る。肩部に笠記号がある。口径9.2cm。体部径20.7cm。蓋126は天井部が低く偏平な器形で、ツマミの形状は杯G蓋と同様である。天井部は端部まで笠削りする。口径7.8cm・器高2.3cm。

横瓶148は口頭部が短く外反し、口縁部と頭部を分ける稜は丸い。体部外面に平行叩き、内面に同心円の当具の痕跡が明瞭に残る。

壺149は口縁部が断面方形を呈し、稜は丸みを帯びる。体部は中位以上が強く張り、外面は平行叩きの上からカキ目を施す。内面は同心円の当具の痕跡を残す。

128～130は口縁部片で、128は壺ないし平瓶、129は直口壺ないし高杯、130は提瓶の口縁部である。131は壺体部で肩部に凹線が施され、体部下半は回転笠削りである。

132は土師器高杯の脚柱部であり、外面は刷毛後ナデ調整している。

再利用時の土器 須恵器杯A・杯B・碗C・焼Dと瓦器がある。134～136は杯Aで、134は口縁部が直線的であり、135・136は口縁部下半が内湾する。いずれも口縁端部は短く外反する。134・135とも底部は鋸切り後ナデ。134・135は口径11.7～12.8cm・器高3.1～3.3cm。136は口径14.5cm。

杯B137は口径に対して器高の深い器形で、口縁下部は丸みをもつ。底部内面に「X」の笠描き記号が、外面には爪形の圧痕が見られる。口径14.7cm・器高5.9cm。

碗C138～146の9点がある。138は底部が回転糸切りの小さな平底高台で、口縁部は丸みをもつ。口縁部の中位に数条の細かく強いナデが見られる。北播系の上器か。口径16.3cm・器高5.2cm。

139～146は底部が回転糸切りの平底である。口径15.5～16.4cm・器高4.3～5.0cmで口縁部が大きく開くものと、口径14cm前後・器高5.0～5.4cmとやや小振りで深い器形のものが見られる。さらに前者は器高4.8～5.0cmのやや深い139・140と、器高4.4cm前後の浅い142・143がある。142・143は口縁端部を内側に肥厚させている。

瓦器は焼底部片で、高台は断面方形を呈する。外面は指オサエ、内面はヨコナデで仕上げている。

鉄製品 石室内から鉄錆T16が、上層石室埋土の中から刀片T17が出土している。T16は尖根式の錆で刃部と茎部の先端を欠くが、遺存長約12.5cm、刃部の長さ2.4cm・幅0.8cm、茎部は断面方形で長さ3.6cmを

測る。T17は区部から茎部にかけての刀片で遺存全長10.2cm、刃身は遺存長3.0cm・幅2.4cm・厚さ0.25cm、茎部は遺存長6.9cmを測る。

3. 小結

15号墳は、三田盆地東辺に展開する丘陵地帯北端の支尾根上の基部付近に築かれた、径13~15mの円墳である。尾根上の平坦面から斜面への傾斜変換点に築かれたものであり、福島古墳群では尾根上に位置する横穴式石室を埋葬施設とする古墳に通有に見られる古地である。このような古地は福島古墳群内だけではなく、武庫川を挟んだ対岸の中西山3号墳にも共通して見られるものであり、横穴式石室を埋葬施設とする古墳を尾根上に築く際の特色であろう。

15号墳からは古墳築造時の下層の横穴式石室と、それを大きく改変した上層の石室の2石室が検出された。下層の横穴式石室は全長約7.1mの両袖式の石室と判断され、床面の遺存状況は良くなかったが、墓道などから出土した遺物から築造時期は福島3~1期新段階で、福島3~3期段階に追葬が行なわれている。その後平安時代前半には開口されて利用され、平安時代末から鎌倉時代初頭の12世紀中半~後半（川除Ⅳ期）に再び使用されている。

上層の石室は下層の石室を埋めて構築された全長約5.0mの石室で、石室中央に石積みを設けて西壁との間に通路状の空間を、奥壁との間に宝状の空間を創出している。宝状の空間の東壁には小窓が空けられ、そこから外側に向かって突出しとも思われる暗渠状の石組みが設けられていたが、宝状空間を囲む壁や床面に焼けた痕跡は認められず、この空間の構築目的は不明と言わざるを得ない。構築時期については、下層の横穴式石室を埋め込んでいることから、下層石室の最後の利用時期である鎌倉時代初頭以降とすることはできるが詳細な時期については判断できない。ただ、通路状や奥壁側の宝状の空間が粗雑な天井構造であるにも関わらず埋まりきっていないことから、それほど古い時期の構築物ではなく、比較的新しい時期の構築物である可能性が高い。

遺物は再利用時あるいは上層石室構築の際にほとんどが移動させられたり、石室入口の墓道に挿き出されており、埋葬時の原位置を保つものは認められなかった。

第4節 福島23号墳の調査

1. 概要

武庫川の形成した平野部に面した尾根斜面の内、平野部側から入り込んだ深い谷の南西向き斜面に位置する古墳である。尾根の西向き斜面は尾根上から比較的緩やかに下がった後、急傾斜となり、再び緩やかになって山裾に続く。この山裾に至る傾斜の緩やかな部分はかつて開墾されていたようで、階段状の平坦面が雜木林や杉林の中に遺存している。

23号墳は斜面が急傾斜から山裾に至る緩やかになる変換点に位置し、古墳背後のカット面の上部で標高約178.3m、石室の前面で標高約175.4m、古墳の中心では標高約176mを測る。古墳の中心と尾根上の22号墳とは比高差約10.5m、西側の平野部とは比高差は約18mを測り、カット面上部と平唐山跡の最も下方の方形周溝墓であるS X-06とは比高差約3mと近接した距離にある。

調査前の状況は、階段状に開墾された最上段の平坦面の間に乱雑に石が積み上げられて集石された状態であり、集石の上方は崖状となり、集石の下方も段状となった状態であった。確認調査で石列が確認され、はじめて古墳と把握されたものである。

調査の結果、石室の一部は調査区外になっていたが、この古墳は横穴式石室を埋葬施設とする円墳であり、墳丘盛土はすでに失われていたが、墳丘は径10m前後と判断された。斜面の上方側は地山をカットし、カット部の下に崩溝を設けられていた。古墳の築造時期は石室床面に遺存していた須恵器からみて古墳時代末と判断された。

この23号墳の裾から3m東に離れた地点から、23号墳よりやや新しい時期に設けられた祭祀に伴うものと考えられる土壠が検出された。

2. 調査結果

(1) 墳丘（図版48 写真図版64）

古墳の西半は調査区外になっており、また大きく削平を受けていることからはっきりしない点もあるが、調査を実施した東半の状況では、古墳は背後の斜面を標高約178.3mの地点から176.8m付近までカットして築かれている。そのカット面には弧状に溝が設けられており、溝幅は最も広い部分で約1.4m、古墳の正面背後の最も狭い部分では約0.6mを測る。溝の深さ約0.2mで、埋土は暗灰色シルト層であった。

この溝によって斜面上方側の墳丘裾は明確であったが、墳丘盛土はすでに失われており、石室も築造時の全体が遺存していたとは考え難いため斜面下方側の裾は不明である。そのため、墳形・墳丘規模を明確には出来ていないが、斜面上方側の溝の形状から、墳形は円墳であると判断された。また石室の中心から崩溝肩部までの距離は斜面と並行方向で約4.1mであることから、斜面と並行方向の墳丘規模は約8mと判断される。斜面と直交方向は石室開口部までが6.3mであるが、開口部が墳丘裾とは考え難く、石室の中心から崩溝肩部までの距離約4.3mを折り返した8.6mを斜面と直交方向の規模としておく。

(2) 埋葬施設（図版49 写真図版65~67）

石室 斜面に直交して南南西方向に開口する横穴式石室で、すでに大きく破壊されて遺存状況は悪く、奥壁北半から西壁玄室側は基底石まで抜き取られていた。また遺存していた部分でも西壁の狭道部側と

奥壁は基底石だけが、東壁も腰道部側は基底石だけで、玄室側に最高3段の石積みが遺存していただけであった。

遺存していた部分での石室は全長約3.7m、幅約1.2mで、高さは東壁と奥壁のコーナー部で約50cm遺存していた。東壁の南端の1石が袖状に内側にはみ出した状態となっていたが、内側に傾いたものであり、無袖の石室と判断される。

床面は奥壁から約2.4mまでの範囲に敷石が施され、そこから開口部までの間は敷石は認められなかった。また敷石を区切る施設も設けられていなかった。敷石の上面や隙間からは須恵器や鉄器が出土し、敷石下からの遺物の出土は無かった。敷石には50cm大までの石が使用されており、敷石としては大きい石が使用していた。

石室壁の構築状況は遺存状況が悪いため不明なところもあるが、奥壁は南半に偏平な石が1枚遺存していたが、北半にも石の抜取り跡が見られることから、本来は2枚の偏平な石が立てられていた判断される。東壁は奥壁側から基底石を置き、その上に石の長辺を内側に積み上げて構築されており、最高3段までが遺存していた。壁の構築に使用された石は河原石と割石で、南端の石を除くと60cm大までの小型の石が使用されている。西壁は南端から3石目までが残っているだけで詳細は不明だが、基底には小形の石の長辺を内側にして据えられている。両壁の南端や西壁には90cm大の石が壁を構築するかのように置かれていたが、西壁では墓壙をはみ出した状態であったこと、これらの石に割った痕跡が確認されたことから、壁を構築するものではないと判断している。おそらく天井石の一部であろう。

墓壙は東壁背後から奥壁南半の背後にかけては明瞭に検出され、その部分では長さ3.8m・深さは奥壁背後で52cmを測る。奥壁北半の背後から西壁背後にかけては調査区外になることや、盗掘による搅乱を受けているため、明瞭には検出できなかった。盗掘による可能性もあるが、西壁の基底石の残る部分で僅かに検出された高さ7cmの段を墓壙の一部とすると、墓壙の幅は約2.5mとなる。

遺物出土状況 石室床面の敷石上面や敷石の隙間から須恵器杯蓋・杯身が5個体づつ、鉄鎌の茎が1本出土した。

奥壁際の奥壁と敷石の隙間から杯蓋1個体(150)が出土し、土器9個体と鉄器は、奥壁から0.9mから1.4m・西壁から0.9mの範囲の敷石上から出土した。1カ所にまとまって完形で出土したのは152の蓋と157の身の2個体であり、残りの7個体は1/2~3/4ほど遺存する破片に少し離れた小片が接合される状態であった。さらに、一部の破片を消失して完形に復原できないものもみられることから、必ずしも原位置を留めていない可能性もあるが、最大の破片を中心見た場合、杯蓋はすべて正位置の状態であり、杯身は正位置を保つもの2個体(155・159)、逆転位のものが3個体(156~158)みられた。また杯蓋は奥壁側に、杯身は腰道より集中していた。

(3) 出土遺物(図版50 写真図版69・70)

須恵器杯蓋5個体(150~154)・杯身5個体(155~159)、鉄鎌1本(T-18)が石室内から出土した他、埴丘外の土塗から須恵器碗1個体(164)と鉄鎌2点(T-19・20)が出土している。

石室内から出土した杯蓋5個体は口径12.4~12.8cm、器高3.7~4.1cmで、口径は縮小し、152の天井部は平らでやや高いが、その他は天井部も低く偏平で丸み帯びた器形になっている。天井部と口縁部の境は弱く屈曲するもの(150~152)、強く屈曲するもの(153)、僅かに稜をなすもの(154)が見られる。天井部全体に笠削りを施す(150~153)と、天井部の周囲のみ笠削りし、頂部は笠切り後ナデて仕上げるもの(154)が存在している。周囲の笠削りが先行し、ナデは笠削り後に施されている。151・152・154

の天井部内面には一方向（150・152）ないし2方向（151）、不定方向（154）の仕上げナデが施される。153は仕上げナデが省略されている。

杯身は口径11.0～11.4cm、器高3.3～3.9cmで、口径は縮小している。口縁部の立ち上がりは低く短いもので、受部から内傾して立ち上がり、中程で短く直立する。底部の調整には全体を範削りした155、周囲を範削りし中央は範切り後ナデで仕上げた156～158、範削りを省略しナデだけで仕上げた159の3種がある。中央のナデと周囲の範刷りの前後関係ははっきりしない。底部内面には1方向（155・156・159）ないし不定方向（157・158）のナデが施される。

鉄器はT18の1点だけが出土している。T18は現存長約17.1cm、厚さ0.4cmで、両端は欠けている。尖根鐵の基部である。

④ 墳丘外の遺構

SK-01（第8図 写真図版69・70）

23号墳の埴丘裾から東に約3m離れた斜面から検出された土壇で、平面形は長軸を斜面と並行方向に置いた楕円形で、長軸約100cm・短軸約55cm、深さ14cmを測る。埋土は暗褐色シルト一層で、内部には30cm大までの角礫と、須恵器杯蓋・杯身（160～163）が2セット埋納されていた。中央寄りの杯セットは上壇の中央に向かって傾斜していたが、杯身（160）が正位置で置かれ、その上にずれた状態で杯蓋（161）が置かれていた。土壇よりのセットはほぼ水平で、正位置の杯身（163）の中に落とし込むように逆転位で蓋（161）が重ねられていた。

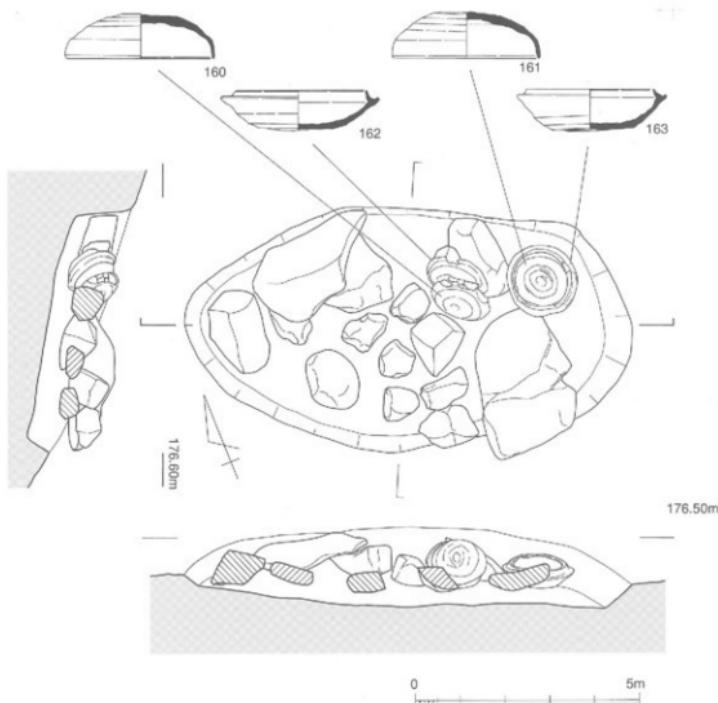
杯蓋160は口径13cm・器高4.0cm、161は口径12.9cm・器高4.1cmで、ほぼ同形同大である。調整手法はともに天井部の周囲だけに範削りが施され、中央は範切り後ナデで仕上げられている。周囲の範削りが先行し、最後に中央をナデしている。ともに天井部内面に仕上げナデが施されている。色調は灰白色を呈し、焼成は悪い。

杯身162は口径11.5cm・器高3.6cm、163は口径11.2cm・器高3.8cm。底部は平底状で、全体に偏平な器形である。口縁部の立ち上がりは低く短く、受部は斜め上方に内湾する。底部の調整は蓋の大井部と同様で、底部周囲のみ範削りし、中央はナデで仕上げている。ナデが範削りに被さっている。163の内面には1方向の仕上げナデが施される。162は磨滅しており、観察できない。色調・焼成は蓋と類似しており、これらの杯蓋・杯身は同一窯での製品である可能性が高い。

⑤ その他の遺物（図版50 写真図版70）

23号墳の周溝および周辺の流土から須恵器椀（164）・鉄器（T-19・20）が出土している。164は周溝から出土したもので、底部は回転糸切りである。口径16.4cm・器高5.3cm。神戸市北区の小名田窯周辺の座か。

鉄器2点（T-19・20）は周溝南端付近の流土から出土したもので、T-19は下端を欠くが、残存長さ6.7cmの棒状の鉄器で、上端で幅2.0cm・厚さ0.9cm、下端が幅1.1cm・厚さ0.3cm。上端面に打痕が残る。T-20は残存長6.6cm・厚さ0.6cmで、断面方形の棒状の鉄器が折れ曲がったものである。折り返された部分の長さが3.9cmであり、上端が欠けており、本来は長さ10cm以上であったものである。



第8図 SK-01

3. 小結

以上のように23号墳は遺存状況は悪いものの、背後の斜面をカットし、斜面上方側に弧状の溝を設けた径8mほどの小規模な円墳で、埋葬施設は斜面と直交して設けられた無袖の横穴式石室であった。石室の床面には埋葬時の原位置を保ってはいないものの、須恵器杯蓋・杯身と鉄釘1点が遺存していた。

これらの杯蓋・杯身は口径の小型化が進んでおり、外面を範削りするものと範削りを省略するものがあり、福島Ⅲ-1期の古段階に該当するものである。石室内にはこの年代を遡る遺物は見られず、これらの土器類のもつ年代観が本墳の築造時期と考えられる。

追葬の有無については、石室の遺存状況が悪いこともあって不明な点が多いが、遺物の出土状態にかたづけられたり、故意にまとめられたりした様子は観察できることや、他の時期の遺物は見られないことなどから、追葬が行なわれたとは考え難い。

墳丘外の土壤SK-01は、出土した須恵器杯蓋・杯身に範削りが省略されており、福島Ⅲ-1期の新段階に相当するものであり、23号墳築造後の祭祀に関連した遺構である可能性が高い。

第4章 福島龍王谷遺跡の調査

1. 概要

遺跡は武庫川東岸に形成された平野部の東端に位置し、福島古墳群の所在する丘陵の主尾根の裾に位置している。平野部は地形的には軟弱な氾濫低地と低位の段丘面からなるが、丘陵地帯に入り込んだ開拓谷の口には氾濫低地に向かって緩傾斜する扇状地状の地形が形成されて、氾濫低地や低位段丘面より一段高くなっている。そのため、平野部には高い谷口と谷口に挟まれた浅い谷が形成されている。また平野部を囲む山地や丘陵地帯の裾には段丘崖が発達し、特に遺跡の周辺では顕著に見られる。

遺跡はそうした深い谷の一つ、青龍寺前面の沢ノ本集落の乗る扇状地状の高まりと、龍王谷の口に形成された福島集落の乗る扇状地状の高まりに挟まれた谷の最奥部に位置し、地形的には低位の段丘上に位置する。そのため調査区の西側は比高差約0.8mの小さな崖状の段となり、東側には比高差約2.2mの崖が形成されている。

調査は水田1筆分、約516m²について実施し、中世から近世の屋敷に伴う柱穴・土壌・溝・通路状遺構が検出された。遺構の検出面は水田面から約40~60cm下がった黄灰褐色粘質シルト・灰褐色シルトの上面で、基本的には北東から南西に傾斜する。黄灰褐色粘質シルトは段丘面を構成する所謂地山で、SD-02・04から東側の遺構検出面である。SD-02・04から西側ではこの黄灰褐色粘質シルトの上に堆積した灰褐色シルトの内の第20・21・27層の上面が遺構の検出面であった。遺構検出面はSD-07の南側で約40cmの段をなして南に下がり、この段は遺跡廃絶後の水田化の際にも畦畔として存続し、現在まで連続している。遺構検出面と地山である黄灰褐色粘質シルト上までの間に堆積した灰褐色シルト層は鎌倉時代から室町時代までの遺物包含層であり、検出された遺構は室町時代以降の年代が与えられる。

検出された遺構数は少なく、柱穴は建物跡として復元できたものはないが、溝類は条形地割りと同方位でL字形に柱穴群を囲んでおり、屋敷を区画する溝と捉えることができ、今回の調査で検出されたのは屋敷の東南隅部と判断される。通路状遺構はその延長状に北方に続く里道が現在（調査時）もあり、それに連続するものであろう。

2. 遺構（図版51 写真図版71）

柱穴31個・土壌5基・溝8条・通路状遺構1本が検出された。これらの遺構の配置を見ると、調査区中央から北方に集中し、調査区南端では2本の溝が検出されたのみであった。

(1) 柱穴群（写真図版71）

31個が検出されたが、その大半はSD-02・07に「L」字形に囲まれた区画内から検出されている。この区画外から検出されたものはSD-02・03の間から検出された2個があるのみである。区画の北端ではSD-01に切られた状態で検出されている。

柱穴群にはSD-02と平行する方向性が認められるが、明確に建物として復元できたものはない。柱穴個々は掘り方約20~40cmの円形で、深さは10~30cmを測る。内部に柱根が遺存したもの、柱痕内に礫を詰め込んだもの、埋土に炭化物を多量に含むもの、抜取り穴が認められるものなどが存在した。

(2) 土壙群

SD-02・07に囲まれた区画内にて柱穴群と混在して検出された2基と、溝など切って營まれた大型の土壙3基が検出された。

SK-01 (図版53 写真図版72)

長径約110cm・短径約72cm・深さ約10cmの楕円形を呈する浅い土壙で、内部には最大20cmまでの繩からなる繩群が存在した。埋土は暗灰褐色シルト層で、多量の炭化物が含まれていた。173の丹波焼鉢が出土している。

SK-02

長径250cm・深さ5cmの浅い土壙であるが、東半は確認調査の際に消失している。埋土は暗灰褐色シルト層で、断面は皿状を呈す。170の須恵器碗底部が出土している。

SK-03 (図版52 写真図版73)

調査区中央の東端で検出された長辺約350cm・短辺264cm以上・深さ約40cmの長方形の土壙で、東辺は調査区外となっている。西法面には2段の石積みが施され、肩部からSD-02の間の1m幅は繩が敷かれ通路状になっていた。埋土は暗青灰色シルトで、最下層に薄い砂層の堆積が認められた。

SK-04 (図版53 写真図版74)

SD-02・03を切り、SK-05に切られた土壙で、長辺約7.3m・短辺2.7m以上・深さ約35cmの長方形を呈する土壙である。北辺中央壁際には繩群が認められ、その内部から繩の羽口が出土した。確認された埋土は濃灰褐色シルトを中心とする3層で、北壁際で堆積した最下層には炭化物が含まれていた。166の繩に羽口の他、165の須恵器片が出土している。

SK-05 (図版53 写真図版74)

SD-07・SK-04を切って設けられた南北4.3m・東西4.4m以上の不整形な方形の土壙で、深さは35cmを測る。埋土は上層から粗砂・小砾を含む灰褐色シルト、濃灰褐色シルト、淡黄灰褐色シルトであった。この土壙から南にSD-04が伸びているが、切り合い関係は把握できなかった。

(3) 溝群

8条が検出されており、その走行方向によって3群に分けられる。N15°Wの方向に走行するSD-01～03・06、それに直交方向のSD-07、さらにN5°Eの方向に走行するSD-04・08の3群である。さらにSD-01～03・06は一直線のSD-02と、北端で西方向に曲がるSD-01・03・06があり、この3条の溝はほぼ平行しており、西方向に曲がった後向きを変えて再度南北走行となる。

SD-01

SD-02から分岐するような、幅約15～30cm・深さ約5～9cmの細く浅い溝である。分岐直後はN60°Wの方位で約2m伸び、そこで向きをN15°W方向に変えて約5m連続して調査区外に伸びる。埋土は暗灰褐色シルト層であった。柱穴を切って設けられている。

SD-02

幅約30cm～50cm、深さ約10～15cmの溝で、途中を確認調査によって消失しているが、SK-04以北の調査区を約18mにわたって縱断する。北端はSD-06に切られたような状態で途切れている。溝はほぼ直線であるが、細かく見れば北端から約5m程がN15°Wの方位であり、そこから南はやや北向くなってN8°Wの走行方向となる。埋土はSD-02と同じ暗灰褐色シルト層であった。柱穴との切り合い関係は把握できなかったが、SD-03には切られていた。

SD-03

SK-04以北の調査区を約15mにわたってSD-02と間隔1.6~2.0mで平行して走行し、北端で約90°に西に曲がってSD-02を切る。そこで溝は途切れるが、西端の北側には直交する長さ約2.2mの溝が存在し、この溝に連続する可能性が高い。溝幅は30~80cm・深さ約10cmで、埋土は暗灰褐色シルト一層であった。溝の南半の肩部から東側には通路状遺構の疊敷きがあり、その縁が溝内に落ち込んでいた。溝内からは167の須恵器杯A、168・169の須恵器楕片が出土している。

SD-04

N 5° Eの方位で、SD-08に平行して走行する溝である。幅約1.2m・深さ約7cmの浅い溝で、断面は皿状を呈す。北端はSK-05に接続して終わる。埋土は耕作上に類似した青灰色シルトであった。

SD-06

調査区北端付近で、SD-03に平行するように弧を描いて検出された幅約50~80cm・深さ約7cmの溝である。埋土は耕作上に類似した青灰色シルトであった。内部から172の須恵器鉢片が出土している。

SD-07

SD-02・03と直交するS 75° Wの方位であり、SK-05から西に向けて走行する。幅34~74cm・深さ12~25cmの溝である。SK-05から約4m西の溝の両法面には河原石が2個認められた。溝の埋土は上から繭を含む灰褐色シルト、粗砂を多量に含む灰褐色シルトであった。

SD-08

SD-04とは約3mの間隔を空けて平行する、幅約20~30cm・深さ10cmの溝である。埋土は耕作土に類似した青灰色シルトであった。

(4) 通路状遺構

平行して走行するSD-01・02・03、SD-03・06に挟まれた空間を通路状遺構1・2とした。この他、SD-04・08の間も通路と思われるが、溝の埋土から新しいものと判断でき、ここでは割愛した。

通路状遺構1（写真図版73）

調査区中央から西側へ屈曲する部分まではSD-02・03に挟まれ、幅約1.6~2mを測る。屈曲部では西側の溝がSD-02からSD-01に代わり、SD-01・03間は幅2.6mを測る。そこでさらに屈曲してからは急に幅を1mに減じる。南端はSK-04に取り付く形で終了する。この遺構の上面はすべて黄灰褐色粘質シルトであった。

通路状遺構2（写真図版73）

SD-03・06に挟まれた幅1~3m通路で、北端の屈曲部で幅が広く、SK-04の横で狭くなっている。この遺構の上面はすべて黄灰褐色粘質シルトであり、SK-04の西側から南にかけては通路上に繭が敷かれていた。

3. 遺物（図版54 写真図版75・76）

遺構内や遺構検出面下の包含層から須恵器、土師器・陶器、磁器などが出土した他、遺構内や遺構検出面までの包含層から近世以降の磁器なども多量に出土している。図化に際しては基本的には近世以降の遺物を除去している。したがって遺構内出土として示した遺物があざしもその遺構の年代を具現している訳ではないことを予め断っておく。

土壤内出土遺物 SK-01から丹波焼擂鉢の体部片（173）が、SK-04から須恵器楕と縁羽口が出土している。173の鉢口は縁による一本引であり、色調は浅黄橙色である。内面は磨滅している。165は須恵器楕で、体部は直線的である。口径15cm。166は縁の羽口で、羽口径約7.5cm、孔の径3.1cm。羽口から8.5cm程が遺存している。外面全体はナデ調整で、羽口はガラス化している。

溝内出土遺物 SD-02から須恵器楕の底部片（170）が、SD-03から須恵器杯A（167）と楕（168・169）、SD-04から須恵器楕の底部片（171）が、SD-06須恵器鉢の口縁部片（172）が出土している。杯A（167）の底部は平らで、口縁部は内湾して丸みを帯びる。底部は縁切り後ナデ調整で、内面を仕上げナデする。口径12.7cm・高さ3.0cm。168は須恵器楕の口縁部と底部の破片で、体部は僅かに丸みをもつ。口径15.2cm。169～171は回転糸切りの楕底部である。170は平高台で、169・171は高台はつかない。171の内面は仕上げナデしている。172は須恵器鉢の口縁部片で、端部は僅かに摘み上げられている。

包含層出土遺物 遺構面下の包含層から出土した遺物である。土師器・須恵器・磁器・陶器があり、かなり年代幅がみられる。土師器には174の直口壺と184の鍋がある。須恵器には杯B（175）・楕（176～179）・鉢（181～183）がある。175の高台は外方に踏ん張ったものである。楕176は口縁部が外反する。177～179の楕底部はすべて糸切りである。鉢の口縁部181・182は上下に拡張されている。鉢の底部183は内面に使用による磨滅が認められる。陶器には鉢と丹波焼の擂鉢がある。180は器形・产地とも不明のもので、外面に自然釉が付着しており、焼台とも考えられる。188～190は丹波焼の擂鉢で鉢口はいずれも縁による一本引である。188は口縁部に強いナデが見られ、口縁部は内湾する。190は内面が磨滅している。磁器は3点とも輸入磁器で、器形には楕（185・186）・皿（186）がある。185・187は青磁で、185の外面には積は鈍くなっているが銀蓮弁文が施されている。186は白磁皿の底部である。

4. 小結

遺跡は武庫川東岸の平野部の東端に位置し、谷口に形成された扇状地図の低い段丘に挟まれた谷奥の段丘上に位置する。この付近には圃場整備が実施されるまで、N18°Wの方位をもつ条里型地割りが残っていた。遺跡はその東端付近にあたり、調査区北側の農道は東西の坪境である。しかし今回の調査区にはこうした条里型地割りが及ばない地区で、条里型地割りの南に接した地区である。

今回検出された遺構は溝によって区画された柱穴群と、区画東側の通路や大型の土塙群があり、切り合ひ関係から前者が古く、後者が新しいものである。前者の年代は遺構検出面下の包含層から出土した遺物や遺構内から出土した丹波焼の年代から見て室町時代後半以降であり、後者の以降からは近世陶器が出土しており、江戸時代以降の年代が与えられる。

柱穴群は建物跡として捉えることはできなかったが、溝による区画を作り、南北約26m以上、東西約14m以上の規模である。区画する溝群はほぼ条里型地割りと同方位であり、北に延長すれば条里型地割りの東辺に一致する。また東西方向の溝は調査区北側の東西坪境からの距離がほぼ1.5坪の距離にあたる。このように検出した坪敷地は条里型地割りに規制されたものと言える。

第5章 まとめ

第1節 出土土器について

1. 22号墳・方形周溝墓出土の土器について

福島22号墳、福島平唐山遺跡のSX-01~07の主体部や周溝から出土した土器が該当するが、全体量が17点と少なく、SX-05の土壇から6点が出土している以外、その他の造構からは1~2点が出土しているに過ぎない。また破片での出土がほとんどで、器形全体が確認できるのは僅かに1点である。したがって詳細な年代観などは論じ得ず、比較的器形の判断できるものから、川除遺跡で示された編年概を参考に、出土土器の年代を示すに留めたい。

今回出土した土器の内、壺類およびその底部とみられるものは10点、甕およびその底部と思われるものは2点、高杯1点、甕か壺の底部と思われるがその区別が困難なものが2点、同じく鉢か甕の底部であるがその区別の困難なものが2点ある。

22号墳・SX-07出土の壺（3）や壺の口縁部（1）は川除遺跡壺A5に分類されるものであるが、壺の体部が算盤玉状となる例は川除5期ということであり、この2点はほぼこの時期に相当するものであろう。SX-05の土器群の内、8は二重口縁壺で壺Bに分類されるもので、口縁部の装飾がなくなつており川除6・7期に、9のように底部に突帯を施す壺は川除6期で消滅していることから、この土器群はほぼ川除6期に相当するものであろう。SX-08出土の4は川除遺跡では見られない器形であるが、七日市遺跡において壺D3に分類され、川除7期に相当する七日市遺跡のⅡ期に位置づけられている。SD-08の甕15は川除遺跡では甕Cに分類され、川除5期に位置づけられている。

このように今回出土したこの時期の遺物は川除5期から7期に相当するものと捉えられ、ほぼ弥生時代後期後半、庄内式併行期、布留式古段階に位置づけられるものである。

2. 古墳群に伴う須恵器について

福島1・2・15・23号墳、福島平唐山遺跡からは約85個体の須恵器が出土している。また別個に報告された福島13・14号墳でも78個体の須恵器と土器師3個体が出土している。これらの土器類の内、石室再利用時のものと考えられる土器を除く70個体は、その大半が田辺編年のⅡ期後半からⅢ期にあたるものである。しかしⅠ期末のものも出土していることから、田辺編年のⅠ期・Ⅱ期を福島1期・2期、田辺編年Ⅲ期を福島3・4期とし、各古墳を通じて普遍的みられる杯口を中心に説明する。

福島1期

福島平唐山遺跡のSK-01下方からまとめて出土した土器群が該当し、器種には有蓋高杯・直口壺・広口壺がある。高杯が短脚で三方透かしが施され点や、広口壺の内面の当て道具の痕跡がナデ消されている点でⅠ期と見てよいが、杯部は比較的口径が小さいが、口縁端部の面がくずれていますことから田辺氏のⅠ期TK47型式に相当すると判断される。

福島Ⅱ-1期

田辺氏のⅡ期にあたる段階であるが、Ⅱ期前半の土器は見られず、この段階はTK10型式に相当する。1号墳の第2主体の土器が該当すると見ているが、杯Hの蓋・身1個体ずつの出土であり、詳細は不明である。

福島Ⅱ-2期

1号墳の墳丘上や墳丘裾部から出土した土器類と、別報告の13号墳から出土した土器の一部が該当する。器種としては杯H・無蓋高杯・提瓶・短頸壺・脚付長頸壺・壺の他、装飾脚付壺・特殊壺がみられる。杯Hの蓋は天井部と口縁部の境界は稜をほとんど失い、僅かに屈曲する程度になる。杯Hの身は受部がほぼ水平に横方向に伸びるが、1号墳と13号墳では趣を異にし、1号墳出土の身は口縁部の立ち上がりが内傾し、短くなっているのに対し、13号墳出土の身は底部が平で偏平であり、口縁の立ち上がりは大きく直立する。口径の点でも1号墳の身が口径11.8~12.3cmと小型化しているのに対し、13号墳では口径12.6~14.5cmと大型化を継続したものと小型化したもののが混在している。田辺氏のTK43型式の段階に相当する。

福島Ⅱ-3期

1号墳の第1主体から出土した須恵器と13号墳出土の第1追葬時の須恵器が該当する。器種には杯H・無蓋高杯・ハソウ・提瓶・有蓋短頸壺・壺があり、頂部にツマミの付く蓋も存在するが、有蓋高杯は見られない。杯Hの身は口縁部の立ち上がりは低くなり、受け部が斜め上方に伸びるようになる。特に1号墳から出土したものは受部が矮小となり、口縁下部の器壁が肉厚となって断面三角形となっている。法量は小型化し、蓋は口径13.3~15.3cm、身の口径は12~13.7cmである。大井部や底部の範削りは離になり、中央を削り残したままのものが出現している。田辺氏のTK209型式に相当する。

福島Ⅲ-1期

田辺氏のTK217型式に相当し、杯Hの範削りが省略される段階である。13・14・15・23号墳の土器が該当し、最も多くの土器が見られる時期である。また23号墳の石室出土の土器や23号墳の墳丘外のSK-01出土の土器などの一括性の高い土器群があり、これらを基準に古段階と新段階に二分した。

古段階 杯Hに範削りをしたものと省略されたものが共存する段階であり、23号墳の石室内出土の須恵器を標準とする。23号墳出土の杯Hの身は受部の端を斜め上方に巻き込むよう納める特徴がある。この器形的特徴から13号墳の杯Hを抽出した。その結果、23号墳では蓋1点、身4点が範削りを省略したものが見られ、13号墳では蓋4点、身2点に範削りを省略したものが見られる。杯蓋の口径は23号墳では12.4~12.8cm、13号墳では13.8~14.1cm、杯身の口径は23号墳では11.1~11.3cm、13号墳では12.3~12.8cmである。23号墳の杯Hは法量縮小が顕著で次期の3~2期の口径と大差無く、13号墳の杯Hは前段階よりやや縮小した程度に留まっている。このように口径の点では新旧が混在した状況であり、それがこの段階の特徴でもある。杯H以外の器形では無蓋高杯に浅い皿状の杯部をもつものが出現し、壺類の肩部や頭部に沈線が施される。

新段階 杯Hの範削りが完全に省略された段階で、14号墳出土の杯H、15号墳出土の杯H、23号墳墳丘外のSK-01出土の杯Hが該当する。器形は杯Hのみで、他の器形は欠けている。杯Hの口径は蓋が12.5~13.2cm、身が11.1~12.1cmと小型化が顕著となる。身は口縁の立ち上がりが低くなり、受部は端を巻き込むよう納める。底部や天井部の調整は範切り後に不定方向にナデを施すものが大部分となる。また8点には底部や頂部の周囲に1周程度の範削りや補助削りが施されている。

福島Ⅲ-2期

杯Hは遺存するが、杯Gが出現する。杯Hの身の口径は11cm以下となっている。口径10cm以下の身は見られないが、蓋の口径が10.8cmであることから、そうした身が存在する可能性が高い。本古墳群ではこれ以後の杯Hは見られず、杯Hはこの段階で消滅している。杯Gは口縁の立ち上がりが大きく、底部は丸底状に突出し、範削りを行なっている。杯G蓋は杯Hの身を逆転させたような形態であるが、頂部に範削りを施している点で、杯Hとは区別できる。

福島Ⅲ-3期

杯Hに変わって杯Gが主流となる段階で、15号墳の墓道の土器群が該当する。この土器群は中世以降に墓道部に掻き出されたものであり、新旧のものが混在している可能性があり、特に壺類に問題のある土器群である。器形には杯G・椀・ハソウ・短頸壺・脚付長頸壺・横瓶・甕とともにミニチュワの壺・平瓶などがある。杯Hは見られない。神戸市宅原遺跡では杯Gに口径が10cm以下の杯Hが伴う例が報告されており、この段階まで杯Hが存続している可能性はあるが、食器の主流は杯Gに変化していると考えている。杯Gは底部の中央が丸底状に膨れるものの他に平底となるものが新たに出現する。口縁部は外に開き、杯A状に直線的に伸びるものも現れる。底部の調整は範削りするものが1点のみとなってほとんど見られなくなり、範切りのままか範切り後ナデを施すものが多数となる。杯Hを逆転させたような杯は見られない。杯G蓋は乳頭状のツマミが付き、杯Hを逆転させたような形態にツマミがつくものと、天井部の端が伸びた形態のものがある。内面のカエリは天井端部から下方に下がるかほぼ同じ位置である。椀は杯Gに比べて深い器形であり、底部を範削りしている。

福島Ⅳ期

定形化した杯Bが出現する段階で、2号墳出土の土器が該当する。器種には杯G・杯I・杯B・長頸壺がある。2号墳の石室の遺存状況から見て、当然欠落している器種があると推測される。全体量が少ないため確実ではないが、杯Hを逆転させたような杯Iが多くなり、杯Gは小数になるようである。また杯Gも底部が平になり、口縁部は直線的となって杯Aと呼べるような器形となっている。杯Bは底部を範削りし、底部から口縁部への移行は丸みを持つ。蓋には内面に小さなカエリが付く。

第2節 遺構の変遷

(1) 福島平唐山遺跡の変遷

墳丘墓・方形周溝墓群・土坑墓・石棺墓が検出されたが、墳丘墓・方形周溝墓群と土坑墓・石棺墓は地域的に重なることなく、墳丘墓・方形周溝墓部は尾根鞍部から北側に、土坑墓・石棺墓は尾根鞍部から南側に築造されている。土坑墓・石棺墓については土器類の出土ではなく、切り合い関係もないことから、遺構の築造順位をたどることは困難であり、ここでは割愛する。ただSK-01下方の土器群や尾根鞍部から南側で採集された土器は福島Ⅰ・Ⅱ期に属する須恵器であり、土坑墓・石棺墓はこれらの時期に築造されたものと判断している。

墳丘墓と方形周溝墓については、①SX-01は22号墳の周溝を利用している。②SX-03はSX-01の周溝を利用している、③SX-02はSX-01・03の周溝を切っている、④SX-05はSX-03の周溝と連結している、⑤SX-04は22号墳の平坦面に築造されている、⑥SX-07はSX-02の周溝を切って築造されている、といった関係がみられる。こうした関係から、22号墳→SX-01→SX-03→SX-05・02→SX-07という築造順が読み取れる。

出土遺物が極めて少ないため、遺物の上から築造順を考察するのは不確実さがあるが、上器の底部の形状から言えば、22号墳・SX-03出土の底部はしっかりとした平底であり、SX-05の底部は崩れた平底であり、平底の痕跡をとどめる程度のものも含まれている。SX-06及びSX-02に伴うとみられるSX-02・03間の溝から出土した底部も極めて形態化したものになっている。したがって出土底部の比較からは22号墳・SX-03→SX-05→SX-02・06という築造順が得られる。

先の造構の関係から得られた結果と遺物から得られた結果をあわせれば、22号墳→SX-01→SX-03→SX-05→SX-02・06→SX-07という築造順となる。22号墳を中心にそこから斜面下方側に向けて展開した後、再度鞍部の尾根上から斜面にかけて展開されたことが考えられる。

築造時期についてはSX-03が川除V期であり、最後に塗かれたSX-07は川除6～7期にかけての時期と考えられる。SX-02に伴うとした13のように細かな範囲き状の調整は日下部遺跡で庄内型窯を伴う土器類にみられ、22号墳から始まりSX-07の築造で終了する墳墓群は弥生時代末から庄内・布留式の古段階の間に築造されたものと考えられる。

(2) 古墳群の変遷と築造時期について

有馬富士公園道路改良に伴って調査を実施した6基の古墳は1・2号墳、13・14号墳が2基づつ近接して築かれ、15・23号墳がそれぞれ単独で築かれている。埋葬施設も1号墳は木棺、残る5基が横穴式石室である。出土上器からこれら古墳の築造や古墳への追葬が行われたのは福島II—1期から福島IV期、陶邑編年のTK-43に併行する時期から飛鳥・藤原IV期にかけてであり、以下古墳の築造や追葬の変遷を時期ごとに記すと以下の通りである。

福島II—1期 1号墳が築造される時期であり、1号墳の第2主体が埋葬。

福島II—2期 13号墳が築造され、1号墳の墳丘上に土器を置いた祭祀。

福島II—3期 1号墳に第1主体が埋葬され、13号墳に追葬。

福島III—1期 23号墳が築造され、13号墳に第2回目の追葬。

福島III—2期 14・15号墳が築造。

福島III—3期 14号墳に追葬。

福島III—4期 15号墳に追葬

福島IV期 2号墳が築造

以上のようにになり、近接して塗かれた13・14号墳は13号墳の築造・追葬、14号墳の築造・追葬とII—2期からIII—3期まで連続しており、この2基の古墳は有機的な関連の中で築かれたものと想定される。それに対し、1・2号墳はII—3期で1号墳への埋葬は終了し、2号墳が築かれるのはIV期である。2号墳が破壊を受けていることから断定はできないものの、2号墳の石室構造からみても、2基の間に時間差が認められ、13・14号墳とは異なったあり方を示している。

埋葬施設の点では、1号墳の第2主体の木棺は横穴式石室より先行するが、1号墳の第1主体の木棺は13号墳の遺俗より後出している。このように1号墳は古墳群中の他古墳が横穴式石室の導入に踏み切っても木棺直葬という伝統的な埋葬方法を探っている。武庫川を挟んで対岸に位置する丘陵上では西山古墳群や奈良山古墳群のようにII—3期あるいはIII—1期まで木棺直葬を採用する古墳群が知られており、かたくなまでに伝統的埋葬方法をとる集団が存在している。1号墳もそうした集団の影響下で築造された古墳であると捉えられるものであろう。また奈良山古墳群ではIII—4期ないしIV期に木棺直葬から横口式石棺に変化しており、2号墳の築造もこうした動きと一連するものとも理解できる。

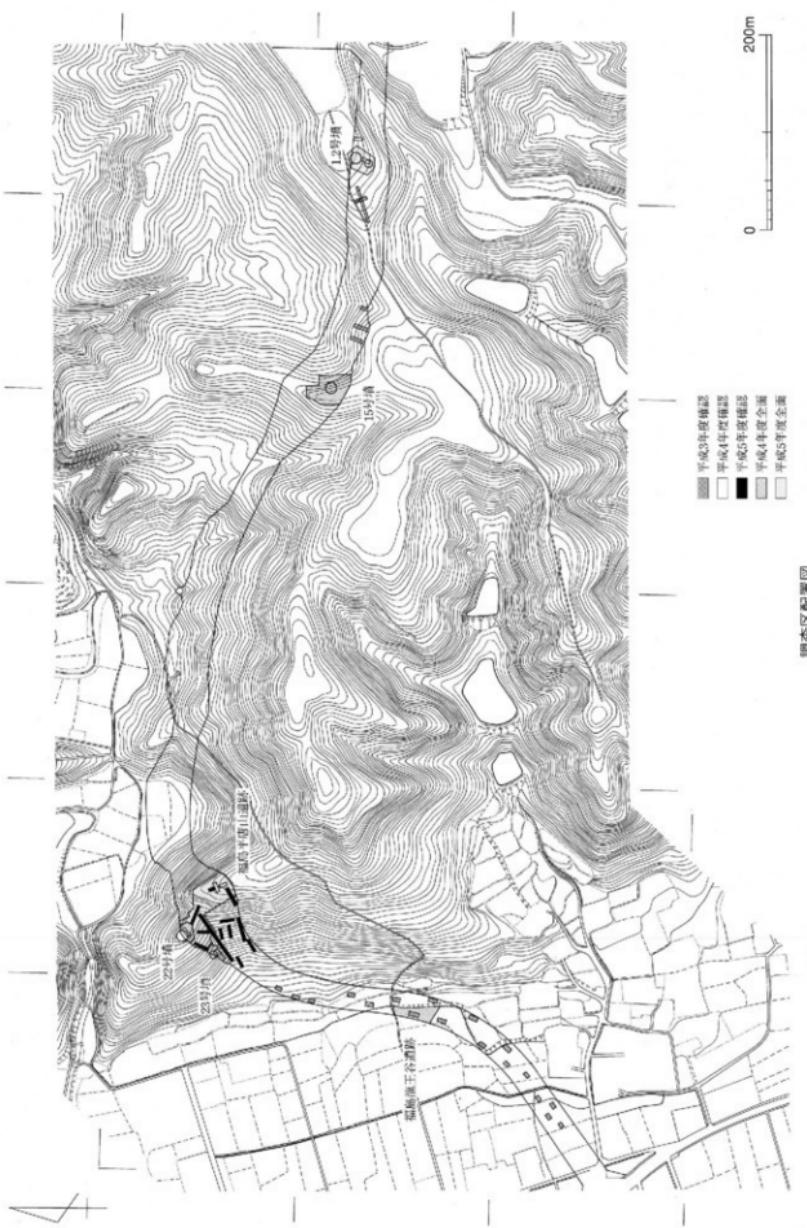
表 土器変遷表

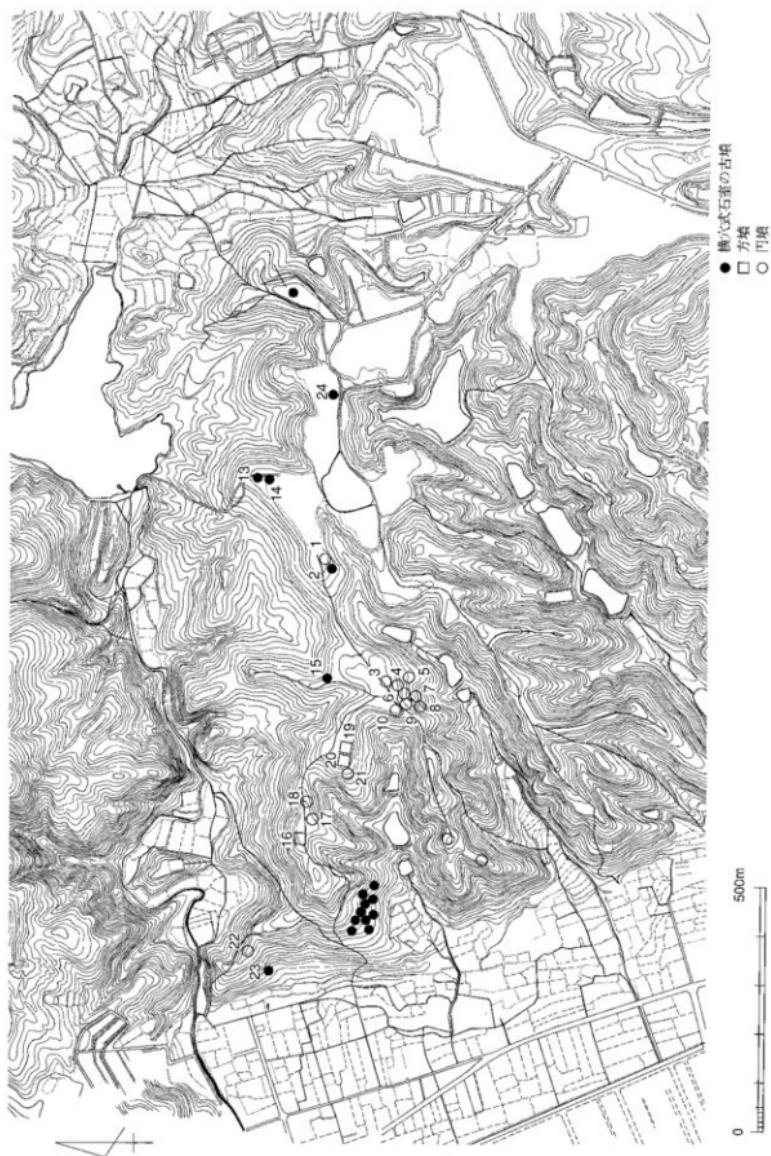
		平唐山SK-01 下方			
I		1号墳第2 主体		13号墳-1	13号墳-2
II	1	1号墳第2 主体		13号墳-1	13号墳-2
II	2	1号墳第2 主体		13号墳-1	13号墳-2
II	3	1号墳第1 主体		14号墳-1	14号墳-2
III	1	23号墳		15号墳-1	15号墳-2
III	2			15号墳-1	15号墳-2
III	3			15号墳-1	15号墳-2
III	4			15号墳-1	15号墳-2
IV		2号墳		15号墳-1	15号墳-2

表4 福島古墳群一覧表

古墳名	所在地	立 地	墳 形	墳丘規模 (単位m)	埋葬施設	副 品	備 考
1号墳	福島字鳥尾	主尼根上斜面	円形	径9.0 高さ1.0	木棺直葬	装飾金銀鏡 銅六式石室?	平成5年度調査
2号墳	福島字鳥尾	主尼根上斜面	円形	径6.5 高さ0.8			平成5年度調査
3号墳	福島字米谷	主尼根頂部	円形	径8.0 高さ1.3	木棺直葬		
4号墳	福島字米谷	枝毛刺上	円形	径10.0 高さ1.0	木棺直葬		
5号墳	福島字米谷	枝毛根上	円形	径5.5 高さ0.5	木棺直葬		
6号墳	福島字米谷	枝毛根上	円形	径9.0 高さ0.3			
7号墳	福島字米谷	枝毛根上	円形	— 径7.0 高さ0.5			
8号墳	福島字米谷	枝毛根上	円形	径5.5 高さ0.3			
9号墳	福島字米谷	枝毛根上	円形				
10号墳	福島字上鶴王谷	支尼根頂部	円形	径16.0 高さ1.5	木棺直葬		
11号墳	福島字赤鷲山	支尼根頂部	円形	径7.5 高さ0.5			
12号墳	福島字赤鷲山	支尼根頂部	円形	径10.0 高さ0.5			
13号墳	福島字切池	支尼根上斜面	円形	径11.0 高さ1.8	横六式石室	須恵器 銀器	平成9年度調査
14号墳	福島字切池	支尼根上斜面	円形	径10.0 高さ0.5	横六式石室	須恵器 銀器	平成9年度調査
15号墳	福島字切池	支尼根上斜面	円形	— 径14.0 高さ1.2	横六式石室	須恵器 銀器	平成4年度調査
16号墳	福島字山野神	主尼根頂部	円形	— 径12.5 高さ1.0	横六式石室	須恵器 銀器	平成4年度調査
17号墳	福島字上鶴王谷	主尼根上斜面	円形	径7.0 高さ0.8			
18号墳	福島字上鶴王谷	主尼根上斜面	長方形	— 径22.0 高さ3.5			
19号墳	福島字上鶴王谷	主尼根上斜面	長方形	— 径19.0 高さ2.5			
20号墳	福島字上鶴王谷	主尼根上斜面	円形	径14.0 高さ1.5	木棺直葬		
21号墳	福島字上鶴王谷	支尼根頂部	円形	径12.0 高さ0.5	木棺直葬		
22号墳	福島字平塙山	支尼根上斜面	円形	— 径10.0 高さ不明	横六式石室	須恵器 銀器	四隅に銀鏡 平成4年度調査
23号墳	福島字平塙山	支尼根斜面	円形	径13.0 高さ不明	横六式石室	須恵器 銀器	三日市教委調査
24号墳	福島字	主尼根頂部	前方後円形	長26.7 高2.7	横六式石室 2基	装飾漆油漆器 銀器	三日市教委調査
	上野ヶ原古墳	福島字					

実測図版





福島古墳群分布図

福島平唐山遺跡



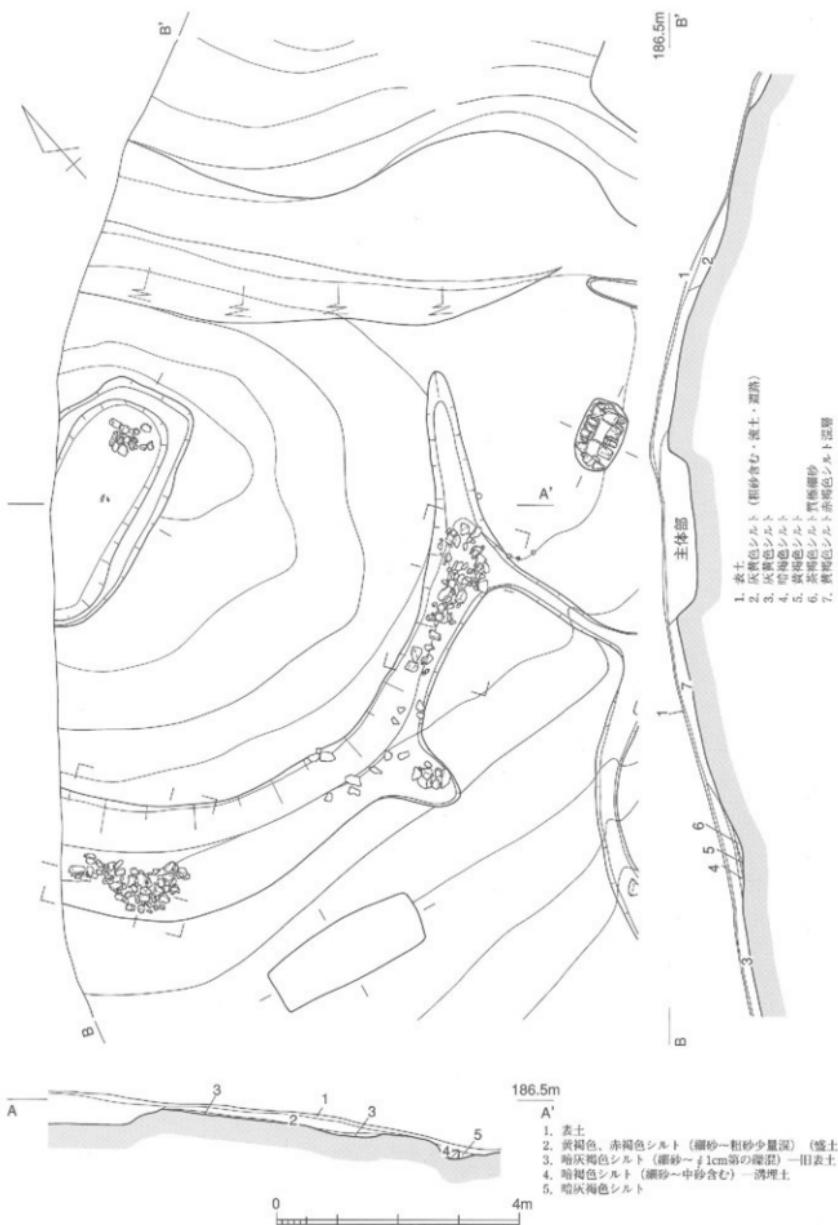
全体図

福島平唐山遺跡



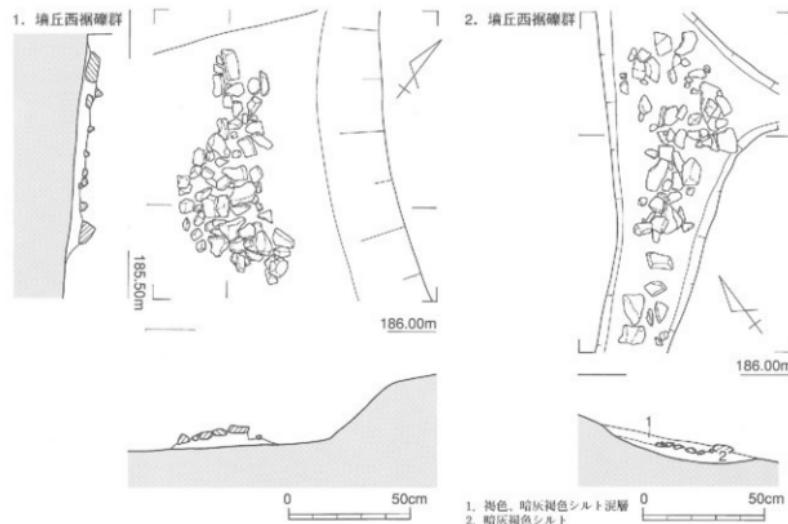
福島22号墳と方形周溝墓配置図

福島平唐山遺跡

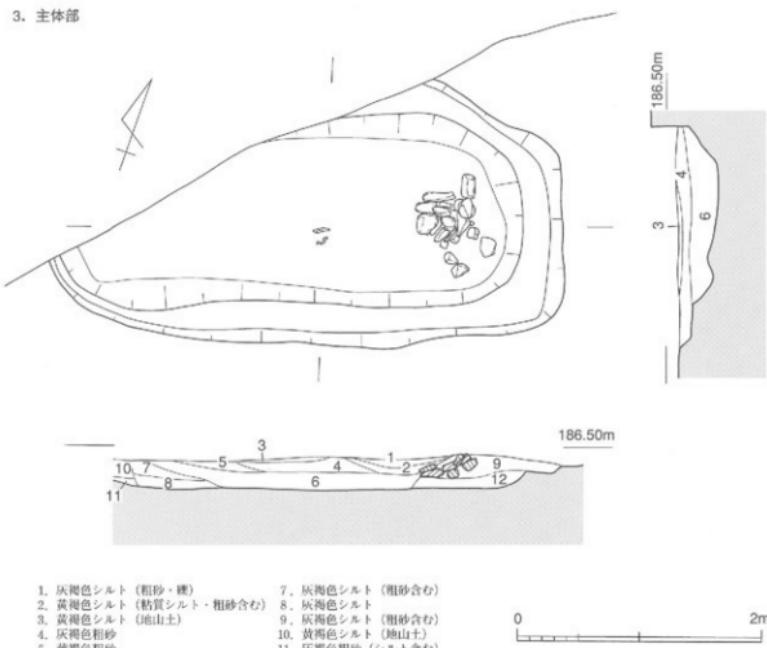


図版 6

福島22号墳



3. 主体部

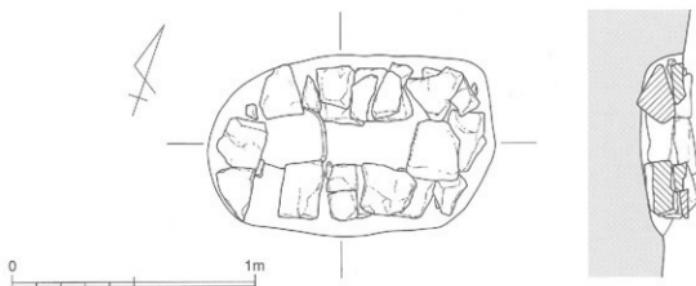


1. 填丘西裾礫群 2. 填丘西裾礫群 3. 主体部

福島平唐山遺跡

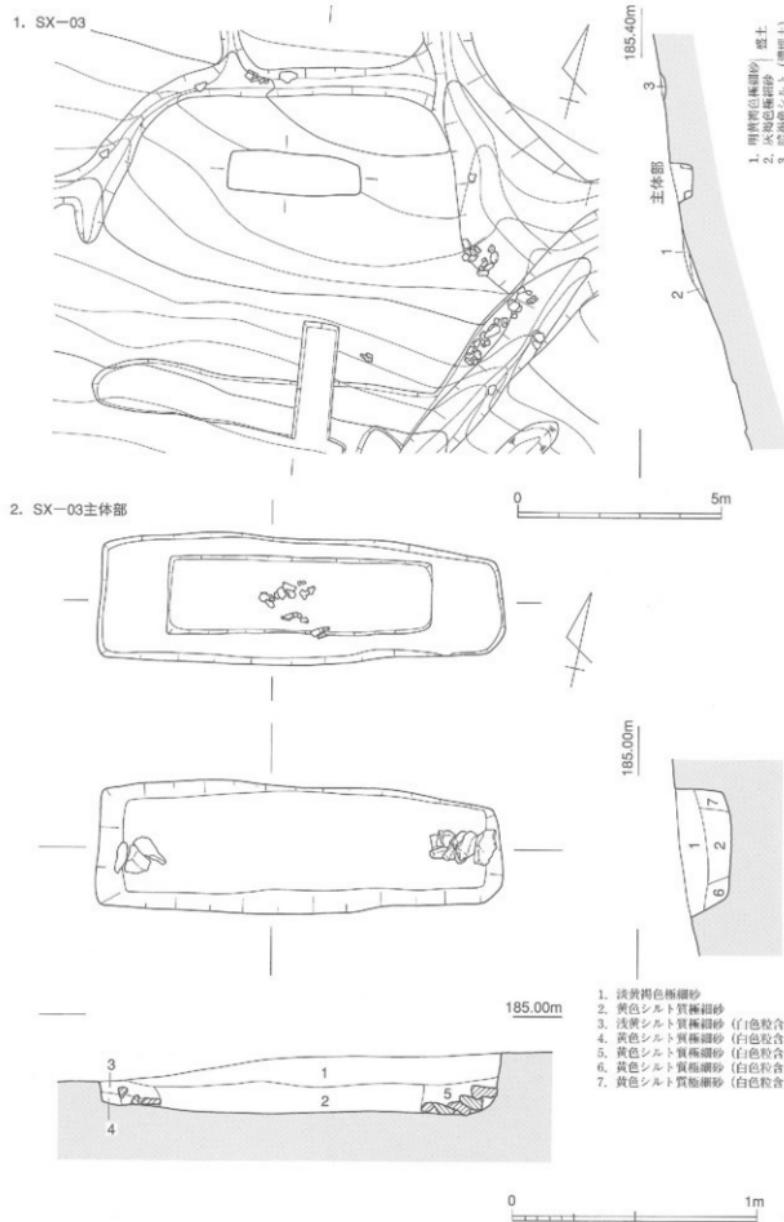


2. SX-01主体部

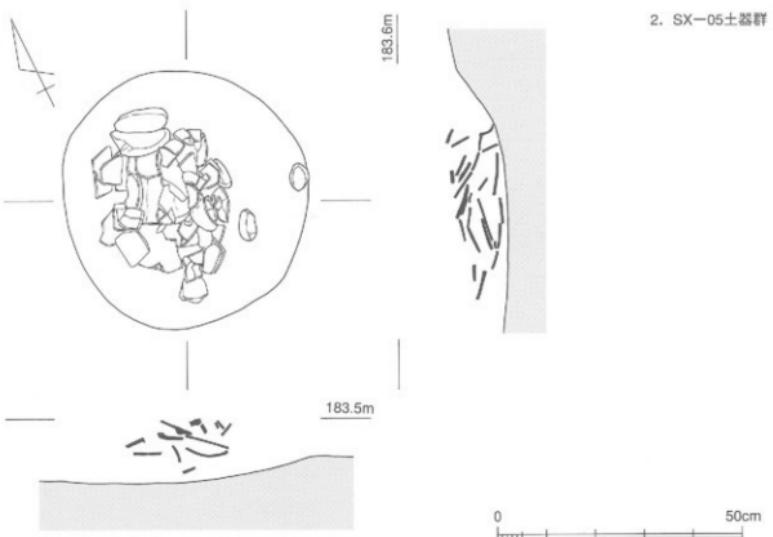
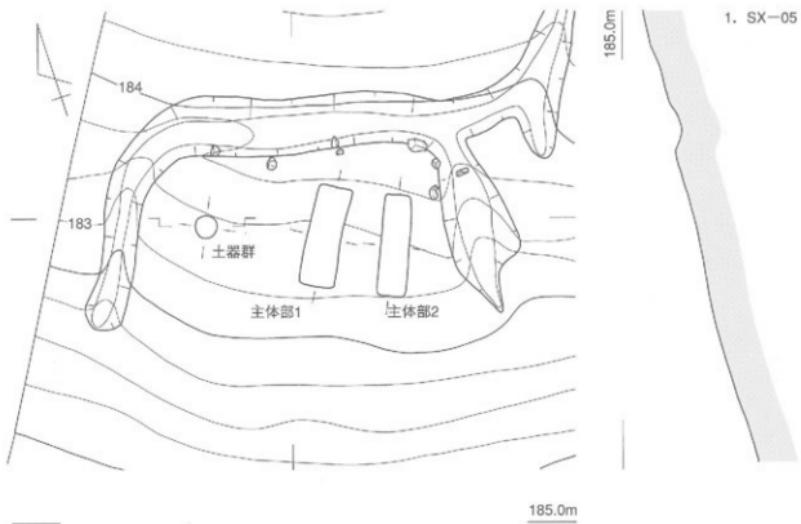


1. SX-01・02 2. SX-01主体部

福島平唐山遺跡



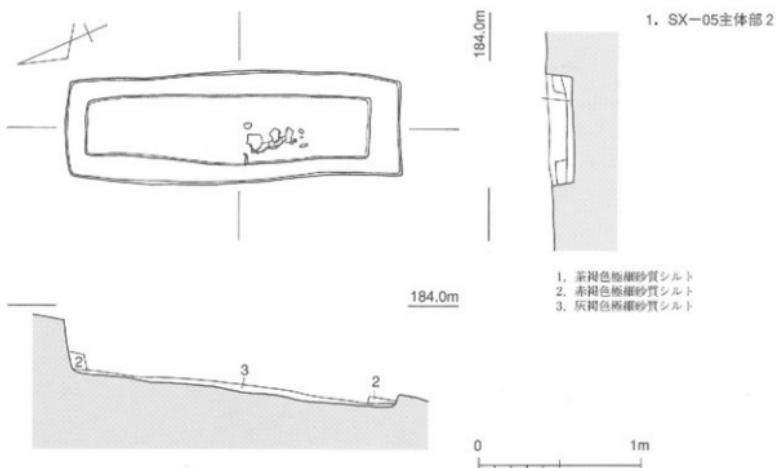
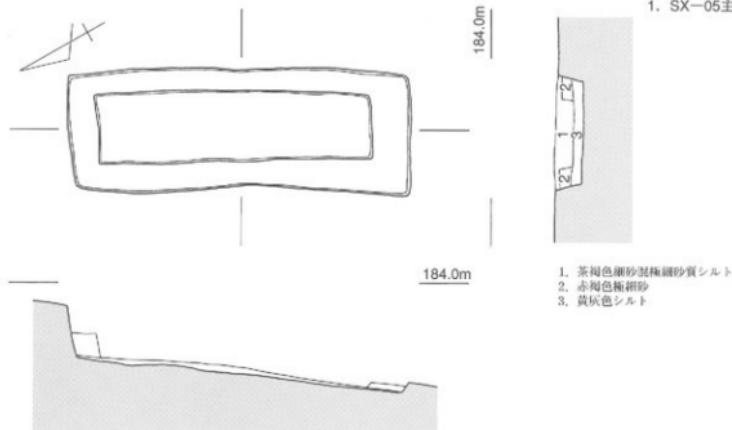
福島平唐山遺跡



1. SX-05 2. SX-05土器群

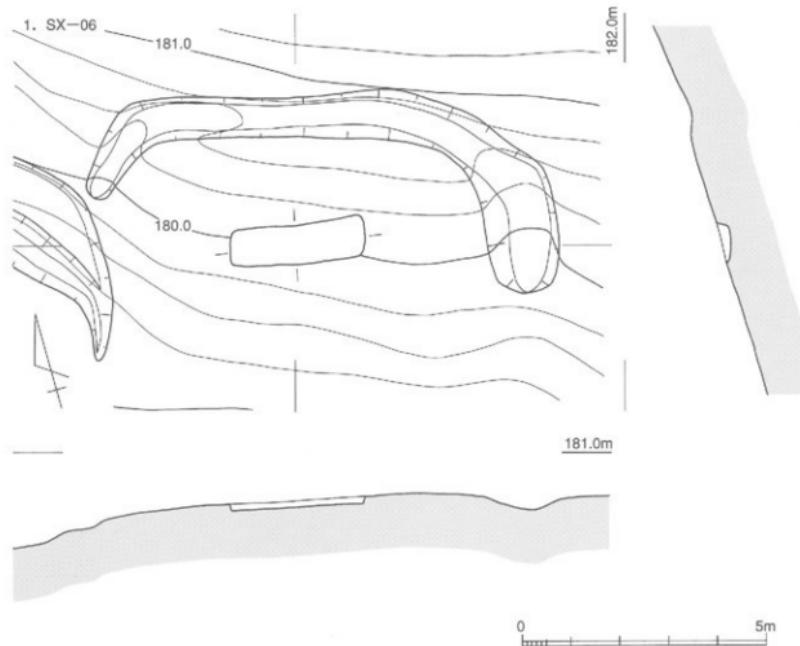
福島平唐山遺跡

1. SX-05主体部 1

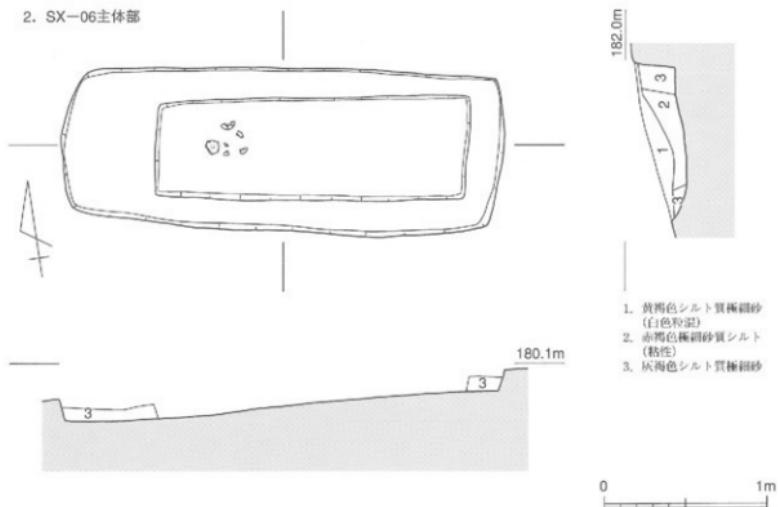


1. SX-05主体部 1 2. SX-05主体部 2

福島平唐山遺跡

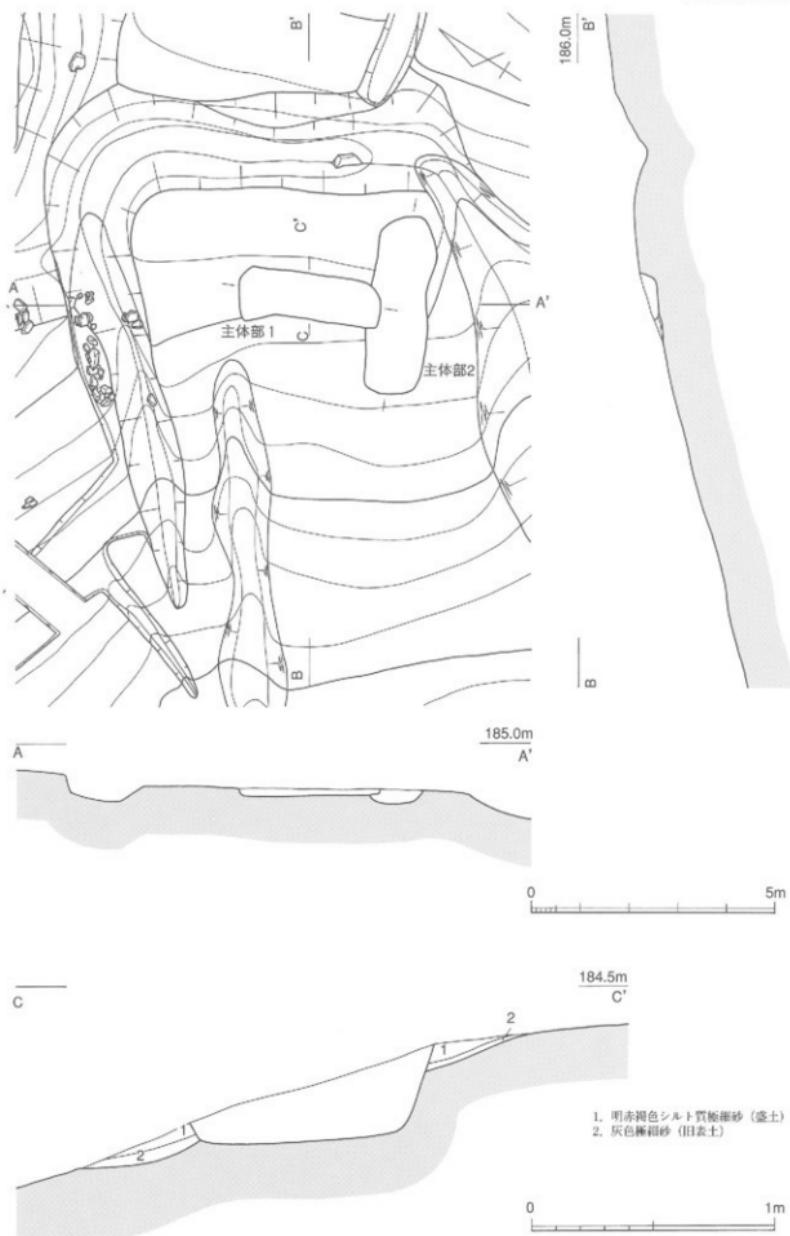


2. SX-06主体部

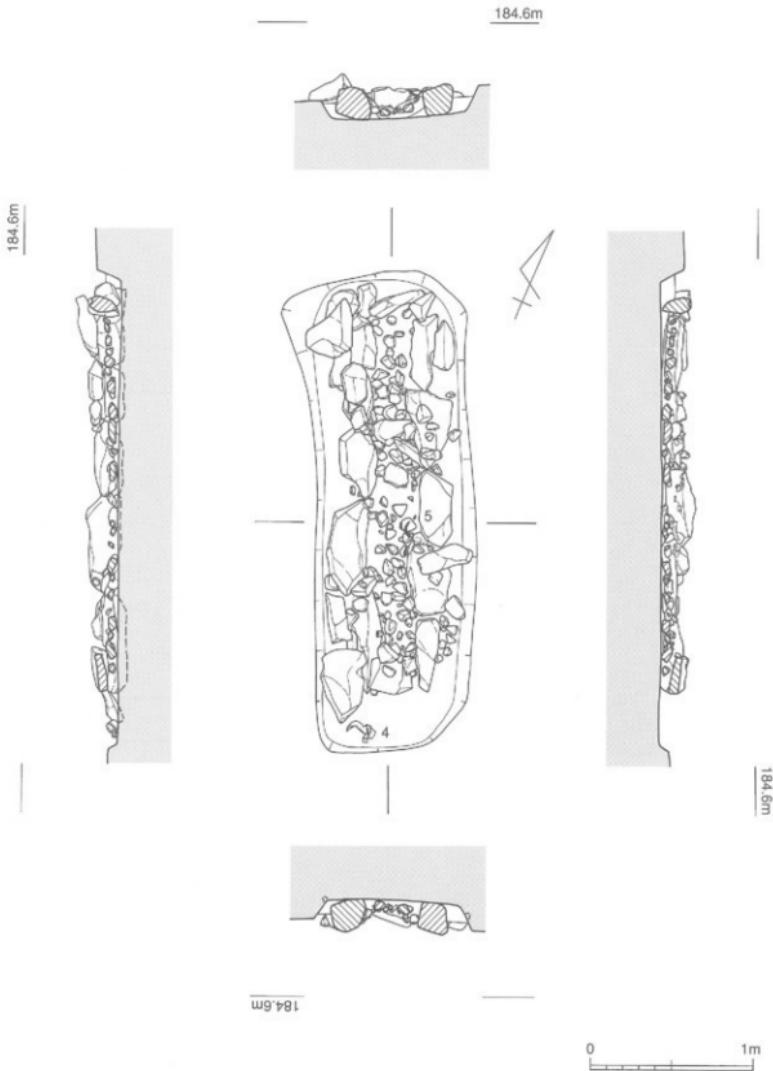


1. SX-06 2. SX-06主体部

福島平唐山遺跡

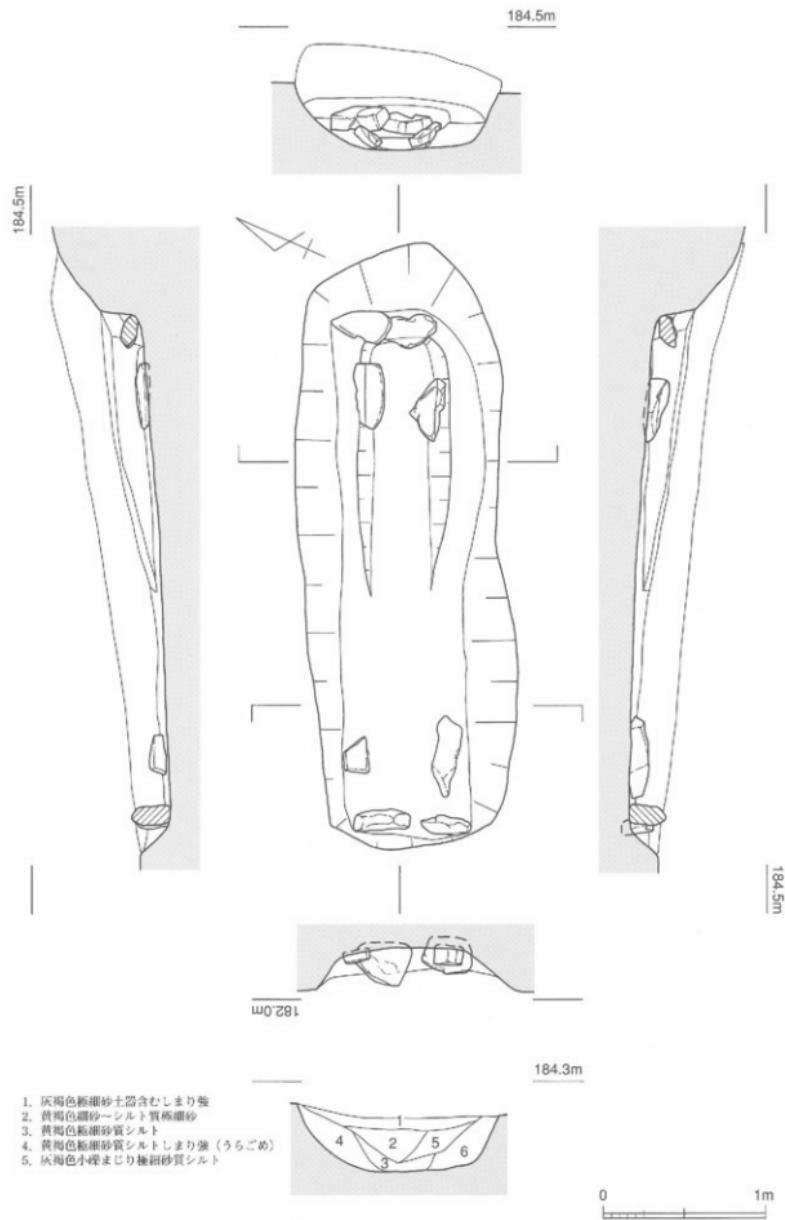


福島平唐山遺跡

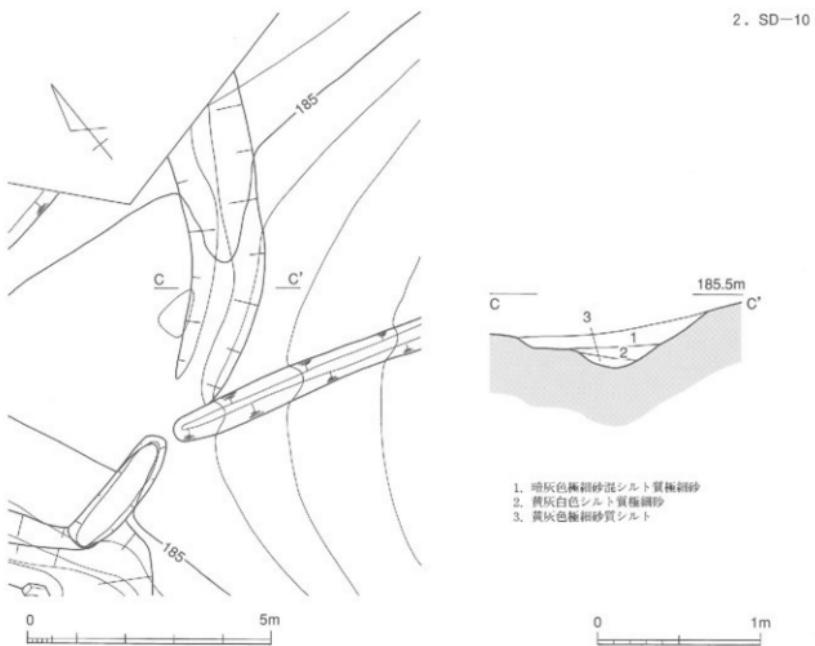
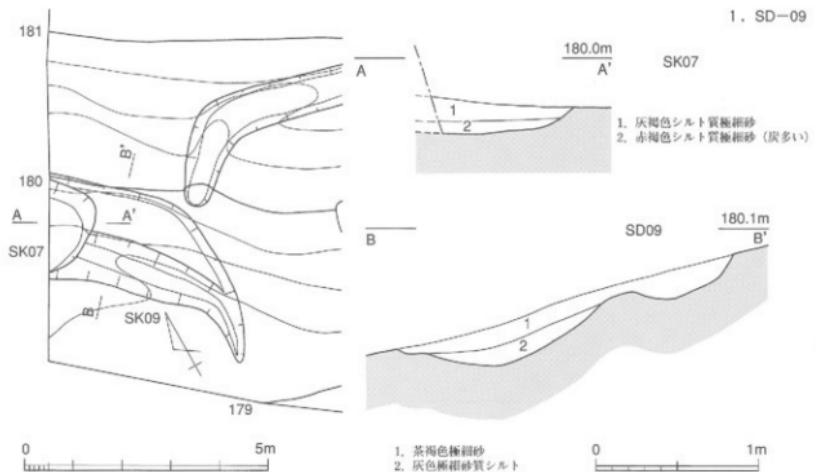


SX-07主体部 1

福島平唐山遺跡

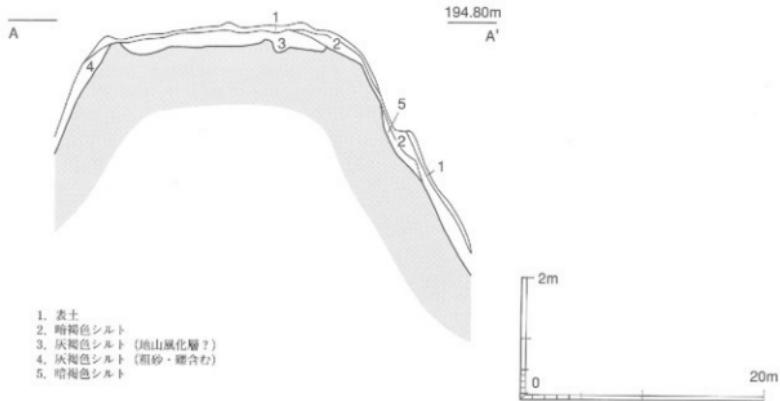
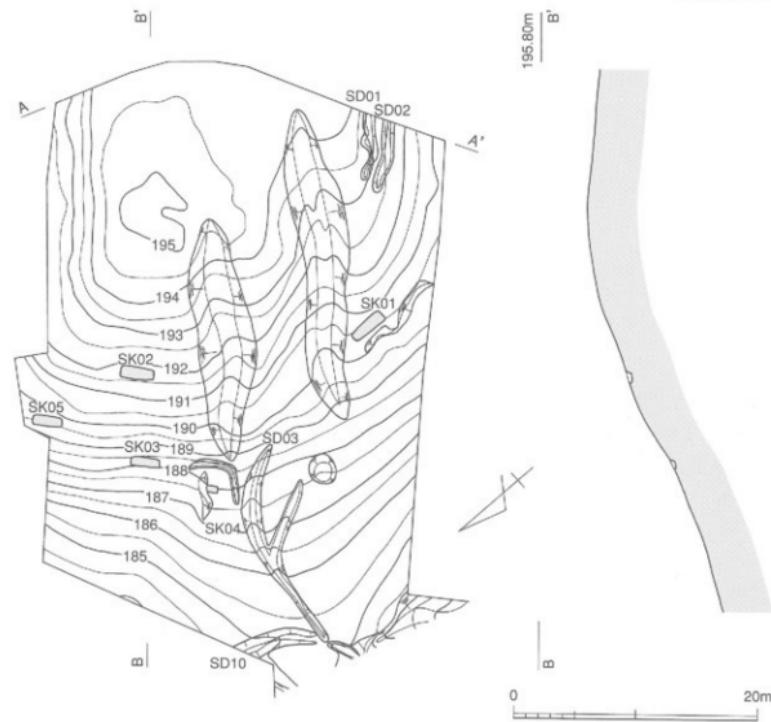


福島平唐山遺跡



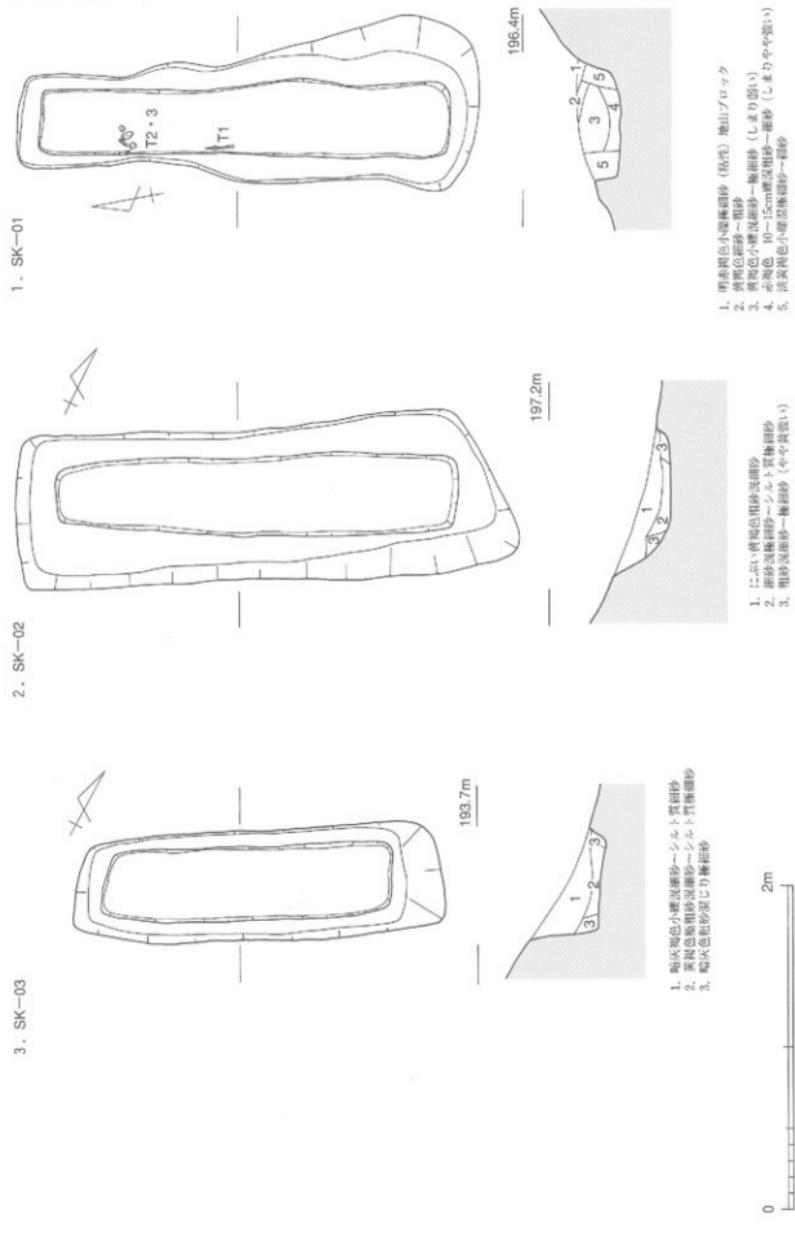
1. SD-09 2. SD-10

福島平唐山遺跡

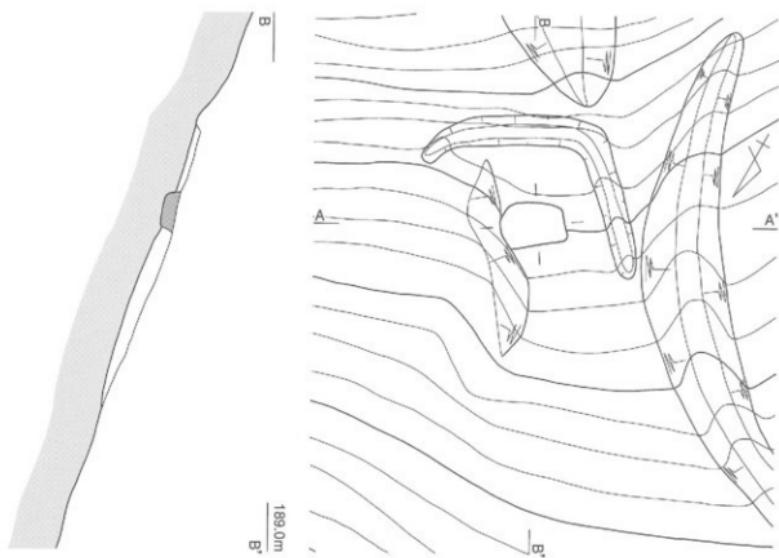


1. 表土
2. 暗褐色シルト
3. 灰褐色シルト（地山風化層？）
4. 灰褐色シルト（粗砂・礫含む）
5. 暗褐色シルト

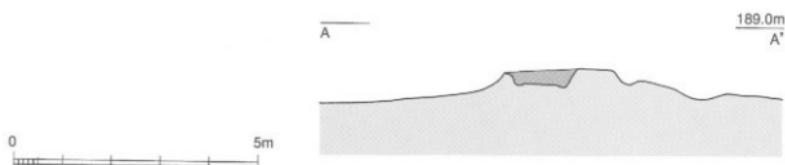
福島平唐山遺跡



福島平唐山遺跡

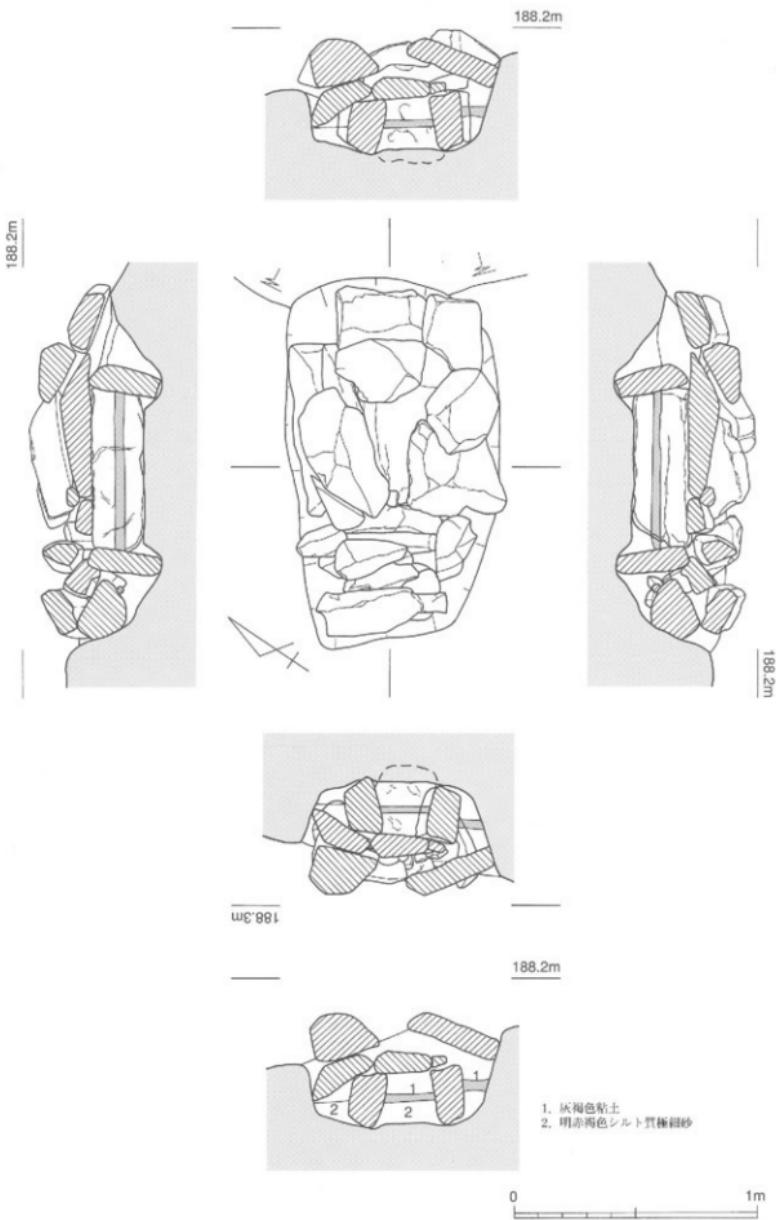


1. 黄灰色小粒泥岩～板岩



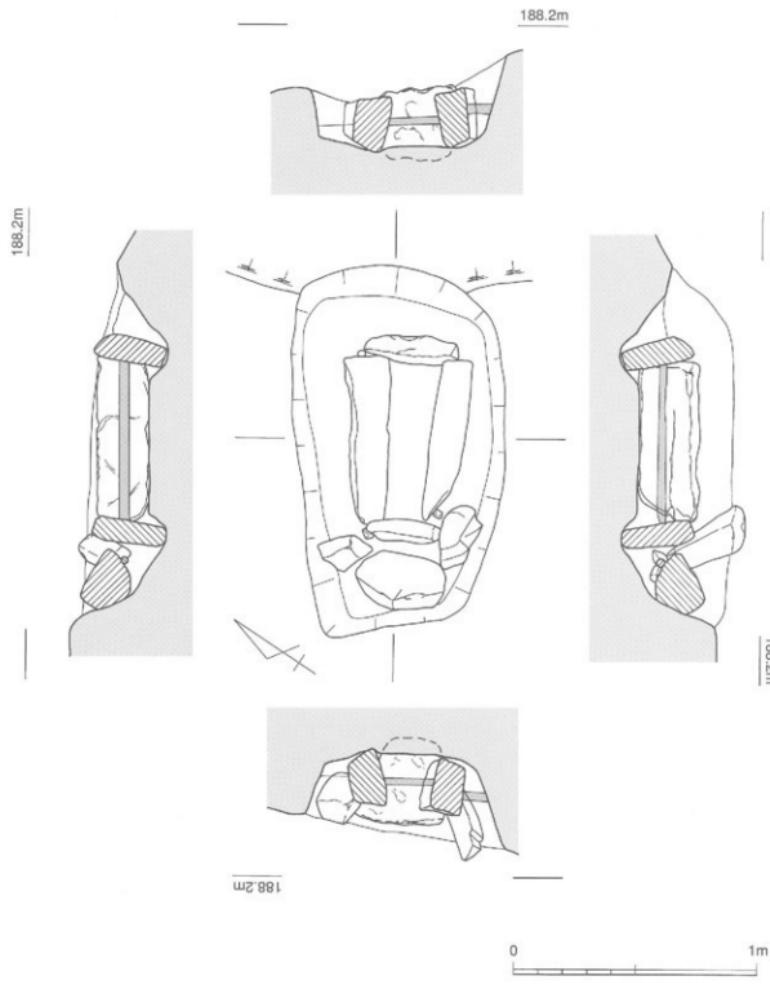
SK-04

福島平唐山遺跡



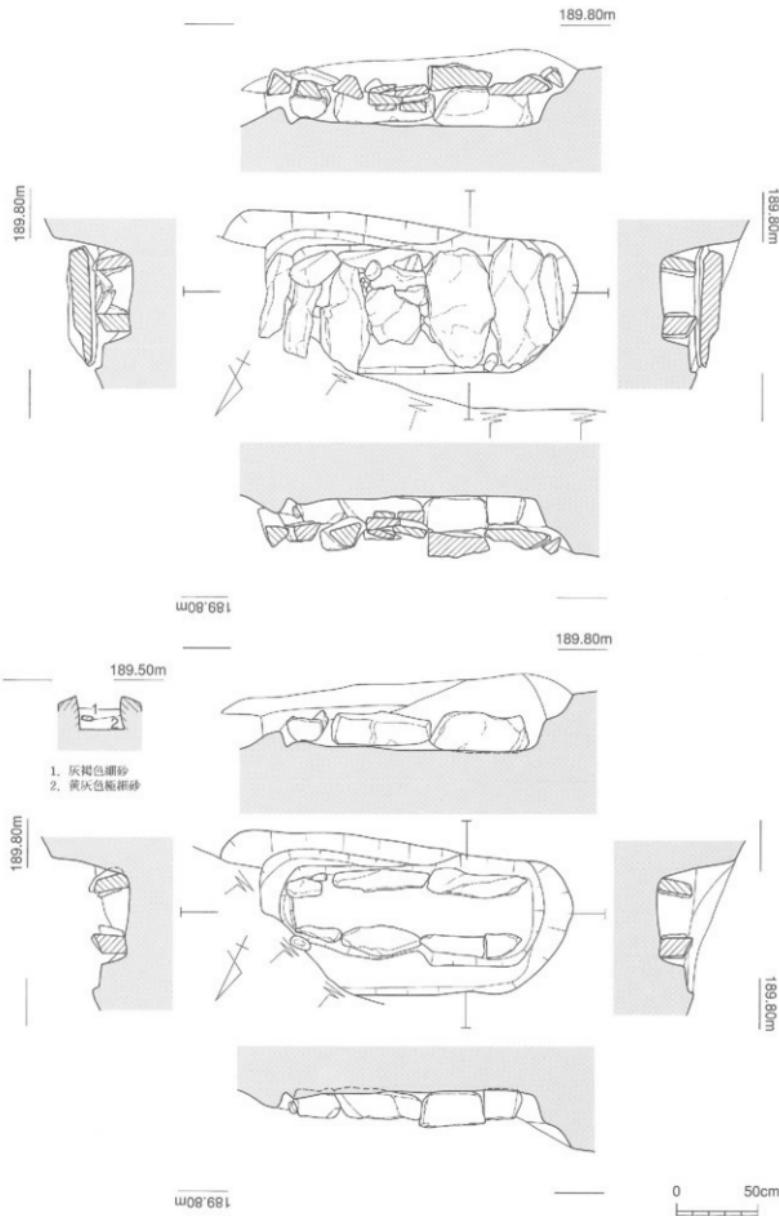
SK-04蓋石懸架状況

福島平唐山遺跡



SK-04主体部

福島平唐山遺跡



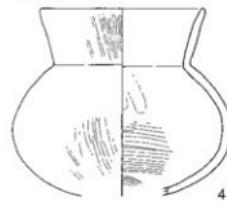
22号墳



SX-03



SX-07



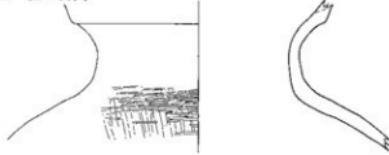
SX-06



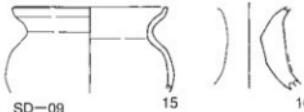
SX-05



SX-02・03間



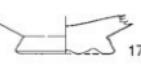
SD-08



SD-09



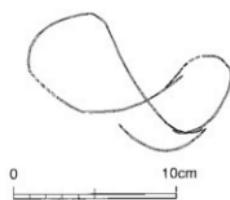
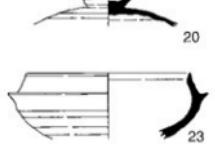
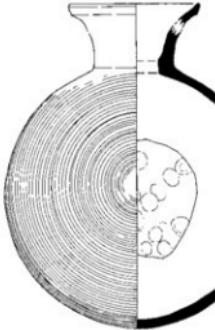
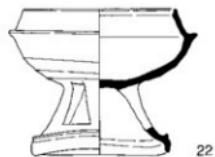
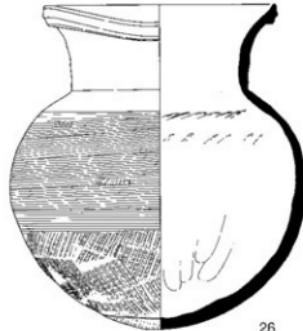
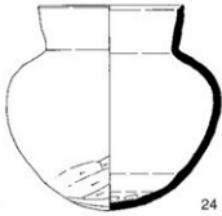
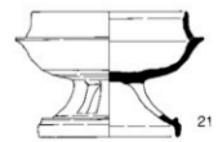
13



0

10cm

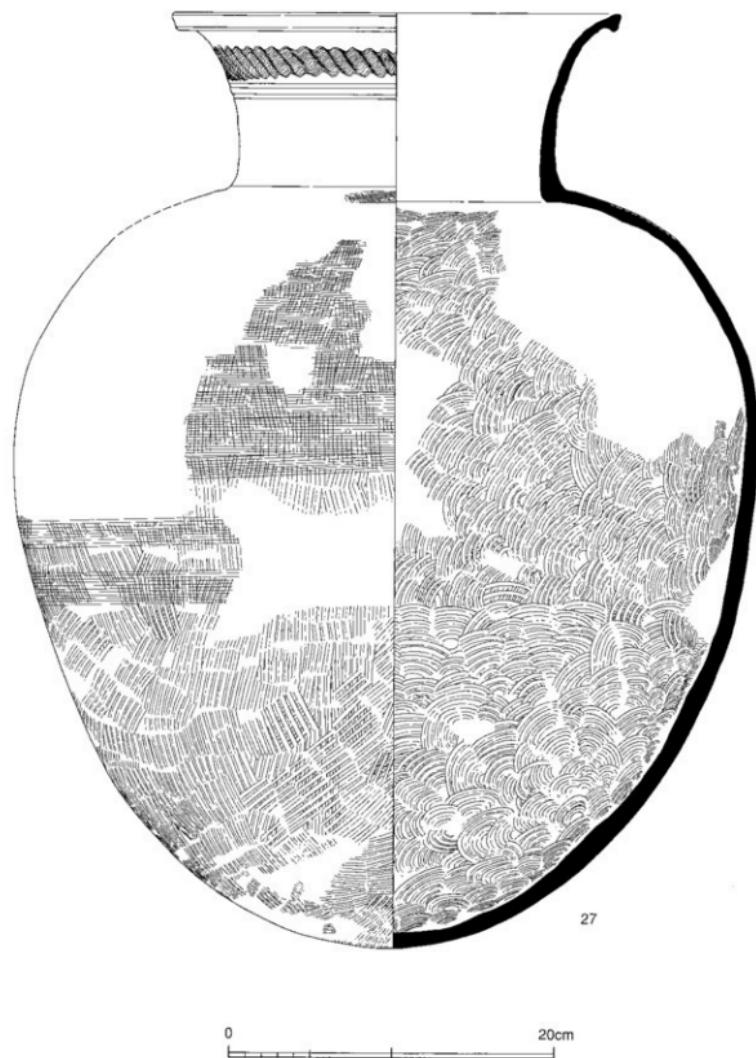
福島平廣山遺跡



SK-01

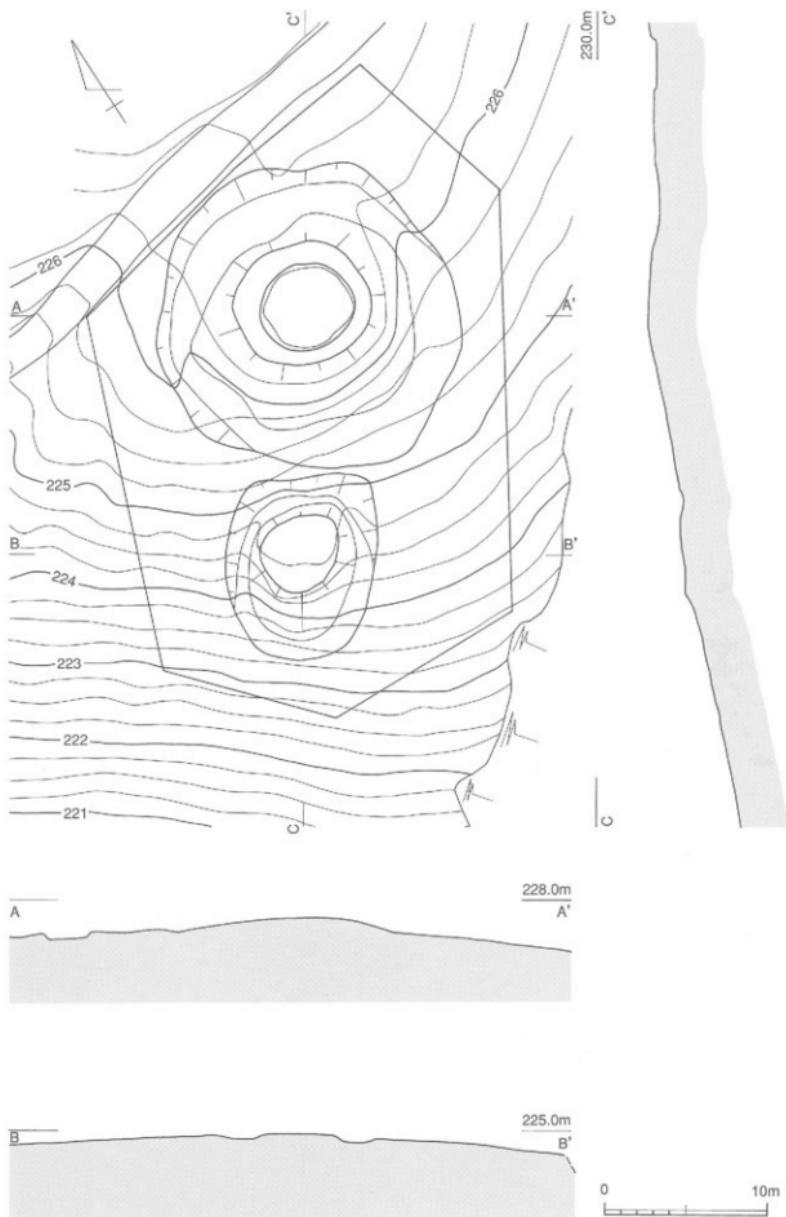


出土遺物 2 SK-01下方土器群、SK-01



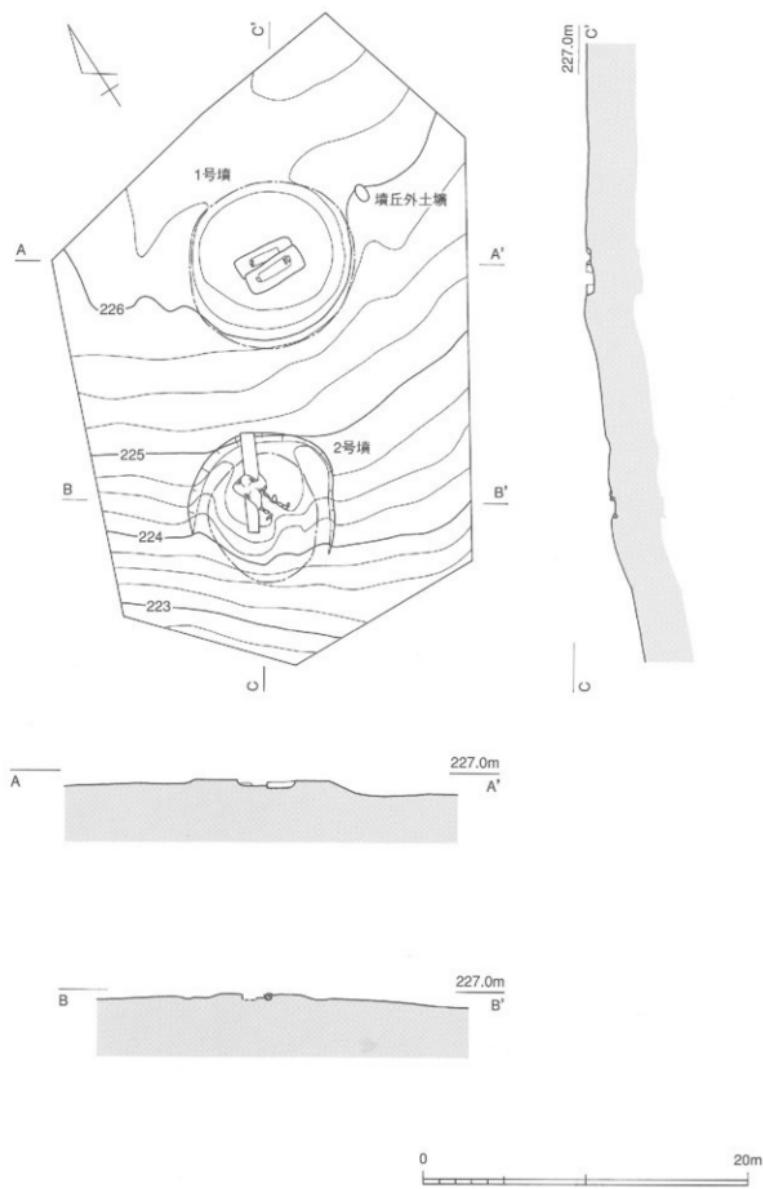
出土遺物 3 尾根上表面採集土器

福島1・2号堆



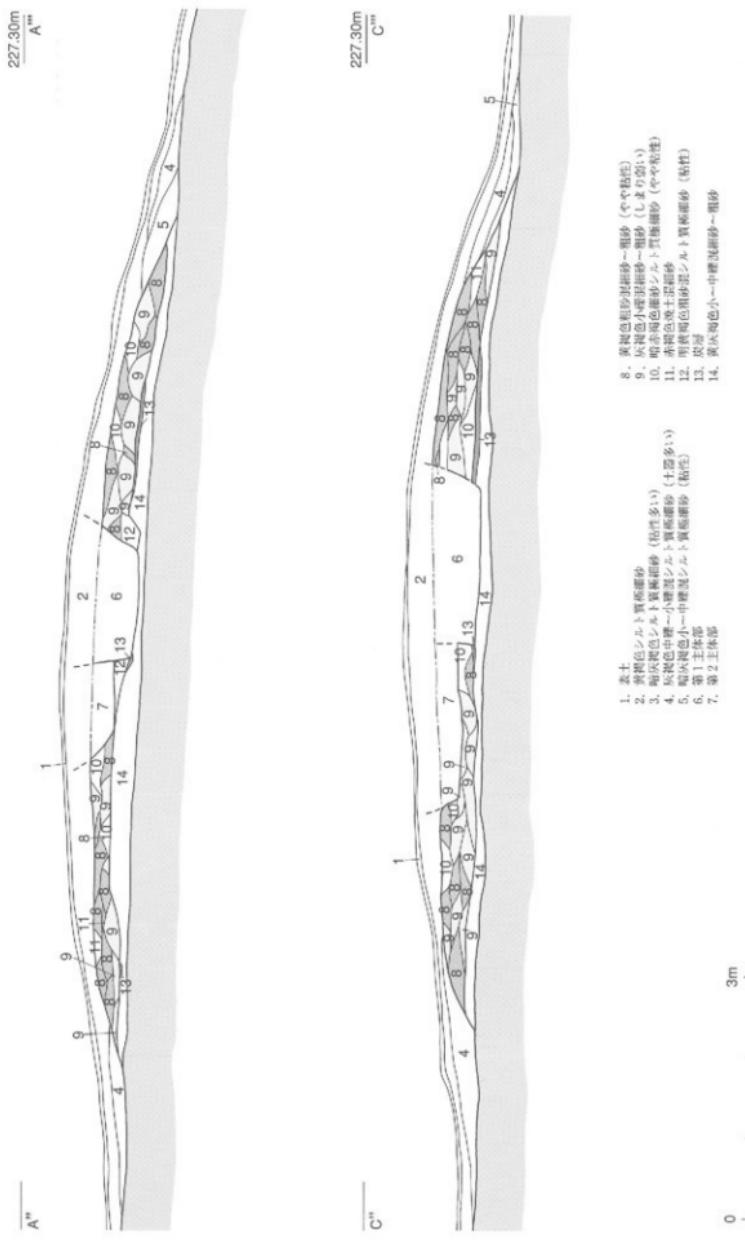
調査前の墳丘測量図

福島1・2号墳



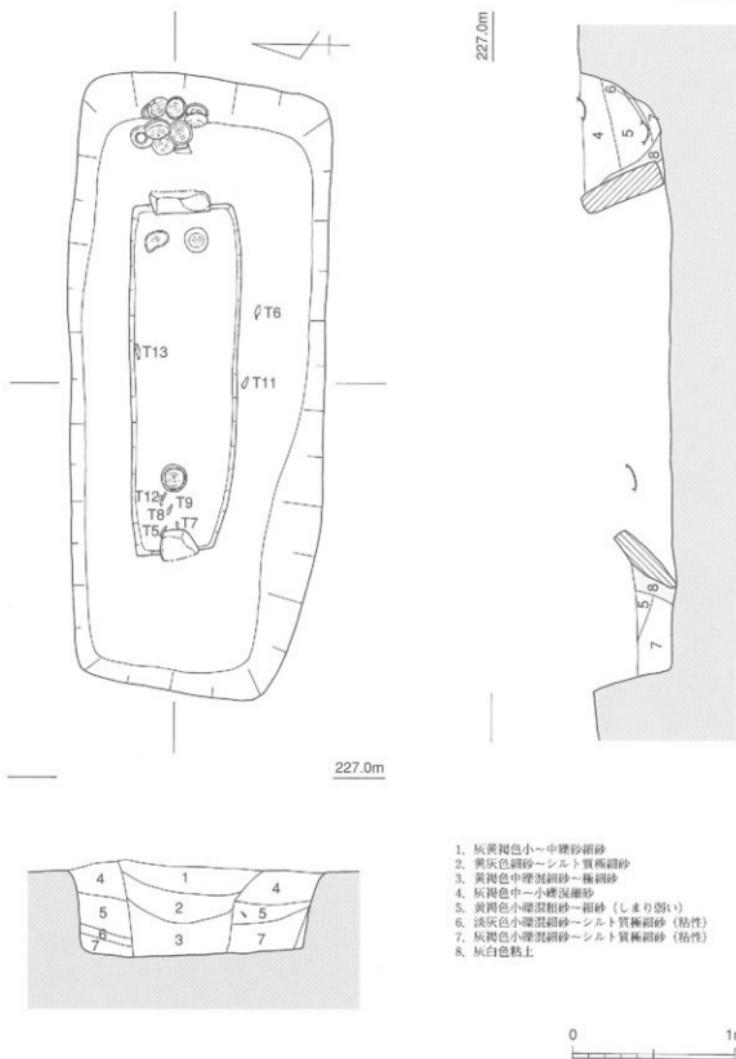
墳丘測量図

福島 1号墳



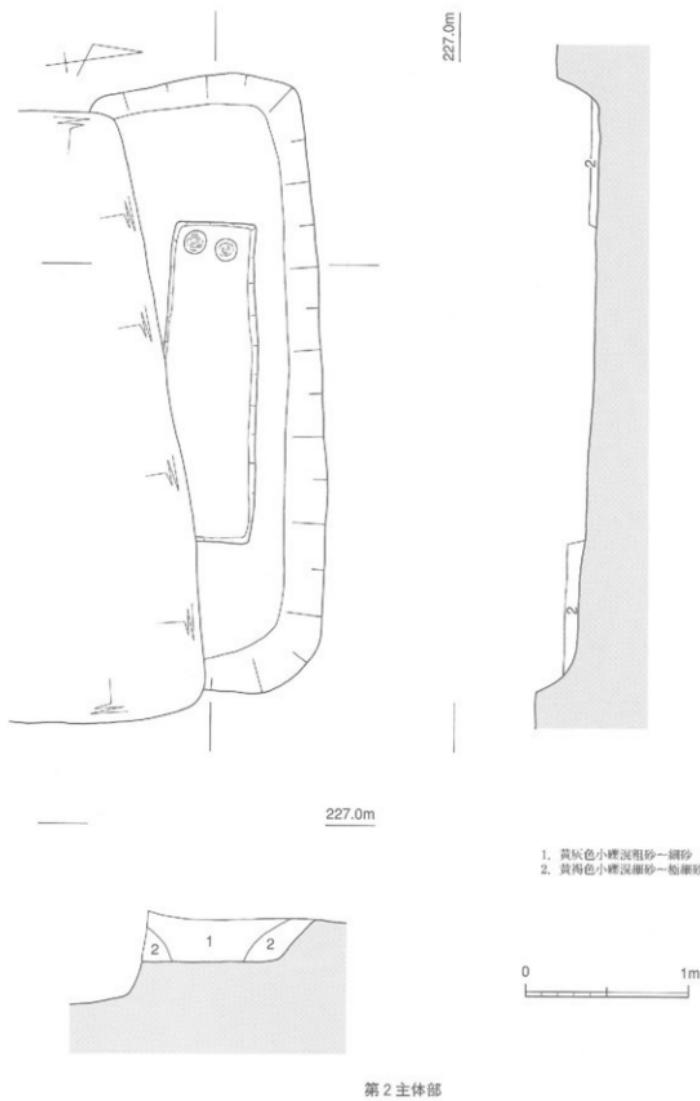
墳丘断面

福島 1号機



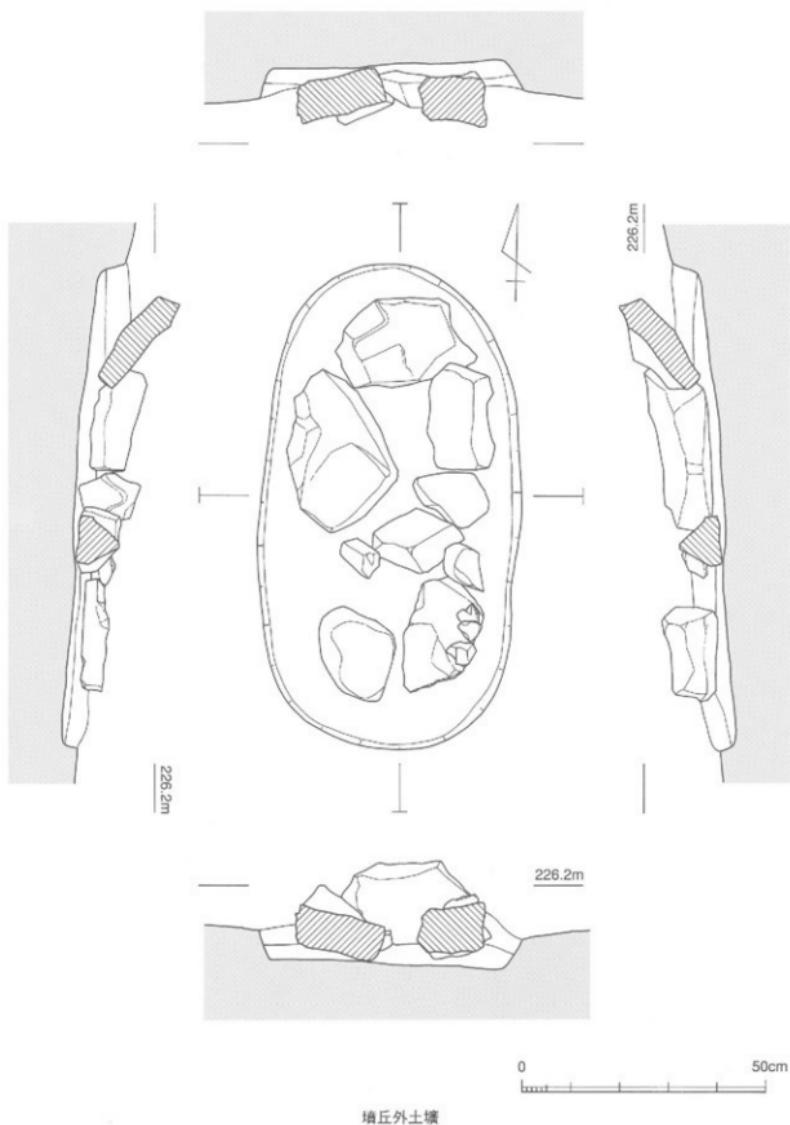
第1主体部

福島 1号墳

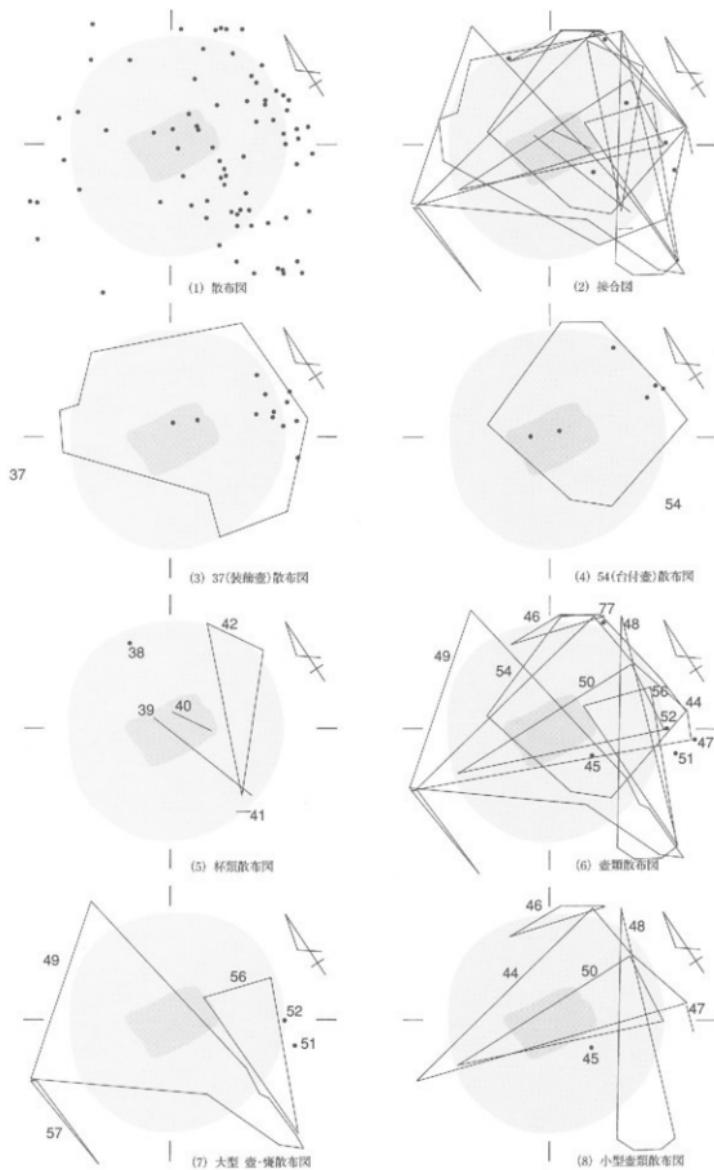


第2主体部

福島 1号墳

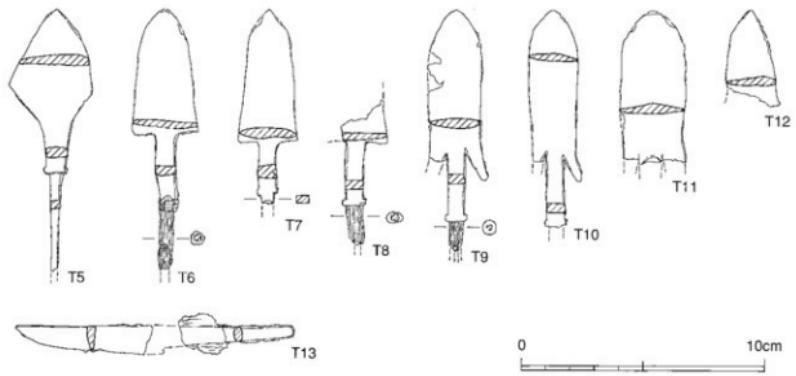
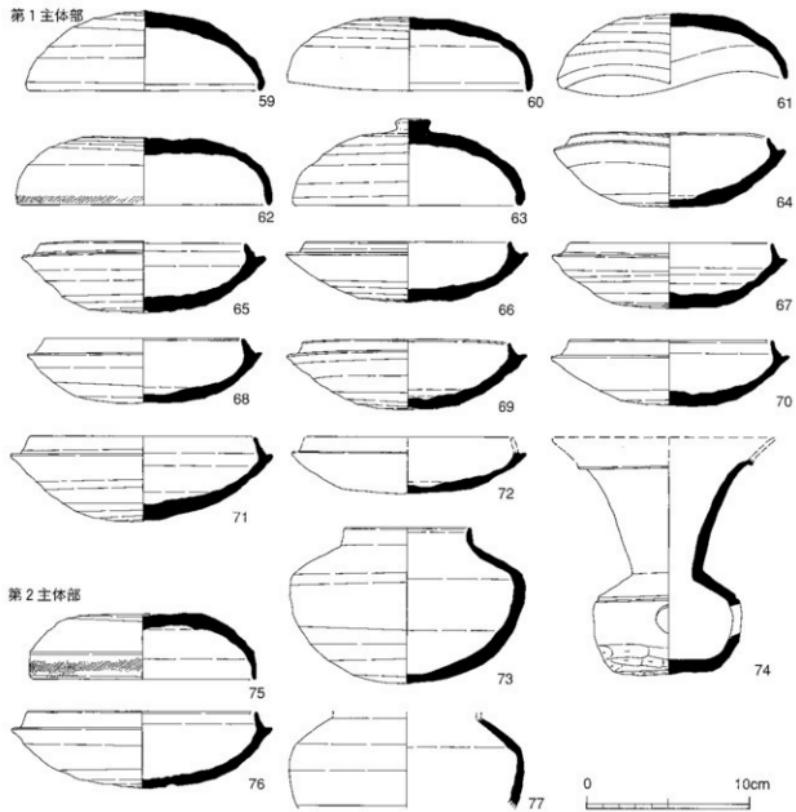


福島 1号墳

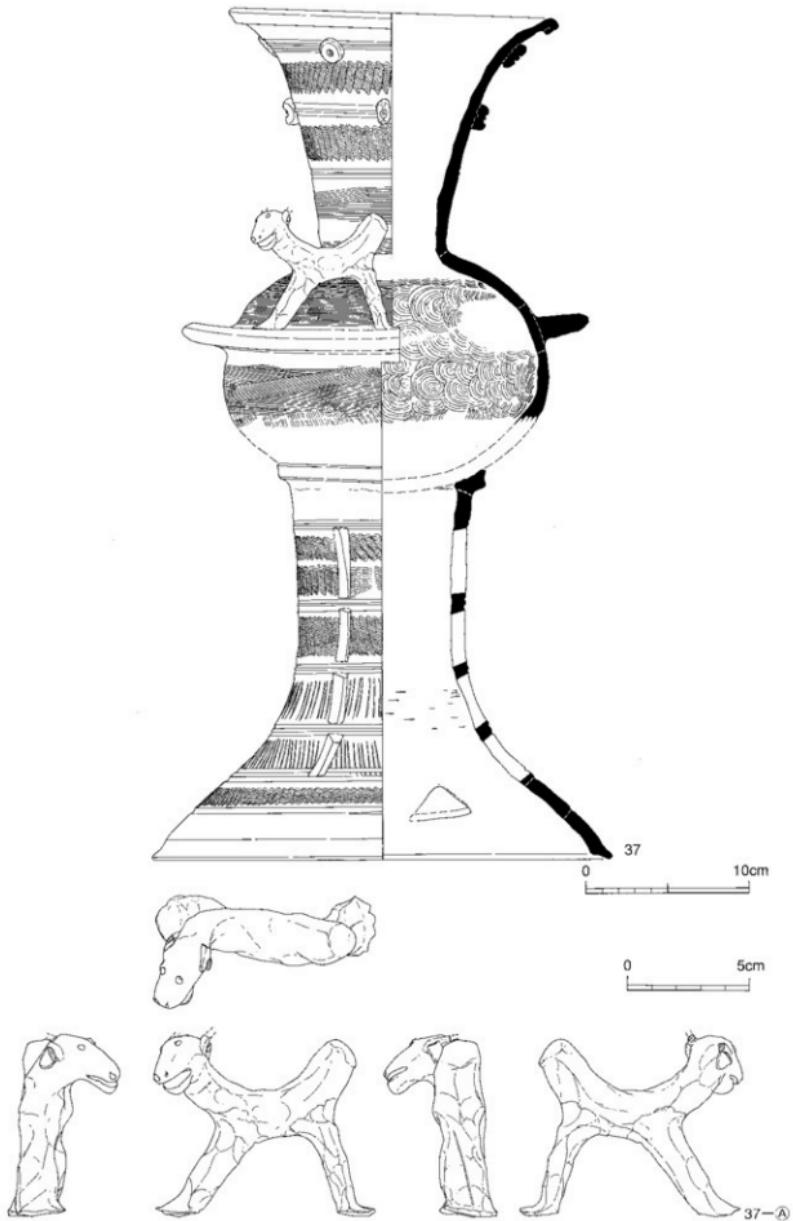


埴丘出土遺物接合関係図

福島 1号墳

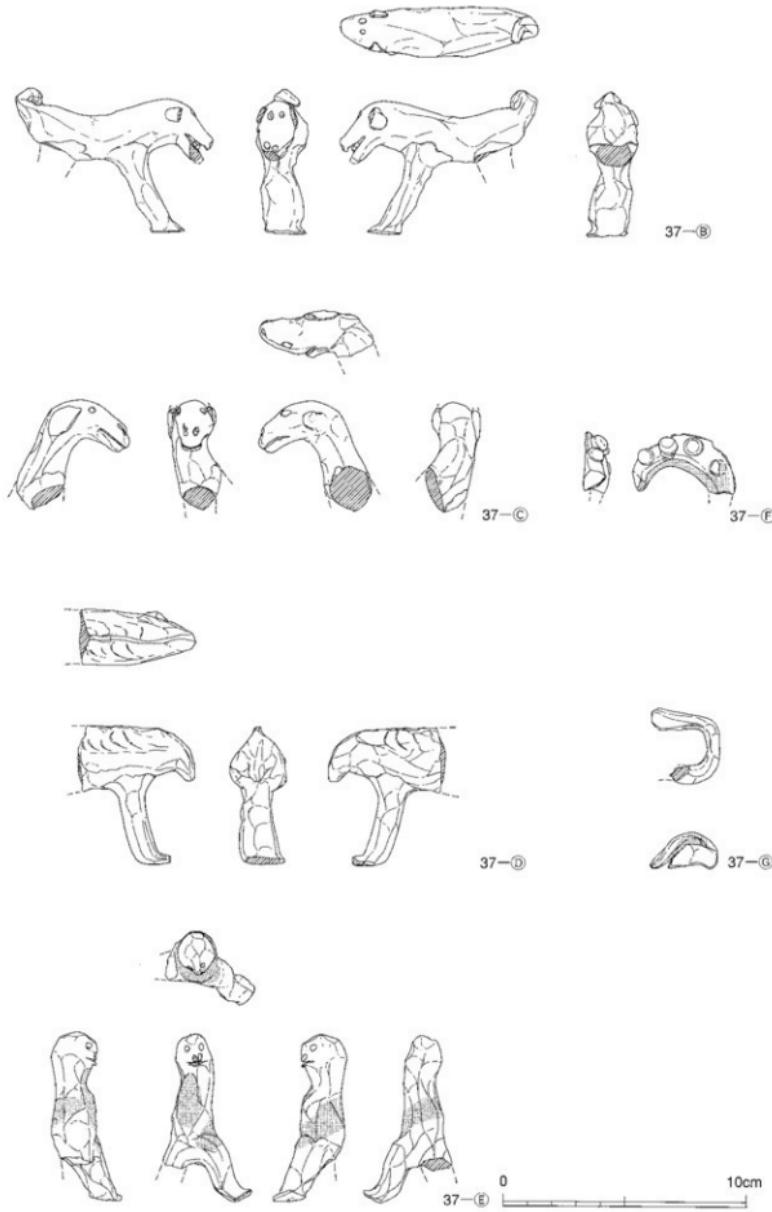


福島 1号墳



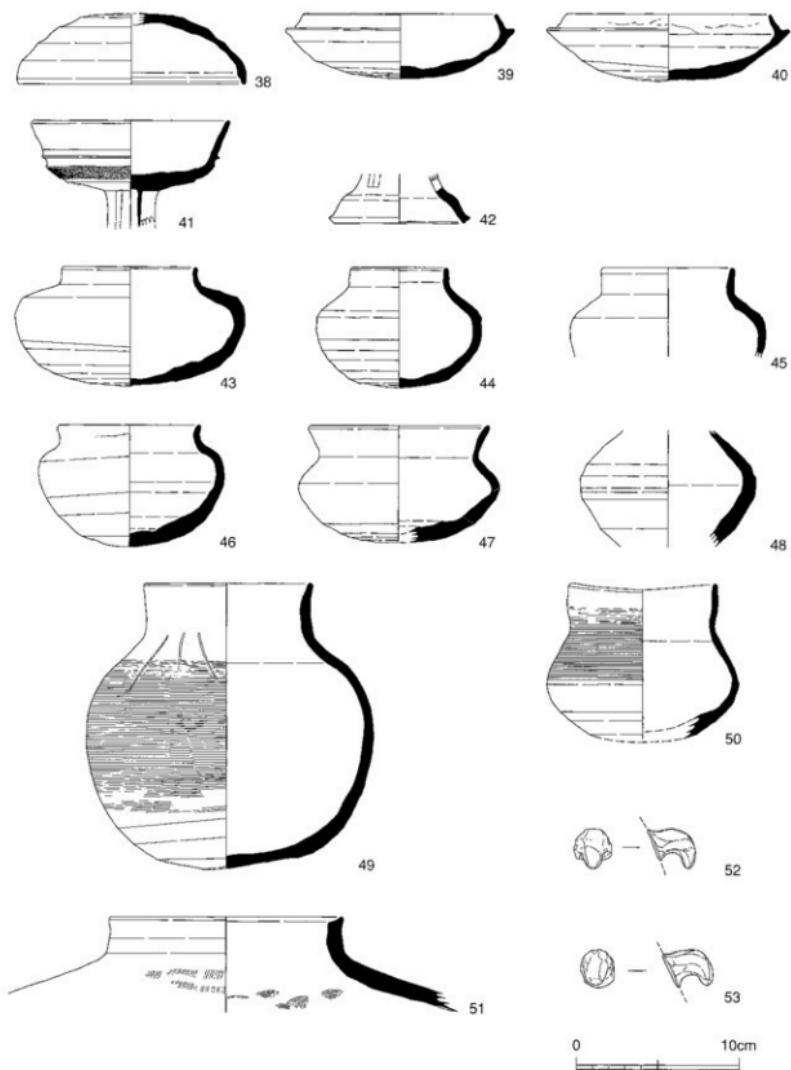
出土遺物 2 墓丘上・墓丘裾（装飾壺）

福島 1 号塙



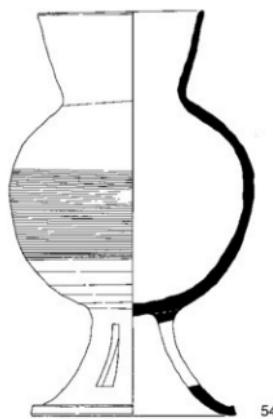
出土遺物 3 塙丘上・塙丘鋸（装飾壙）

福島 1号墳

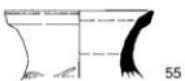


出土遺物 4 墓丘上・填丘根

福島 1号墳



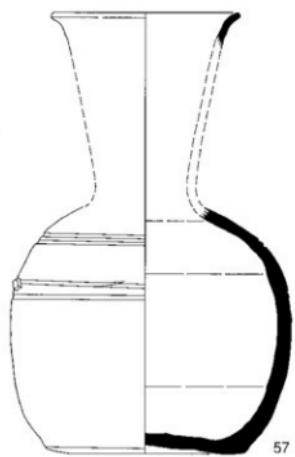
54



55



56



57



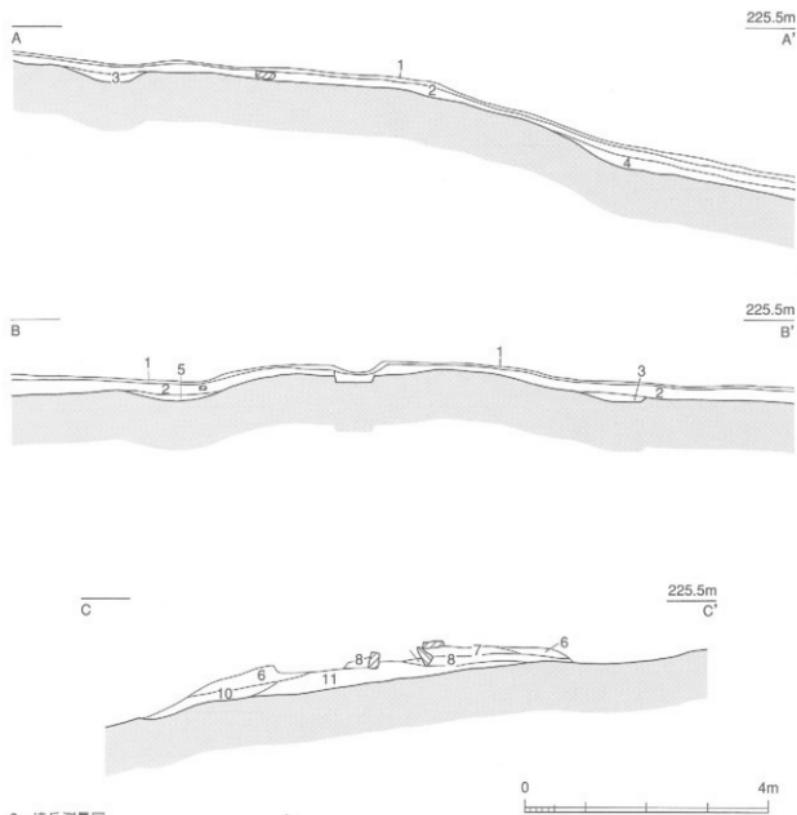
58



出土遺物 5 墳丘上・墳丘掘

福島 2号墳

1. 墓丘断面

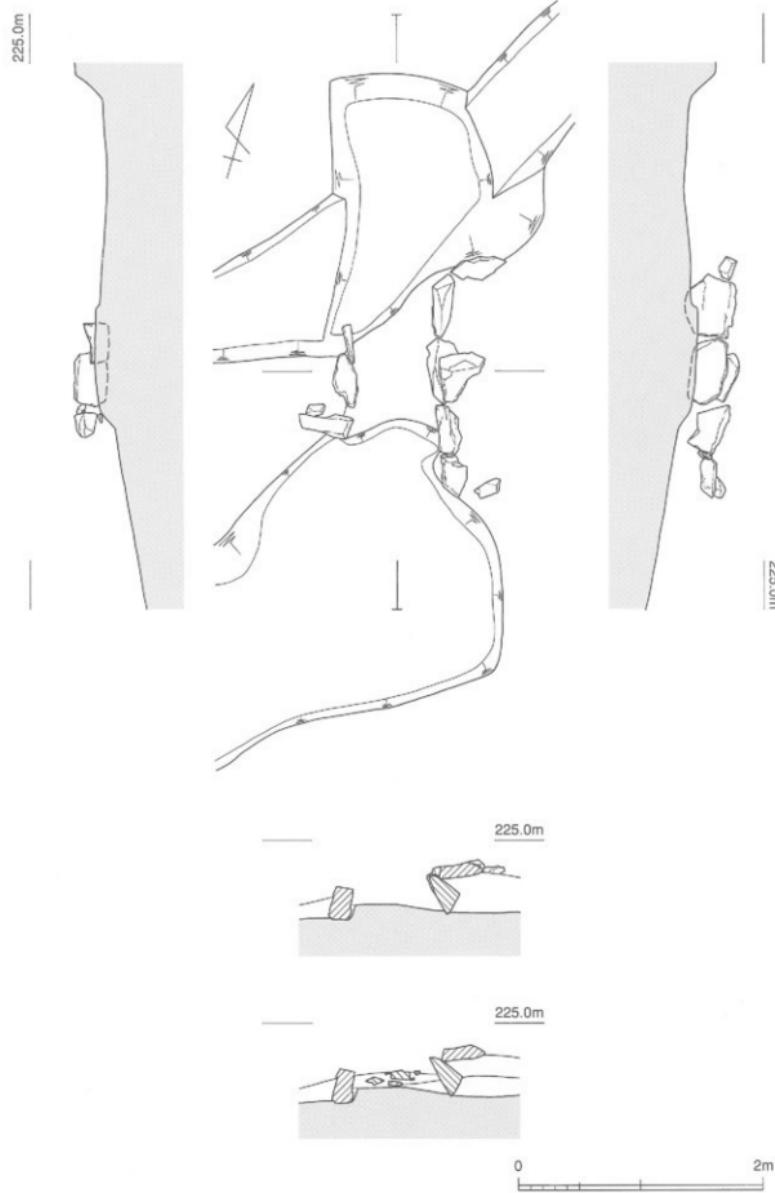


2. 墓丘測量図



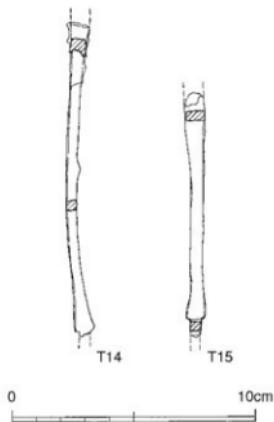
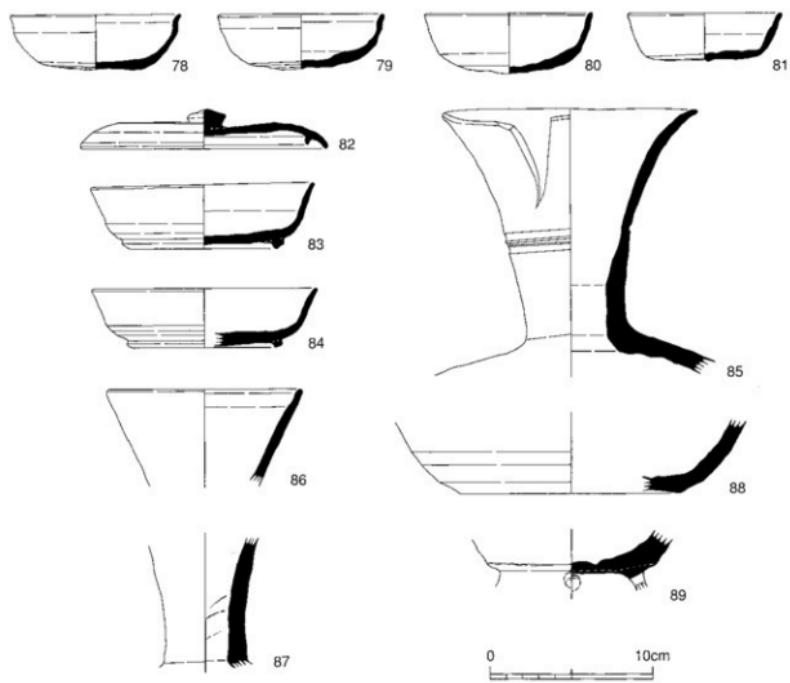
1. 表土
2. 黄褐色シルト質粘土（上岩含む）
3. 灰褐色シルト質粘土
4. 灰黄褐色シルト質粘土
5. 灰褐色シルト質粘土（小～中礫混）
6. 暗黄褐色シルト（細砂～中礫混）
7. 黄褐色シルト～暗灰褐色シルト（細砂～中礫混）
8. 暗黄褐色シルト～黄褐色シルト（細砂～中礫混）
9. 黄褐色シルト（細砂～中礫混）
10. 暗黄褐色シルト（細砂～中礫混）
11. 暗黄褐色シルト（細砂～中礫混）

1. 墓丘断面 2. 墓丘測量図



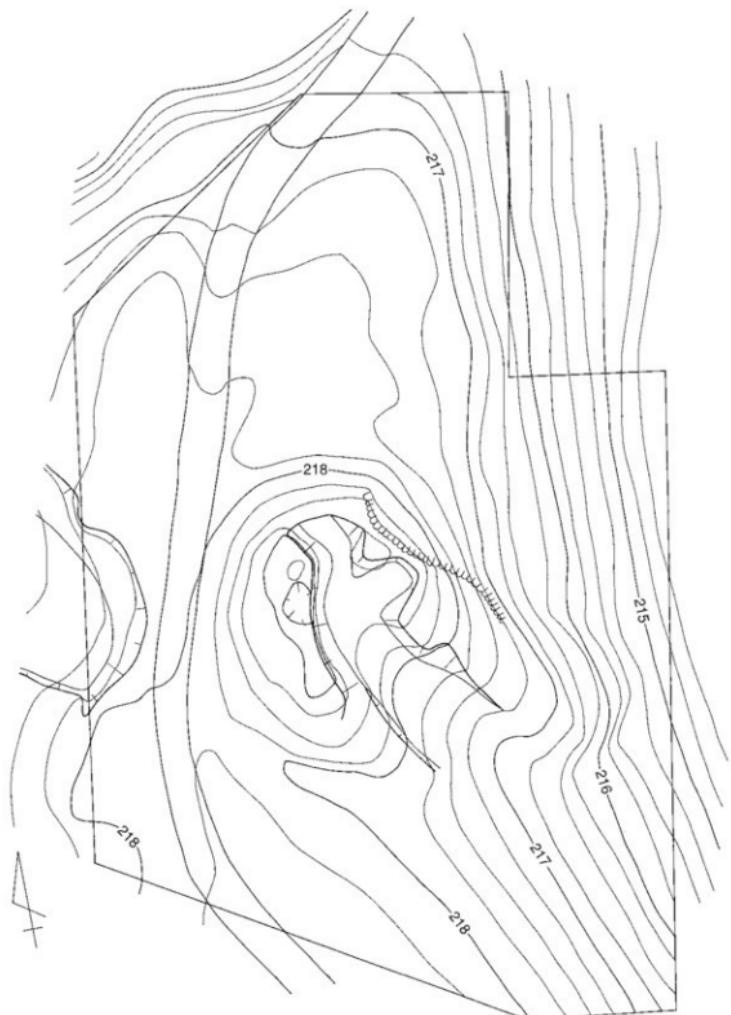
横穴式石室

福島 2号墳



出土遺物

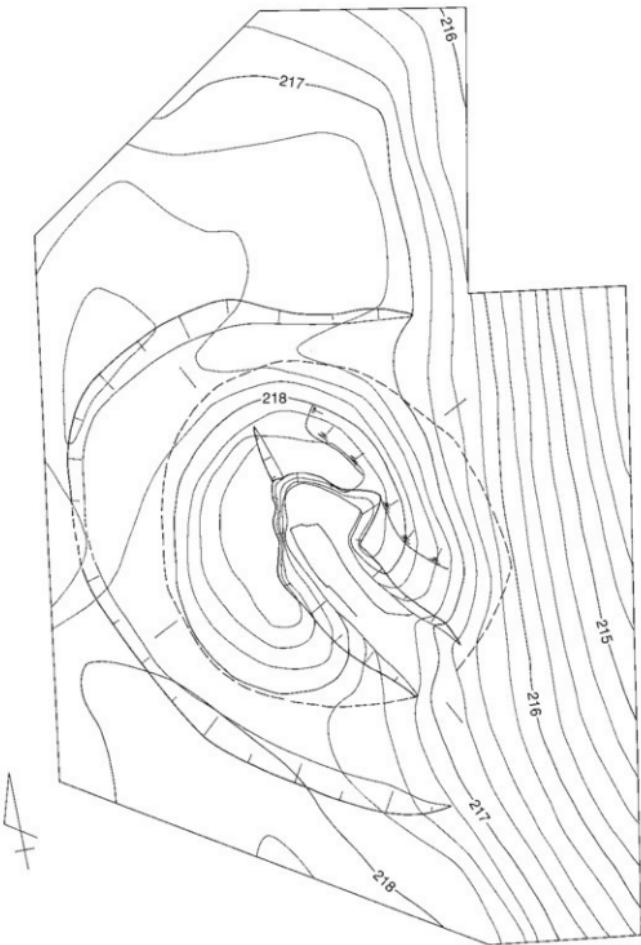
福島15号墳



0 10m

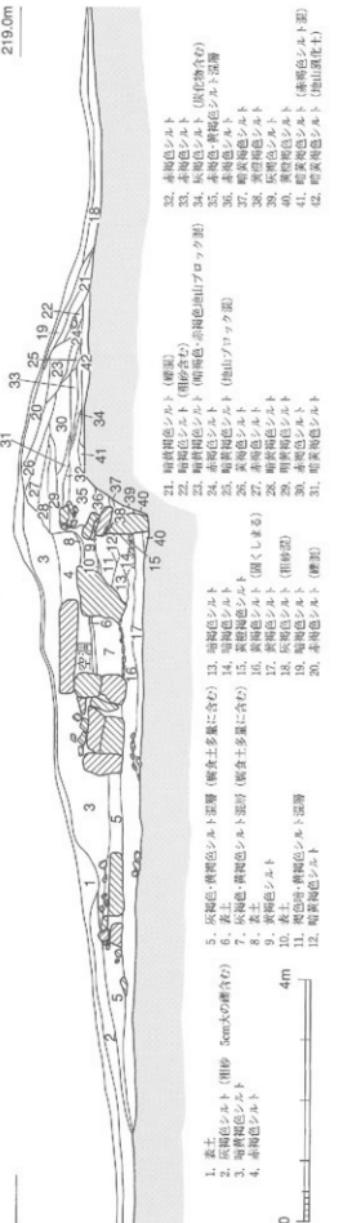
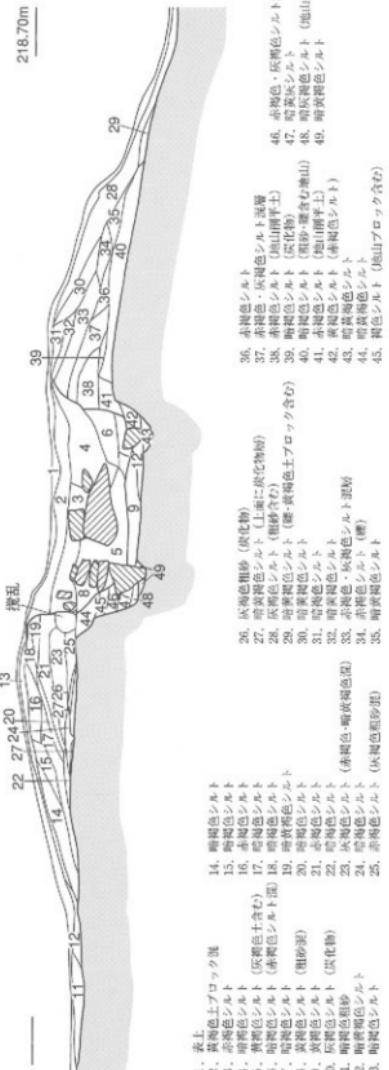
調査前の墳丘測量図

福島15号墳



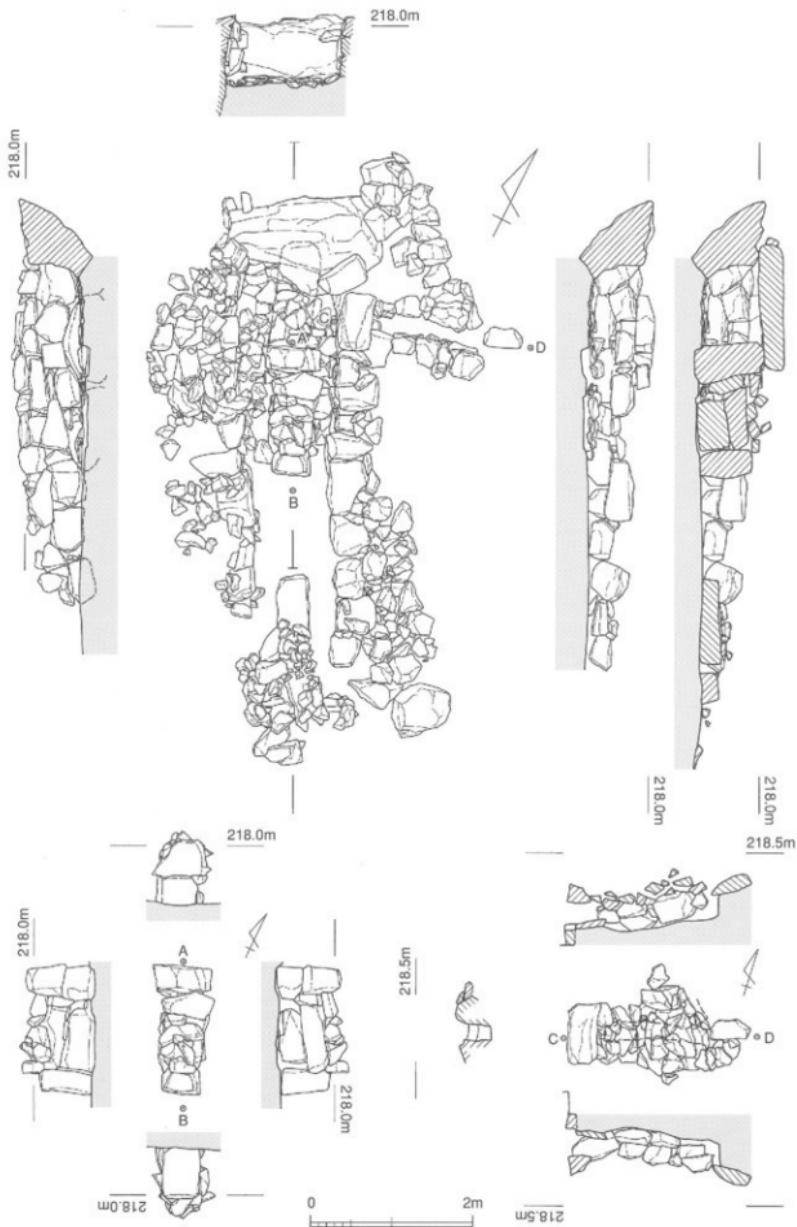
0 10m

墳丘測量図



墙丘断面

福島15号墳

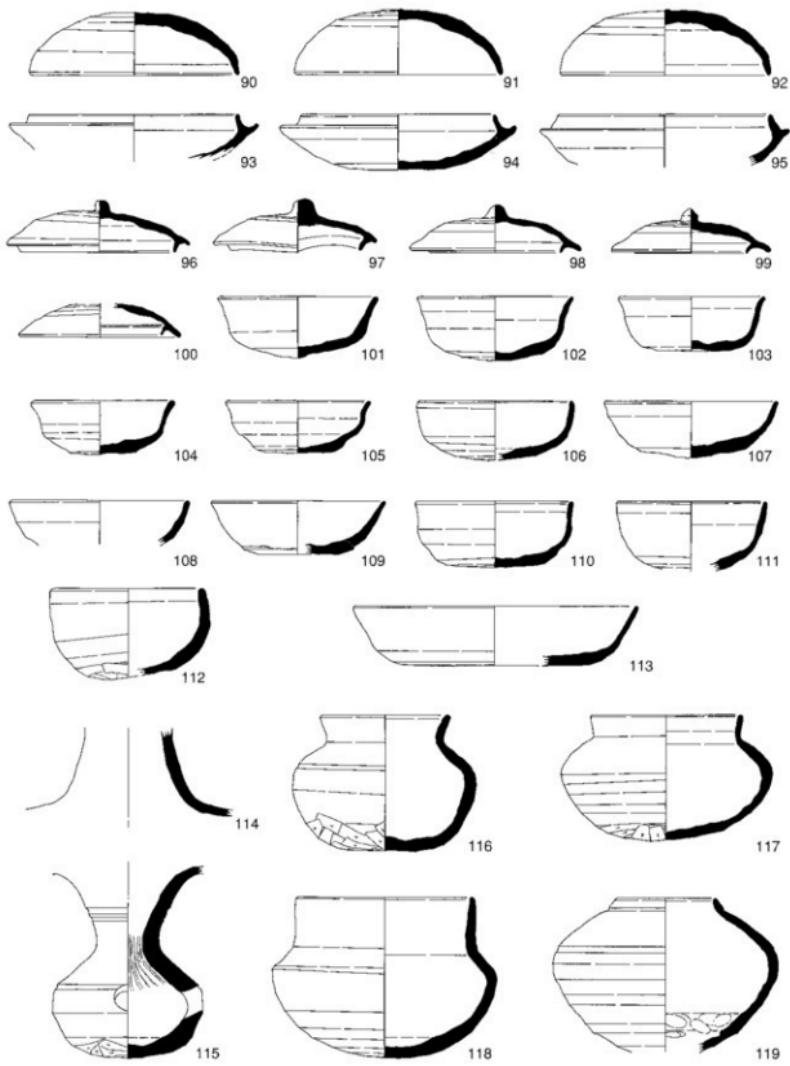


上層の石室

福島15号墳



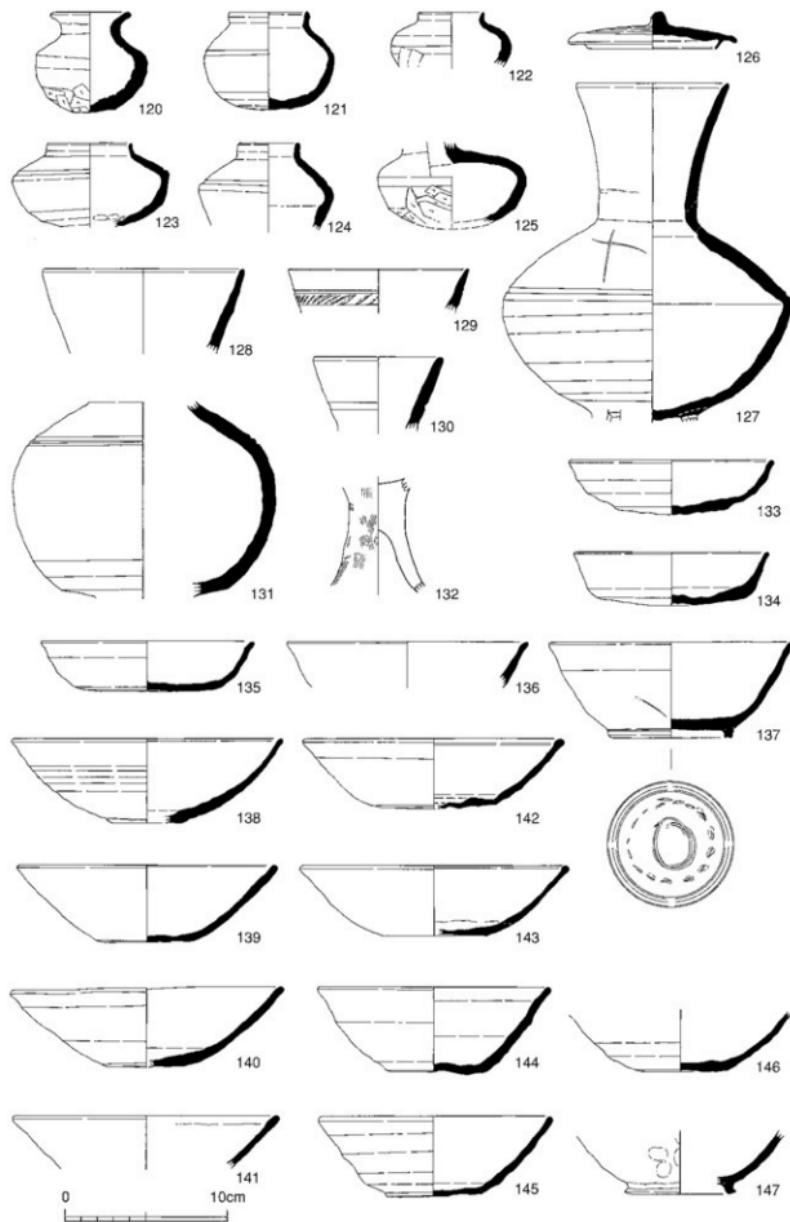
福島15号墳



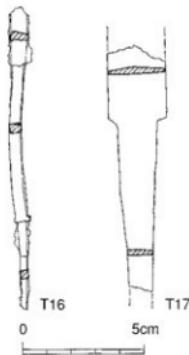
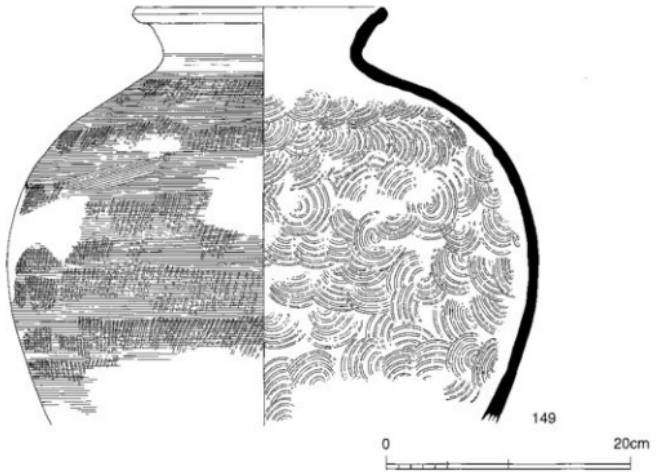
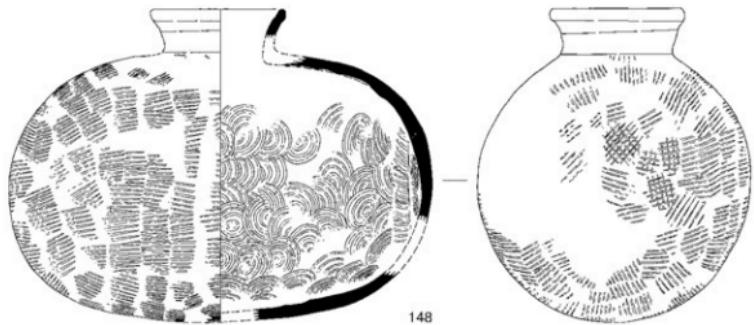
0 10cm

出土遺物 1

福島15号墳



福島15号墳



出土遺物 3

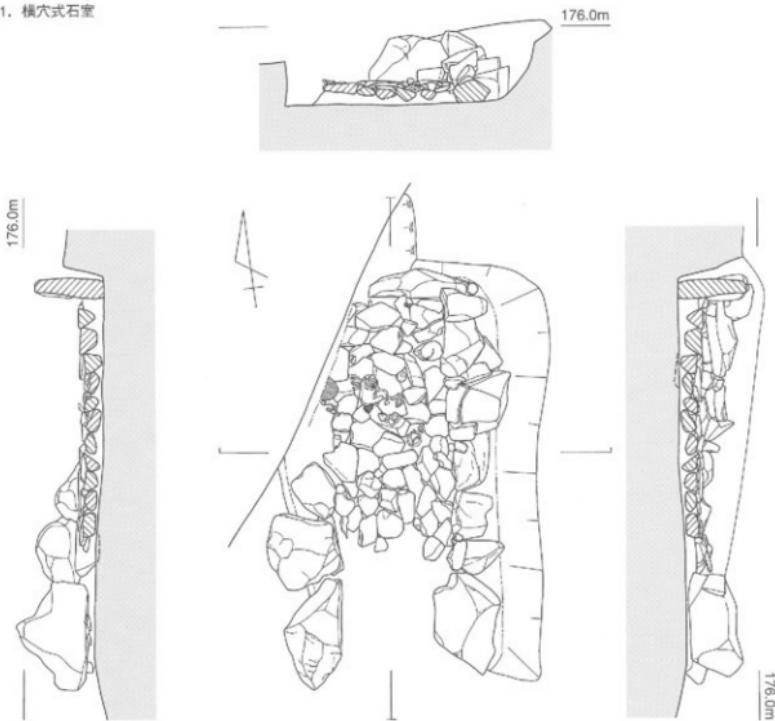
福島23号墳



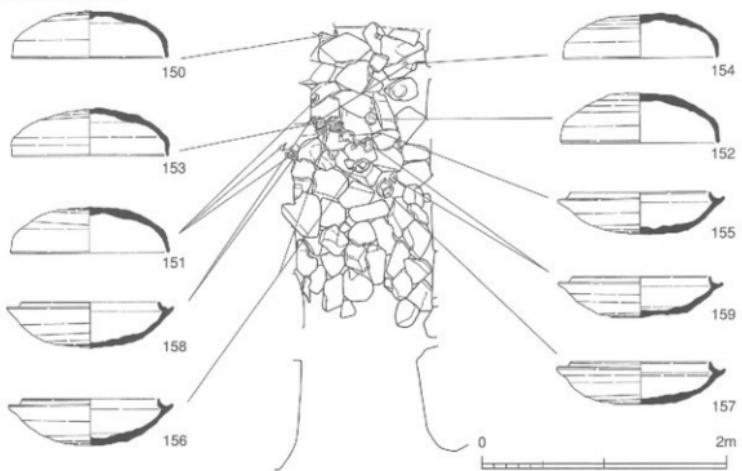
墳丘測量図

福島23号墳

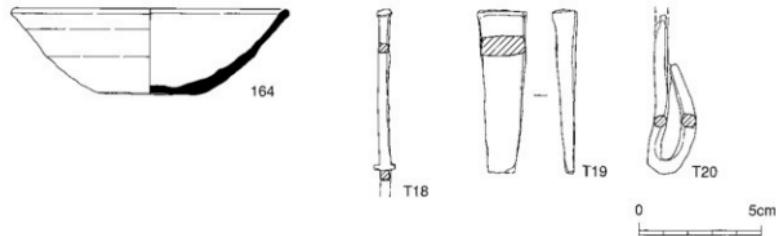
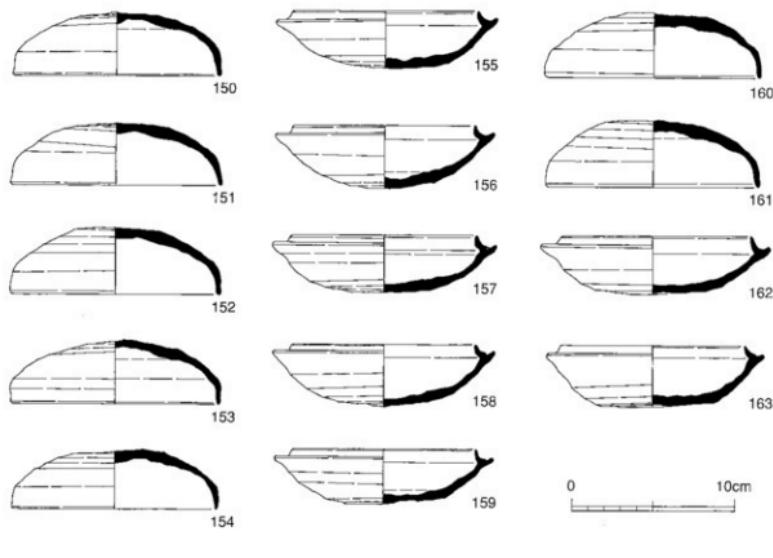
1. 横穴式石室



2. 石室内遺物出土状況

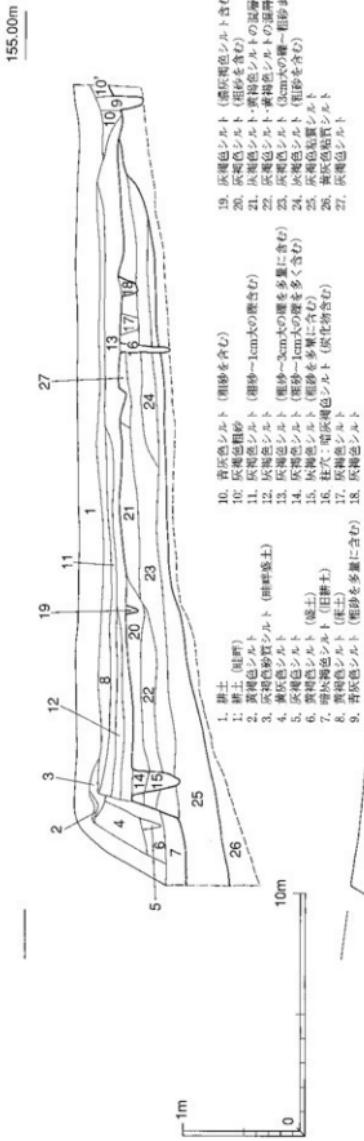


1. 横穴式石室 2. 石室内遺物出土状況



出土遺物

福島龍王谷遺跡



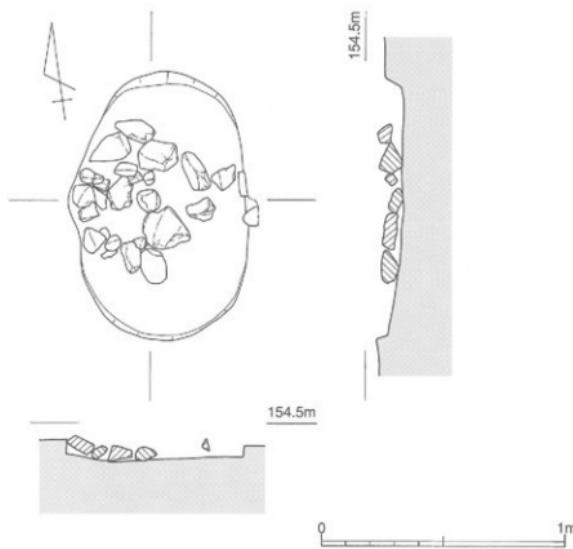
調査区全体図



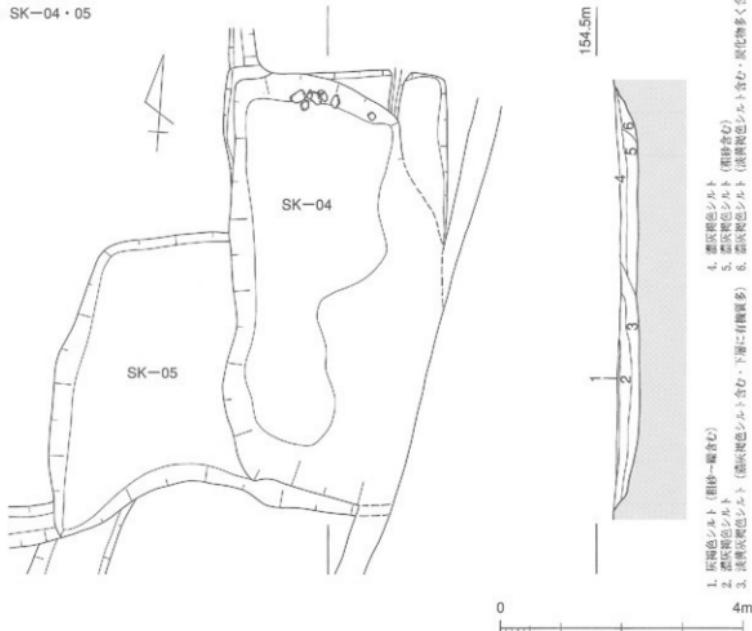
道路状造構とSK-03

福島龍王谷遺跡

1. SK-01

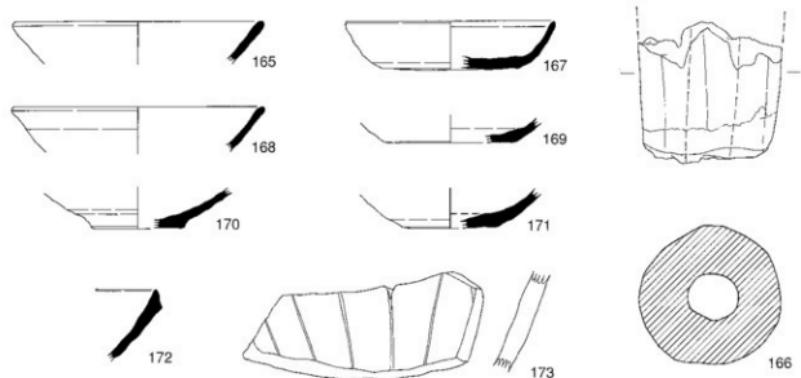


2. SK-04・05

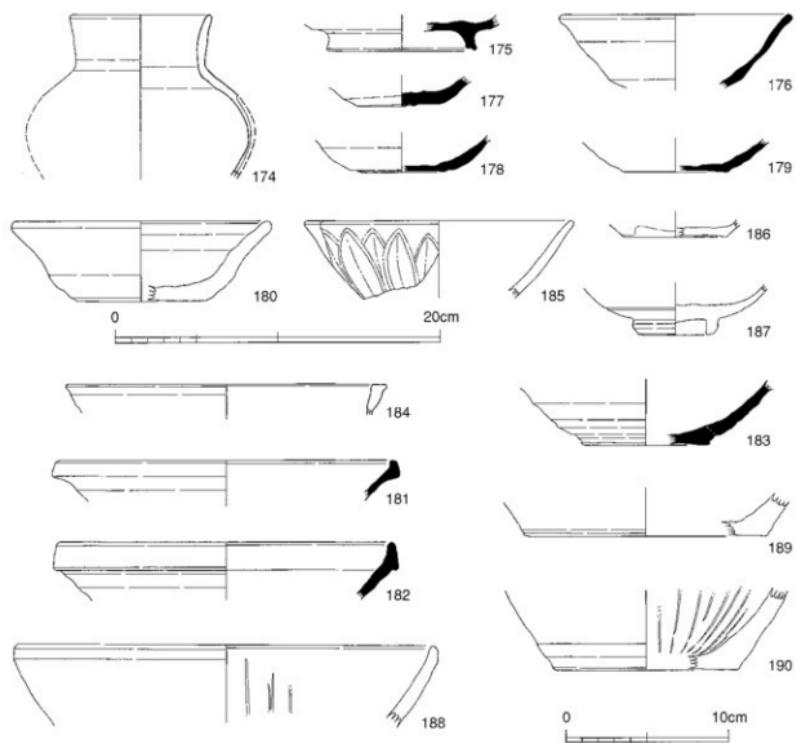


1. SK-01 2. SK-04・05

1. 遺構内



2. 包含層



出土遺物 1. 遺構内 2. 包含層

写 真 図 版



1. 遠景（南西から）



2. 遠景（南西から）



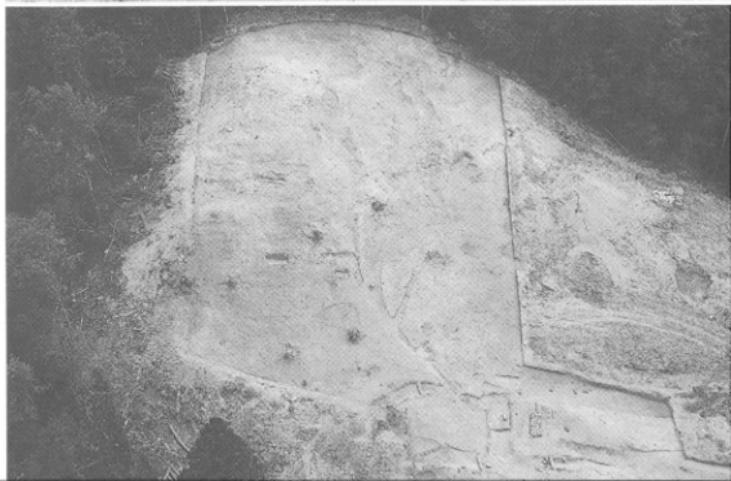
3. 全景（西から）



1. 調査後近景（南西から）



2. 方形周溝墓群全景（南から）



3. 南半の墳墓群（北から）



1. 調査前の状況（南から）



2. 全景（南から）



3. 全景（南西から）

福島22号墳



1. 主体部全景（東から）



2. 主体部東小口の礫群（北から）



3. 主体部土層断面（東から）

福島22号墳



1. 墓丘裾部の状況（西から）



2. 墓丘西裾部の櫛群（西から）
3. 墓丘西裾部の櫛群（南から）



4. 墓丘南裾部の櫛群（西から）
5. 墓丘東方の櫛群（東から）



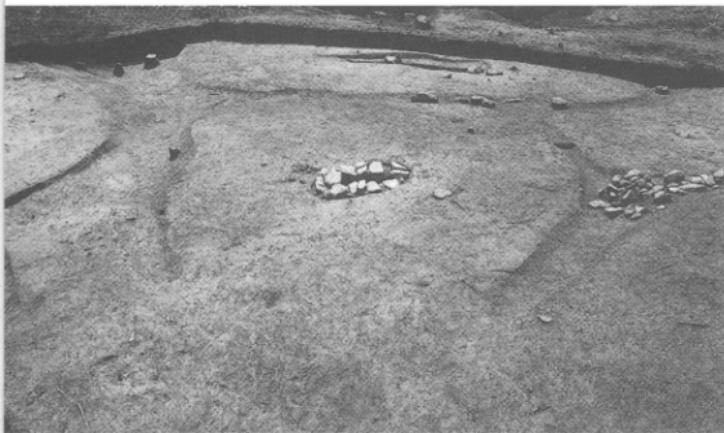
1. 方形周溝墓群全景（南から）

2. 斜面上方側の方形周溝墓群
(南東から)

SX-01

3. 全景（南から）

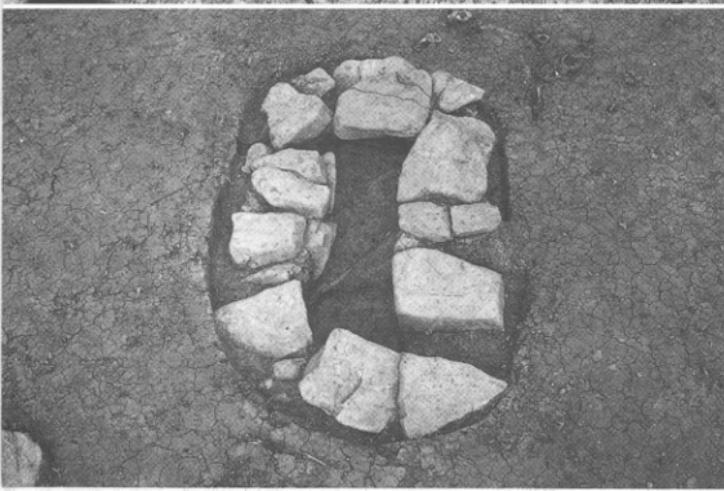
SX-01



1. 全景（北から）



2. 主体部石棺検出状況（西から）



3. 主体部石棺（西から）

SX-02



1. 全景（北から）

SX-02・03



2. 溝埋土断面（北から）



3. 溝内土器出土状況（北から）

SX-03



1. 全景（北から）



2. 主体部木棺（東から）



3. 主体部内土器出土状況（西から）

SX-03



1. 主体部木棺埋土断面
(西から)



2. 主体部西小口の砾群 (東から)

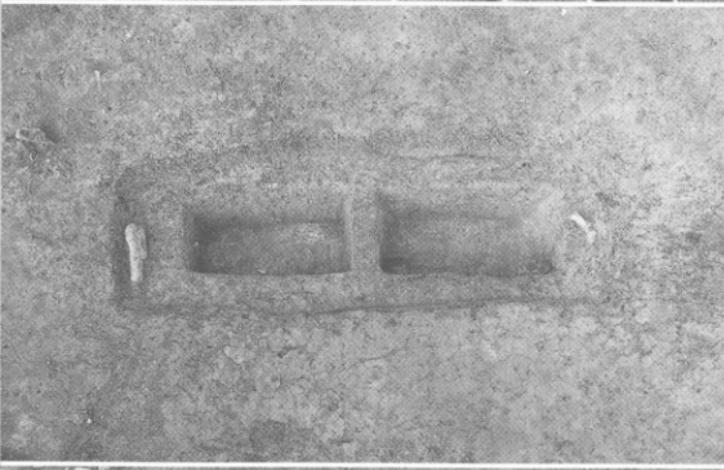


3. 墓壙完掘状況 (西から)

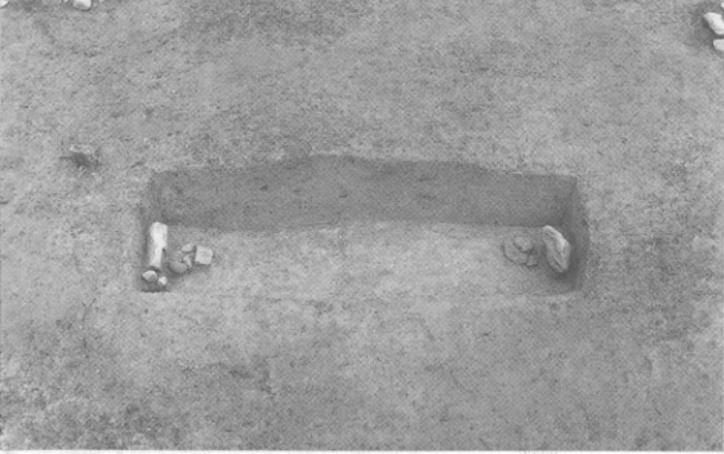
SX-04



1. 全景（西から）

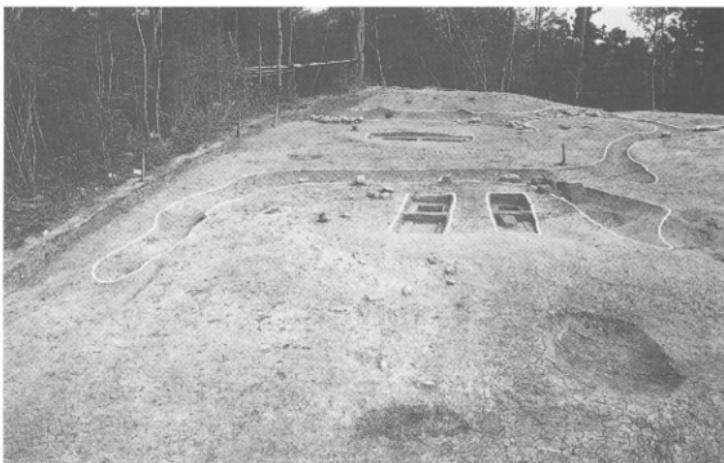


2. 主体部木棺検出状況（西から）



3. 墓壙完掘状況（西から）

SX-05

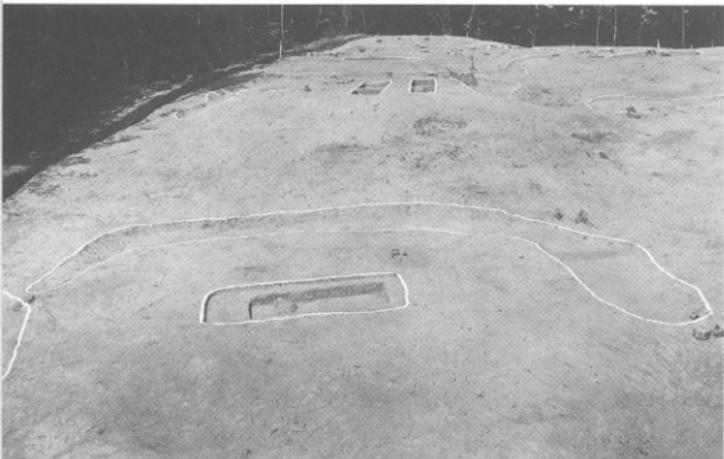


1. 全景（西から）

2. 第1・2主体部木棺検出状況
(西から)

3. 北東隅の土器群（西から）

SX-06



1. 全景（西から）



2. 主体部木棺検出状況（西から）



3. 主体部内土器出土状況
(西から)

SX-07



1. 第1主体石棺（西から）



2. 第1主体石棺の床面細部
(東から)



3. 第1主体石棺と埴丘の関係
(北から)

SX-07

1. 第2主体木棺（西から）



2. 第2主体墓壙完掘状況（西から）



3. 墓丘断面（西から）



墳墓群



1. 南半の墳墓群全景（北から）

SK-01



2. 木棺検出状況（北から）



3. 木棺内鉄器出土状況（東から）

SK-02



1. 木棺検出状況（北から）

SK-03



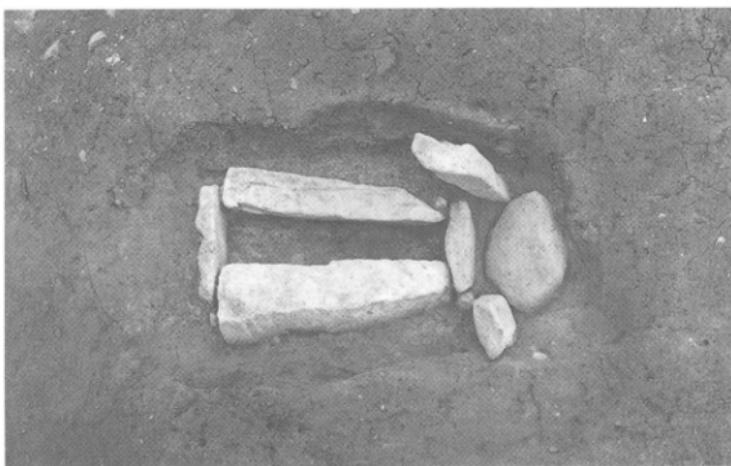
2. 木棺検出状況（北から）

SK-04



3. 石棺蓋石の状況（北から）

SK-04



1. 石棺検出状況（北から）

SK-04



2. 石棺断面（東から）

SK-05



3. 石棺蓋石の状況（北から）

SK-05



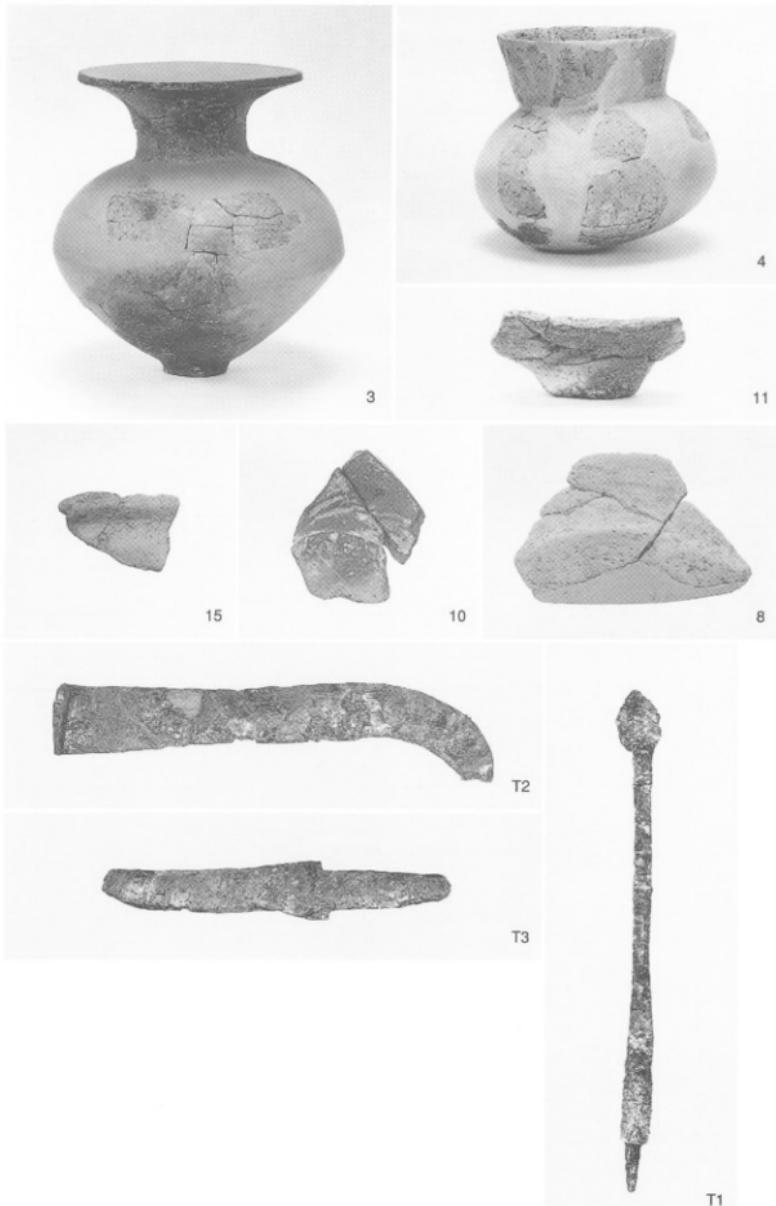
1. 石棺検出状況（北から）

SK-07

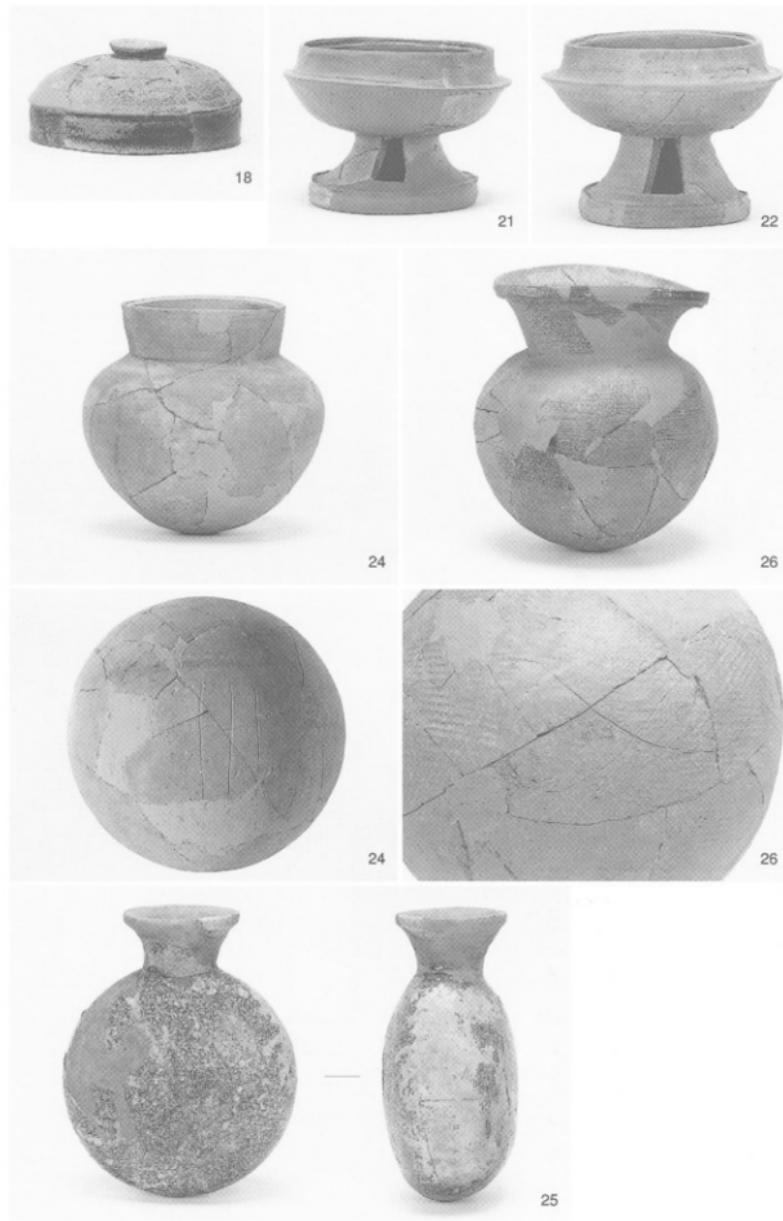


2. (南から)

福島平唐山遺跡

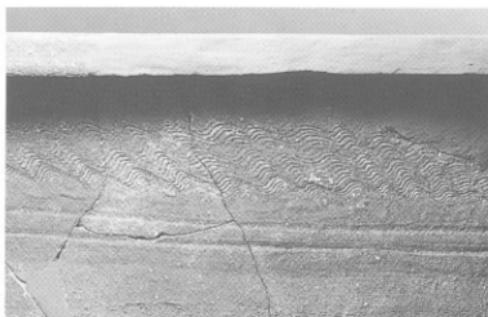


出土遺物（1）(SX-03・SX-05・SX-06・SK-01)



出土遺物（2）（SK-01下方土器群）

福島平唐山遺跡



27 頸部



27



28



30



T4

出土遺物（3）（包含層・出土・表面採集遺物）



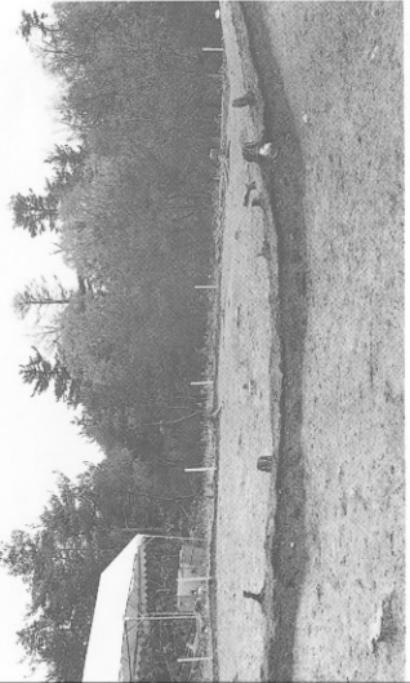
1. 調査前の状況（東から）



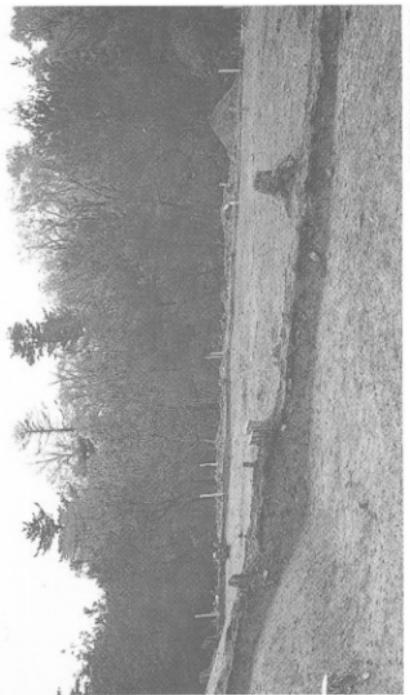
2. 墓丘（南から）



3. 墓丘（東から）



3. 西側周溝断面（南から）



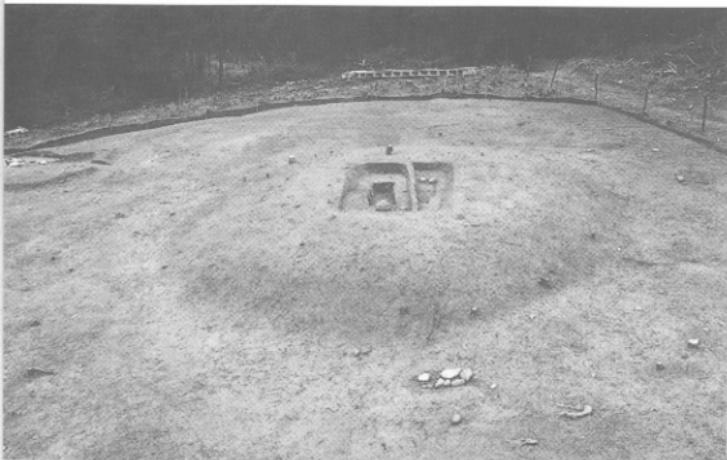
1. 北側周溝断面（西から）



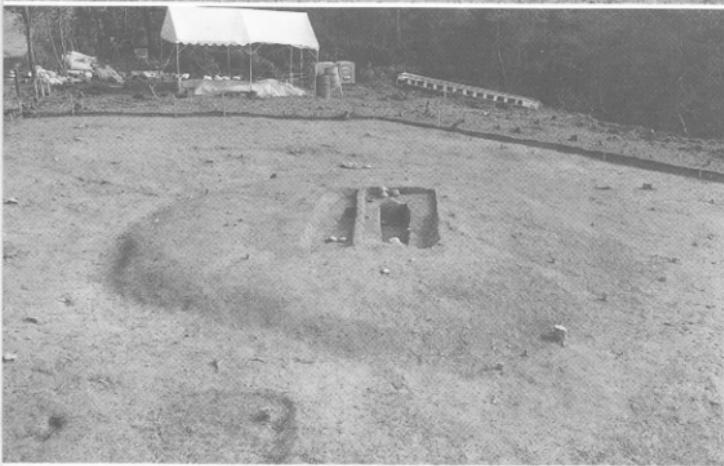
4. 東側周溝断面（南から）



2. 南側周溝断面（西から）



1. 全景（東から）



2. 全景（西から）



3. 墓丘上遺物出土状況（東から）

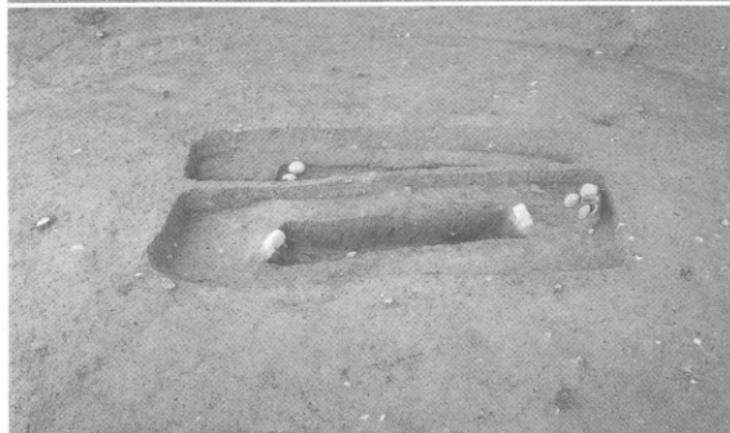
第1主体



1. 全景（西から）



2. 全景（西から）



3. 全景（南から）

第1主体



1. 上層土器群（西から）



2. 土器枕と上層土器群（西から）

第1主体



1. 下層土器群（北から）



2. 下層土器群（南から）



3. 下層土器群（東から）

第1主体



1. 土器枕（西から）

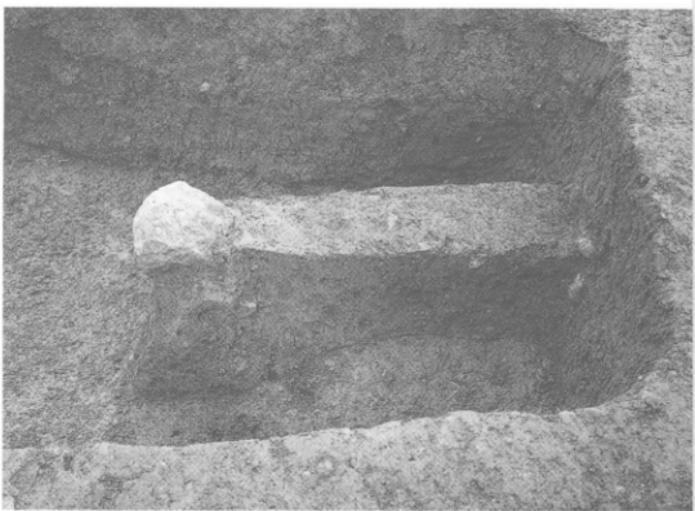


2. 棺内鉄器出土状況（東から）



3. 棺裏込め断面（西から）

第1主体



1. 西小口裏込め断面（北から）



2. 墓壙完掘状況（東から）



第2主体

1. 全景（東から）



2. 全景（東から）

第2主体



1. 土器枕（東から）



2. 墓壇完掘状況（東から）